

を以て、何の實効なく、こは四月三日土に送られしが、十二月を以て露に拒絶の旨申來れり。是に於て露土開戦は不可避運命に迫りぬ。最初より露の最も憂慮せしは列強の態度にあり。三帝同盟は露に取り甚だ好都合なるが如く、事の初めより常に三國中心となり、普墺二國が露の爲めに中立をなす事は確なりき。されど前述の如く、墺は東方に利害關係を有するを以て、之に陷すに利を以てせしが、ゴルチャコフは又空漠たる理想論に過ぎざるバンスラヴィストの思慮なき行動が、匈牙利人に不快を與へ、墺政府に不安を與へん事を恐れ、頗る之が慰撫と辯解とに力めたり。されば露の最も恐るゝ所は英土間の同盟なりき。英の保守黨内閣は、ディズレーリが首相として最も強硬なる態度を取りたるが、土人の暴虐は痛く英人の感情を害し、グラッドストンの自由黨は切に政府の態度を攻撃せり。されば英が土と攻守同盟を結びて露と干戈を交へん事は至難なりき。ゴルチャコフは外列國の態度を察し、内軍備の整頓を見、遂に斷然開戦するに決せり。

一八七七年四月十二日、土の拒絶狀を得るや、越えて十四日露は直ちに動員令を發し、軍隊の通過地たるルーマニアと攻守同盟を結び、宣戰詔勅は月の二十四日

を以て公表せられたり。

準備既に完き露軍は宣戰布告と共に直ちに南進し、何等の障礙なくシブカ越まで侵入せり。然るに其西方にブレヅナ要塞に於ては有名なるオスマン・パシヤ精兵三萬五千餘に將として、頑強なる抵抗を試み、七月より數度の攻撃は常に多大の死傷を遺して退却となり、別路の先發隊如何ともなし難く露軍一時窮迫を極む。是に於てルーマニア大公援兵を將ゐて來會し、露帝亦自ら出陣す。攻撃六箇月遂にクリミア戦争の名將トートレーベンの謀を用ひて辛うじて屈するを得、十二月中旬、土耳其唯一の名將も、開城の已むなきに至れり。然れども此役に於ける露軍の損傷莫大を極む。ブレヅナ既に陥る。露軍は疾風の如く南下し、翌年一月二十日、アドリアノーブルを占領し、其先發隊は早くもマルモラ海に達す。高加索軍亦カルスを拔き、其他土領内歐人の叛各地に相亞ぐ、土耳其帝國の運命方に迫る。駐土英公使は本國に打電するに、露軍の將にコンスタンティノーブルを占領せんとする旨を以てす。上下沸騰、斯くて英艦六艘は海峽を過ぎて土京前面十哩に碇泊し、迥に露の陸軍と相對す。是に對し、ゴルチャコフは直ちに英政府に向け英艦隊

にして萬一ボスポロスに到らんか、露軍は土都を占領すべきを以てす。埃は終始中立を守りぬ。されど國內諸人種間の動搖漸く激しぬ。動もすれば露軍と衝突せん患ありき。

ブレヅナ陥落後、土は直ちに列國に仲裁を求めしも、露は他國の干涉による講和を拒絶し、爲めに兩國休戦談判は一月十九日より初まりしが、容易に纏まらず、三十一日に至り、漸く休戦規約成り、更に三月三日、兩國全權は土京を離る數哩のサンステファノに於て和約を締結せり。其主なるものを擧ぐれば左の如し。

- 一、モンテネグロ、セルヴィア、ルーマニアの獨立を承認す。
- 一、ブルガリアは土の藩屬國として、自治權を有し、基督教の政府を建つる事。其版圖は北はルーマニアに接し、南は黒海岸のミチアよりアドリアノーブルの北を経てサロニカに至り、更にアルバニアのオクリダの西に連りてセルヴィアと隣接せり。

一、ボスニア、ヘルツェゴヴィナの二州には自治を許す事。

一、土は總計十四億留餘を露に賠償する事。但し其中十一億に代つて、ドブルヂ

ヤアルダハン、カルス、パツーム、及びバヤジッド等を割讓する事

等なり。されど露は露土間の同意を示すのみにて、之を確實にせんには巴里條約關係の他の五國の承認を経ざるべからず。

此條約中最も重要なるはブルガリア國の建設にあり、同國の包有する面積は實に土の半以上に達し、而して露は之に行政軍事上の監督權を有す。露は事實上、半島の大半を保有して、多島海に境を接したるものと云ふべく、英の恐慌知るべきなり。英外相デルビーは嚴重に其違法を責めて、同條約の全部を列國會議の議題とせん事を主張し、之に對しゴルチャコフは一步も引かず、列國に於て如何なる議決をなすも、こは彼等の自由なり。されど其議決を認むると認めざるとは吾權限内に存すと答へたり、英露開戦の期日に迫る。幸に英露兩國使臣宰相の屢なる打合せと獨帝の盡力とにより、露は一步を譲り、五月三十日、兩國密約を結び、更に英は土と政府同盟を結びてキプロス島を占領する事とし、遂に伯林會議は開催せらるゝ事となれり。

伯林會議に先ち一言せざるべからざるは外交界の大怪物ビスマークの態度な

り。元來獨は此事件に直接に利害なし。されば始終表面的活動をなさず、利益を求めざりき。然れども斯かる最も利用すべき機に當りビスマルクたるもの豈に晏居して已むものならむや。外交史家の語る所によれば、此事件の發端たるボスニア、ヘルツェゴヴィナの叛は、奥露の注意を東向せしめん爲めにビスマルクの煽動に係りしものなりと。遂に信すべからずと雖、事件發生以來の彼の態度は實に狡猾の極に達したるものなり。三帝同盟の主唱者として彼は陽に奥露間を斡旋して共同動作を爲しめ、ゴルチャコフをして十分彼に信任を置かじめたり。露相は事の初めに當り獨相を脅すに獨が露に與せざるに於ては對獨復讐に腐心しつつある佛を煽動して、其後援をなすべきを徹めかしたるや明かなり。獨相は隱忍努めて好意を露に示しつつ、實は奥相と結托して暗はしむるに十分の利を以てし、又英露間事急なるや又巧に英にキプロス占領を許して兩國の調停計りぬ。斯くしてビスマルクは一方に平和維持者としての名譽を荷ひつつ、一方には其苦肉の計は不幸なる露國の地位と相伴ひて、全くゴルチャコフをして孤立せしむるに至りぬ。然るに土耳其問題解決の列國會議は伯林に於て催さるゝ事となれり。ビスマ

マークの態度察すべく會議の結果は半既に明かなり。

是より先、二月四日、埃主唱となり、其國都に於て列國協商を開く事を提議せしが、三日の後議變じ伯林に列國會議を開く事に定まりぬ。同じき十九日、ビスマルクは帝國議會に演説し、自ら忠實なる仲介者として公平なる調停の勞を取る旨を宣言せり。

伯林會議は六月十三日よりビスマルクの邸宅に於て開かれ、國際法の禮により彼自ら議長となり、土耳其及び六列強の代表者來會す。外に半島に於ける四國の使亦列席す。此時ゴルチャコフ年正に八十、多年國事に身命を忘れて盡瘁し、殊に此事件發生以來四ヶ年に互る間、一身以て萬機を總攬し、心身の疲勞甚しく、最後の此大切なる時期に於て遂に重病に罹りて臥褥し居りしが、當面の敵國英よりピコンスフィルド及びソールスベリ來會の報を聞くや、決然病を忘れて奮起し、病軀を冒し、シウロフを従へて伯林に會せり。

此度の事變たるや、實に近世外交の秘術を傾注したるものなるが、今や此會合は其頂點に達し、英露宰相と議長たるビスマルクの偉大なるを初めとし、埃にはア

ンドラシーあり。佛のワデントン、伊のコルチ、土のメヘット、アリ以下何れか當該諸國の代表的人物ならざる。此外交家の粹を集めたる會合や、實に空前の偉觀なりと云ふべきなり。

此會議に就きて詳叙するは、甚だ興味深けれど、其事能はざるは遺憾なり。會議の中最も主難なるは勿論ブルガリア版圖問題なり。英相も露相も毫も讓歩の色を示さず。數度の公會議私談判も効なく、ゴルチャコフ憤然として地圖を卷きて去らんとすれば、ビコンスフィールドは、唯戰あるのみと豪語して歸裝を調へ、又或る時は二人の手控とせし秘密地圖が如何なる間違にや入違ひになり居し如き、珍事ありき。是に於て、忠實なる仲介者「ビスマーク」は利害に托して極力露を壓ふると共に、談判の破裂を防ぐに盡力し、英露兩相へ數度の往復説得の後、辛うじて六月二十二日、第四回會議に於て、同問題は露の屈服により解決せられしが、ゴルチャコフは病を抱きて、遠く反對國の國都に斯かる壓迫侮辱を受くるを憤怒の餘り宿痼愈、重く爲めに會議に臨むこと能はず。然るに塙は英の後援を得て廿八日には、塙露亦抗爭し、シユクロフは孤立如何ともなす能はず。塙は全くボスニア、ヘルツェゴ

ウ、ナ占領を確實にしたり、斯くて七月十三日、列國委員の署名を終へ、八月十三日批准交換となりぬ。今サンステファノ和約中重大なる變化を受けしものを擧ぐれば大要次の如し。

- 一、ブルガリア領土に大削減を行ひ、面積一六三、〇〇〇平方吉米は六四、〇〇〇吉米となり、人口四百萬は百五十萬に減せらる(巴爾幹山脈以南に出でざらしむ。同國假政府は其編制を完成するまで露委員の指揮を受くる事。
- 一、新に同山以南に東ルーメリア國を創設し自治を許すを條件として政治上軍事上の權は土帝之を保留す。
- 一、モンテネグロは土地を削られセルヴィアは増加せり(こは皆塙に利益となる)
- 一、ルーマニアはベッサラビアの地を露帝に返上し、其代償としてダブルチャの地を得。
- 一、露は上の外、亞細亞に於て、土よりアルダハン、カルス、バツームを得、アラシチルド及びバヤジッドは之を還附す。
- 一、露は償金として土より八億二百萬法を受くる事(一八七九年二月八日の露

土條約。

斯くしてゴルチャコフ最大目的なりし大ブルガリア建設は全く失敗に終り、數萬の人命と數億の軍資とを費して贏ち得し所は僅に如上歐亞の土地と賠償金のみ。然るに塙は二地を占領し、東向の便を得、英はキプロス島を得、獨は直接何等の報償を得ずと雖、外交上大なる成功を博しき。翻つて半島諸國は豫期の如き結果を得ず、又露の態度に不快を感ずるあり(ルーマニアの如き)て漸次露より離れんとし、半島諸國尙幾多の紛擾を重ねしが、日露戰役後の露の疲弊に乗じ、塙が二地の永久合併を斷行し、ブルガリアが獨立を實行せしは尙人の耳目に新なる所にして、之を要するに爾後半島に於ける露の勢力は寧ろ減退に向ひしと見るべく、ゴルチャコフ老後の苦心慘愴たる計畫全く失敗に了りしは誠に憐じに堪へたり。伯林會議の失敗の原因は細説せば種々あるべきも、其最大因はビスマルクの露國壓迫に存するや勿論なり。ゴルチャコフの憤怒知るべく爲めに獨露關係は叔甥兩帝在世の間のみ、辛うじて保持せられしが、其後永く仇敵となり、ゴルチャコフは佛に近づき、遂に一八九一年の露佛同盟となりて今日に至れり。

(767)

一八八二年、ゴルチャコフ公は功成り名遂げて八十四の高齡を以て皇帝の優渥なる待遇を受けて、遂に全く政界より退隱し、壯年時代よりの愛賞地バーデン・バーデンの別業に其餘生を樂み、遂に翌八三年三月十二日、溘焉として逝きぬ。彼はビスマルクと並びて十九世紀に於ける二大外交家にして、外交事務に歷任する實に前後六十餘年、一日も彼を閑地に遣したる事あらず。彼はアレキサンデル二世即位と共に拔擢せられてより約三十年、露の中央政局に立ちて帝を翼賛し、未だ一度も帝の信任を失ひし事あらず。然れども彼の本領は主として外交にあり。されば其内政に於ては帝及び其同僚に委して自から其手腕を振はんとせざりき。ゴルチャコフ公が稀世の偉人なるは何人も疑はざる所然れども彼は誠に困難なる時代に出でたり。彼の中央政局に立ちしは既に耳順の齡に近き頃にして、其れまでは頑固なる老帝とネッセルローデありて彼は其自由なる手腕を振ふ能はざりしなり。若し彼にして老帝ニコラスの左右にあらしめば、或はクリミア戰役は起らずして已みしやも計り難し。彼は此敗衄と内政疲弊の絶頂に達したる時に

政務に當れり。其事業の地味にして顯はれざる誠に已むを得ざるに出づ。然るに既に全政權を收めてよりは嘗つて彼の弟子視したるビスマークが形勝なる歐洲中央に現はれて一大勁敵となりて彼と角逐するに至れり。而も彼の國情と彼の外交とは不幸にして最後に大にビスマークの惡辣なる政略に利用せらるゝに至れり。誠に笑止の至なりと云ふべし。彼の後未だ彼に及ぶ人物あらず。露の國情振はざるに反し、獨逸は軍事産業學問到る處可ならざるなく、現時全世界畏敬の中心となれり。知らず何れの日か、第二のゴルチャコフ出で、彼の抱負を實現し、露都を外交界の中心たらしむるものぞ。

第十九章

一 露國の怪傑

ポビエドノスツェフ

コンスタンティン・ポビエドノスツェフ (Konstantin Pobiedonosteff) は一八二七年に生る。莫斯科大學の教授として民法の講座を擔任し、著書尠からず。一八六五年、時の皇子ニコライ大公不慮の禍に死するに及び、推されて當時二十歳なりし新皇太子の侍講となり、國法及び行政法を教授するの任を委ねられぬ。幾もなくして太子は亡兄の妃ダグマーと結婚したり。太子妃は實に現皇太后なり。爾來ポビエドノスツェフは日に日に太子の宮殿に出入して、親しく二人に接し、熱心、彼等に鼓吹するに已れが獨得の人生觀を以てせり。曰く、我スラヴ民族國家生活の基礎たるべきものは唯一の神意によれる、而も史的發展に根柢せる專制主義と正教信仰とを措きて他に頼るべきものなしと。彼は當時の學界に鳴れるジセフ・ド・マイストルが宗教法學の論法とて盛に希臘加特力の使命の西歐の異端を服するにある旨を論じ、以て太子の意を動かしたり。皇太子は又他の侍講の曖昧なる立脚地に

傾聽するよりも寧ろ明晰にして論理一徹せる彼の言説を喜びたり。此十有五年の撓まざる彼の勤勞は彼をして終に一八八〇年トルストイ伯の去るに及びて其後を襲うて宗教院總監の顯職に就くを得るに至らしめぬ。西歐諸國の稱して國教教化局と云ふ所のもの實に是なり。彼今や此高位に陞りて權威赫々、僧正會議の決議も彼の許可なくしては之を行ふことを得ず。無數の教會學校は彼が指導と監督との下に立ち、而して彼は一方に於ては國務顧問として又閣僚の一人にして内閣會議に列せり。蓋し思ふに宗務院の職たるビートル大帝の創設する所にして、其一國に於て有せる勢力は古今を通じて毫も變ずる所なきを見るも、其實權の著大なる實にボビエドノスツエフの下に於ける時を以て前古其比を見ざる所なりとす。

ボビエドノスツエフの入閣に當りて、アレキサンドル二世末年の内閣は一種の異彩を有したり。即ち當時閣僚の人名を一見するに開進主義の大臣としては内相ロークス、メリコフ及び文相サブロフの黨あり。サブロフは西歐黨にして、熱心に自由主義を主張し、時の元老にして且つ樞密顧問たり、而して之に對して實にボ

ビエドノスツエフの一派あり、然るに開進派はアレキサンデル皇帝に勸めて一種の議會召集案を提出し、帝は其勅令に調印し給ひしが、末年にして其發布を見ずして兇徒の害に遭ひ給ひたれば、新帝の即位と共に此案の決行は暫らく延引せらるゝの姿となりたり。然るに此間に於てボビエドノスツエフの一派は盛に之が否決の運動をなし、終に一八八一年四月二十九日(西曆五月十一日)を以て、帝をして全く専制主義を以て施政の方針となす旨の令を發せしめたり。是に於てか改革派の諸大臣はメクコフ伯を始め、袂を列ねて其職を辭し去り、非改進黨は正に國政を指導するに於て優勝なる勢力を獲取し得たり。是に於てボビエドノスツエフは益、アレキサンデル三世に説くに、自由主義の教育及び全人民の啓蒙事業は自ら思想の傾向をして唯物論と不信仰とに傾かしめ終には畏るべき虛無主義を醸生するに至るべきを以てし、小學校を教會化すべき事、教授及び學修の自由を束縛して青年の國家に危険なる思想を養成するに至るを抑制すべき事、西歐の自由主義に謳歌する分子を削除し、其文化より全く露西亞帝國を杜絶せしむる事、而して全露國人民をして露西亞の獨特なる國民的文化の分子として一

に正教に信歸し、絶對的にツァールに屈服し各人の自然を没却して純乎専制主義に盲從するものたらしむる事等を諭示したり、アレキサンデル三世は即ち之により、一八八一年の夏に於て二つの勅令を發布したり。其一は僧侶に向つて示す所にして教會の勢力を今よりも益々全國の小學校に及ぼさしむべきを説き、其は各教育區に向つて僧侶の運動を保護し、直接間接に之に助力すべきを命じたる者なり。同時に西歐黨の壓制始まり、自由主義の新聞雜誌は嚴肅なる檢閲の下に監視せられて多く其發行を禁止せられ、又猶太教徒は非常の殘虐を被れり。一八八二年五月を以てイグナチエフ内相の下に發布せられたる所謂五月法なるもの即ち是にして、當時猶太人の暴掠慘殺の禍に罹れる者極めて多し。幾もなくして内相退き此年六月、ドミトリ・トルストイ伯之に代りたり。彼は嘗つて一八六五年より八〇年まで永く文相の位地にあり、兼ぬるに宗務院總監の重職を以てし、其暗黒主義の政略を以て知られたる者なり。ポピエドノスツエフ乃ち之と結びて嚴正なる正教信仰の恢復を以て國民的自主を確立せん爲めの最要條件なりとし、又カトコフの從て内外相應じて大に教會の興起に努力し、先づ波蘭、小露西

亞及びリタウエン等に於ける羅馬加特力教徒の迫害を始め、即ち命ずるに新しき加特力及びプロテスタントの教會は波蘭及びバルテイク沿海諸州にありても豫め他の希臘正教の併正に其許可を仰ぎし上ならでは之を建立するを得ず、加特力及びプロテスタントの僧侶に關する裁判は又露國の判官によりて行はるべし。波蘭の加特力教會は宗教上の事件に就て羅馬法王と交通する事を得ず、波蘭語は其學校及び諸官署に於て之を用ふることを禁ずる旨を以てしたり。蓋しポピエドノスツエフ以爲らく、國教の統一の爲めには吾人は先づ波蘭人と羅馬との關係を斷つ所なかるべからず。當時カトコフ、アクサコフ、及びアレキサンデル三世の諸人も亦皆波蘭問題の解決を以て西伯利亞追放の外依るべきの道なしと見做したりしなり。此波蘭虐壓の強暴にして殘忍なるかの佛國に於ける露西亞思想の代表者たるサナトール・ルロア・ポーリニーの如き論客をしてすら其政策を評して味にして蠻なりと云ふに至らしめたるを以て、聊か之が一斑を推するに足るべし。

吾人はポピエドノスツエフが其後に於ける芬蘭の憲法無視や、各地の羅馬加特力

教徒、殊に波蘭人の壓虐や、猶太人の迫害や、教育事業の干渉や、此等枚舉に遑あらざるの行事を列擧するの煩を避くべし。之を要するに、其アレキサンデル三世の治世に於けるや、彼は嘗つて一度アヒノフなる僞カザクの欺瞞する所となり、二度はバイツシーなる者のアビシニア巡錫事業に笑ふべき失敗曝露して、爲めに帝の不興を被る所となりし事實は之あるも、其皇帝の師傅、宗務院に首長たる彼の位地は益、其勢力をして一國の内治外交に大影響を及ぼさしむるに至りたり。殊にそが文教の上には有せる権力は著大なるものにして、歴世の文相は殆ど彼の傀儡に過ぎざるが如きの觀あり。アレキサンデル三世逝きて現帝の即位するや、ニコライ二世の政策は往々にして先帝施政の方針を合せざるあり。例へば帝が自由寛大の政治家たるイメレチンスキー公を擧げて即位、勿々之を波蘭の總督に任命し、一八九七年秋に於ては帝は自ら皇后と相携へて此地に行幸せられたるあり。其他事々に寛容の措置を施して人民を愛撫し、ポビエドノスツェフの徒と相背馳するものありしと雖、皇太后の深く其師傅に信頼せるは現帝をして其志望を專にするを能はざらしめたり。文相デリャノフの如きは全く專制主義者の一

用具のみ彼はポビエドノスツェフと謀り、全露國を通じて一國語、一宗教となさん事を唯一の國是となし、自由主義を抑制するに頗る力を極めぬ。宗務院總監の計畫せる所は獨り内治の一方面にのみ止らざるなり。彼は尙進んでスラヴ民族の包含を企圖し、ドールノークを以て首領とせる彼得堡のスラヴ慈善會社を助けて東歐の同胞を一丸となし、益、鵬翼を南に張らんとしたり。嘗つて巴爾幹諸州に駐劄せるヒトロークやベルシアニー等の外交官は又皆彼の徒に外ならずと稱せらるゝ。又由つて以て彼が斯界に於ける勢力の小ならざるを示す、一八九六年、ポビエドノスツェフ就職五十年祝賀式の行はるゝや、彼はウラジミール勳章を下賜せられ、皇帝は自ら、朕の傍に卿ありて顧問に與りたるは朕の深く喜ぶ所なりと書して之をポビエドノスツェフに賜はれり。彼はニコラス二世の信任をも得たれども、其ウラジミール大公及び皇太后より受けし信任は一層に大なりき。これ其畫策の一度世に出づるや、事事として成らざるはなき所以にてありき。嘗つて某外人ポビエドノスツェフに向ひて、猶太排斥法を緩にせんことの忠言を與へし時、彼は泰然として是に答へて曰く、余が猶太人の敵なりとの風評は全く事業

に反せり。加之余は猶太人に多くの長所と徳との存するを承認す。余が猶太人を恐れ且つ排斥せんとするは、抑之が爲めなりと。此一言以て彼の性行を推すに足るべきなり。

斯くの如き有力なる露國政治家も、日露戦争起り、同時に露國に内紛の勃發するや、其堅牢なる地位變化を呈し來れり、一九〇五年八月、露帝がウツテ等の説を容れて、斷然國民會議を召集すべきの決意をなし、續きて十月三十日の詔勅に於て、人身の不可侵、良心の自由、言論集會結社の自由を約し、如何なる法律と雖、先づ國會の協賛を経ざれば是を發布するを得ざること及び議員をして當局者を監視することを得しむべきを宣言すると共に、彼は我事畢れりとして、十一月終に其冠を掛け而して居ること僅に一年有半にして、一九〇七年春、病を以て死せり。彼死せりと雖、其三十年間に扶植したる勢力は、露國憲政の今日と雖容易に之を壞すべきにあらざるなり。

二 彼の人物

ポピエドノスツエフが提げて以て一世に標榜する所のものは、一言にして之を盡す、實に神聖同盟即ち是なり。彼は殆ど公々然として西歐の教會に反對し、而して自己の此目的を遂げんが爲めには其手段の如何は毫も措いて之を問はざるなり。故に言論の抑壓、自體の繫縛、凡ゆる悪手段も行使意の儘にして更に怪む所あるなし。一九〇二年二月十九日、ハルコフ大學の學生紛擾し、續いて三月三日、彼得堡に學生及び勞働者の示威運動ありて政府はコサツク兵及び憲兵警官を派し、之を暴壓せしめけるが、此時ポピエドノスツエフは皇帝に呈するに、一の報告書を以てして曰く、學生團は特に畏るべき一勢力なり。何となれば今日の學生の思想は其態度及び範圍に於て次第に消極的となり、斯くして我祖國の社會的及び政治的組織の上に最も危険なる傾向を齎らしつゝあればなり。彼等は熱心に聖書を讀誦す、然れども其基督を愛するは彼が聖者なるが故にあらずして、社會上及び政治上に於ける運動者たるが故なり。而して又其聖書を愛誦するは彼等の運動上、自由主義原理を此に探らんが爲めに外ならざるなりと。彼は斯くの如くに學生騷擾の真相を洞觀しながらも、尙益、新智識者の輿望に反して之を壓屈せんと

するなり。其行動彼のエスイタの熱執者と頗る相肖たるものあり。故にアナトール・ルロア・ポーリユーは彼を以て今世の露西亞人よりも寧ろ十六世紀の西班牙人に運じしとなし。又之をフリッブ二世に比して、彼は其老實にして嚴正なる、而も全く個人的功名心の卑陋なるものなき點に於て、其人物遙に此加特力王の上に出づるも、其忍にして冷かなる熱執や、其異教を惡む事や、統一を切望し、全然國家の利害と教會の利害とを同一ならしめんとする事や、將た此二つの利害に關する事物に就て何等の假借を用ひざる點に於ては、フリッブ二世と頗る類似せりと云へり。有名なる露國の文人オルガノヴィコフ夫人又彼を評して曰く、ポビエドノスツエフが其生涯を通じて衆人非難の衝に立ちしは彼の最高なる政治上及び宗教上の主義に就てなり。此以外彼は其如何なる一身上の行爲に關しても、曾つて一度だも不徳や破廉耻を以て責められたる事なし。これ恐らくは最も彼と相容れざる彼の敵人と雖、否むこと能はざる所なり。彼は確に其卒直と不屈とを以て己れの信念を實行したり。彼は中庸の人にあらずして主義の人なり。彼は實に己れの信念に忠なりしなり。其意見の公明にして一點の私なき、其心鏡の玲瓏として

曇なき、何處にか之を彼に許さざる者あらんやと、

三 彼の信仰論

ポビエドノスツエフは學頗る博し。其法學に通曉するは勿論、神學哲學に至るまで皆其涉らざる所なし。文學上に於ても彼は識に富めり殊にカーライル文學は彼の最も得意とする所にして、彼は又其熱心なる徒弟たり。英文學に關しては造詣する所の深き露都に於ては彼と比肩するに足るべき者少かるべしと云ふ。彼は其他トーマス・アケムピスの名著「デ・イミタチオネ・クリスチ」を露譯せり。彼の著書中最も能く其思想を窺ふに足るべきものは、彼が一八九六年に於て「莫斯科雜纂」と題して露語にて著述せる一書なり。此書翌九七年を以て直ちに佛譯して巴里に發行せられ、續きて獨逸譯及び伊太利譯せられ、九八年に於ては更に英譯せられて一時歐米の讀書界を賑はしたるものなり。

彼の政黨論及び代議政體論の又我國官署の翻譯によりて世人に紹介され、頗る當時の論壇を騒がしめたりし事は未だ世人の記憶する所なるべし。彼の此書は

十九世紀に於ける自由主義及び民権論の反動思想を代表するものとして注意すべき價值あるを以て、吾人は精細に彼の所論を解剖し左に類述せんと欲す。彼が哲學の中心點は其信仰論にあり。これ實に彼が人生觀の根本原理をなせる一大ドグマなり。其言に曰く、地上に於て歩む、吾人は目に依らで信仰に依る。世に若し自ら信仰を失ひつゝ、此肉眼に依りて歩み得べしと思考する者あらば、それは大なる誤謬なり。吾人の精神が如何に俗世界の上に超越したりとて、吾人は到底信念なくしては生活すること能はず、吾人の精靈の誠の眞理として見做すなる其信仰を棄て、定理や形式を渴仰の目的物となし、之に歸依し、之に隨喜すとは何たる愚なる事ぞや。定理形式は不完全なり、僞なり、決して絶對を包容するものにあらず、宇宙の無限なる、人生の絶大なる、争でか區々たる論理的形式とて之を表明する事を得べき。斯くの如き形式によりて混沌たる存在を踏み越えんとする者は忽ちにして此混沌の裡に葬り去らるゝを免れざらんのみ。不朽なる自我の認知、唯一神の信仰、罪業の自覺、向上的精進、愛の獻身並に義務の感情、之こそ獨り吾人精靈の信頼し得べき眞理なれ。

「總て人生にありては眞理は絶對なり。獨り絶對のみが人生の基礎たり得べし。然らざれば一切の事物は幻象の如くに動くべければなり。吾人の活動、情操又は衝動に於ては、何等の完美せるものあるにあらず。故に其委托する所のものなくしては、吾人は到底容易の生活を營むこと能はず。此大なる信仰のあればこそ、吾人は涕や、悲哀や、薄運や、將た虚偽の中に、己れの心身を持立する事を得べきなれ。

「吾人の一生は現象と事實との限なき連鎖なり、機械的の關係なり。而して其齋らす所は結局吾人靈魂の問題にあらずや。之を解決する抑、如何なる智慧をか要すべき其智慧なき者は事實の奴隸なり。されど吾人にして若し最高なる自然の靈的衝動に向つて忠實ならんか、即ち之を換言すれば、精神生活の根本原理を崇奉する事知らんか、然らば吾人は嚴として精神の領地に巍立する事を得て層々たる事業に打勝つを得るに至るべけんなり。夫れ人心には道德的重力の存するありて凡てを吸心す。苟くも此力にしてなからんか、人類は砂礫の集合と何をか擇ばん。されど人類社會の目的に向つては之のみにては尙甚だ不十分なり。吾人自然の本能は尙吾人の上に一の威力を要求すればなり。之によりて社會は秩

序を得べく、缺乏によりて依頼すべく、而して又其威力の中自ら真理の標準あるべきなり。されば其性質上此力は真理の上にある。然るに真理は其基礎を至高の神及び良心に有するものなるが故に、神の力を外にしては世に又力のあるべき理なきは昭々として明かなり。此大威力を外にして生活せんとする、これ全く不可能の事のみ。…天文学上に於けるプトレメオスの説は永く信せられき。然るに之に類せる誤謬は、今も尙思想及び觀念の新領域に存するを見る。科學が曾つて太陽が我地球の周圍を回轉すと唱へたりし如くに、近世の哲學は凡ゆる存在は人間を中心として回轉すと云ひ、人間をば宇宙の中心なりと叫びつゝあり。夫れ我地上には何等の新奇なるものなし。然るに科學は此陳腐の信條をば、其最新の發明として之を吾人に示すなり。是に於てか矛盾あり。命題の否定あり。新しき指定あり。驚くべき發見は踵を接して立せられ、而して又忽ちにして拒否せらるゝなり。これ實に發達なるべし。科學の進歩なるべし。されど此等の學說高見も畢竟する所、プトレメオスの系統と相距ること果して幾何ぞ。あゝ何れの日か新しきコペルニカス現れ出で、此妄想を打破し、宇宙の中心が人にあらずして、彼以外、

彼よりも、地球よりも、將た宇宙其物よりも、無限に高き者に存する事を證明すべき。彼は斯くの如くに六合の中心を絶対の神にありとし、之に對する信仰を以て人生の根本原理なりとは絶叫するなり。故に彼を以てすれば、人類社會は第一に教會にして、國家は其次位にあり。教權は首位にありて、俗權は之に副たるなり。されば其教會と國家との關係に就て述ぶる所に云ふ、國家と教會との關係に就ては近時甚しき謬説の行れるを見る。そは即ち政治學が此二つを分つ學說を立てし一事にあり。之によりて教會は恰も國家に隸屬する一制度に過ぎざるが如きの觀を呈じ、唯物論とか不信仰とか宗教の範圍内に跋扈するには至りたり。論者以爲らく、人生には一面に體ありて一面に心あり。此二の領域の間には天地の間に大なる空間の存するが如くに爾く相侵すべからざるの間隙あるべし。故に國家と教會とに於ても亦互に相干涉する事を許さず。されどこは全く謬れり。假令此に宇宙的教會ありとも、如何でか俗界に於ける家族社會には無視し得んや。人の生るゝや、其結婚するや、將た其死するや、即ち此人生最高の瞬間に際しては、教會は常に此等の三つの大事を司掌しつゝあるにはあらずや。之のみな

らず。教會には一の天職あり。そは即ち此地上の人民を教化し、彼等をして天の都市天の社會に入るの資格を得しむること之なり。而して此任は國家と教會とを分つに於ては決して果し得べきものにあらず。人あり、今若し國家より離ると公言し、納税及び兵役の義務を拒み、己れの上に立たんとする權力を否み、即ち己れ一身の統治を主張するありとせば、彼は直ちに法律を以て其服従を強ひらるゝか、然らざれば放逐せらるゝかの運命に遭ふべし。然るに宗教を拒み、國家の社會生活の必要物なることをば認めながら、教會に對しては全く無用の長物を以て之を見做さんとする者あるを見るも、吾人は殆ど之を如何ともすること能はざるなり。今日の世は國家萬能の世の中なり。一切人間社會の關係は國家の權力によりて、壓せられ、教會は其歸すべき權力の多くを國家の爲めに奪はれつゝあるものゝ如し。されど實際上に於ては教會は吾人が外面的に見る程には爾く衰微したるにあらず。何となれば教會の依る所は人民神靈上の力にあればなり。

「國教制なるものありて多く行はる。之に依れば人民の法律の威嚴や、國家の威力に對する信用は多きを得べく、縱令國家の安全又は其繁榮を第二位に置くとも、

被治者と主治者との連鎖は鞏固たるを得べし。此場合には異信仰は必ず其名譽と特權とに於て多少國教に劣る所あるべく、而して國家は最早社會の物質的利害のみを代表するものにあらざるに至る。故に國家にして多く人民の精靈的方面を代表すればする程、其力は一層の強固を加ふべく、又然らずして凡ての信仰に對して公平を保つと云ふが如き名に於て曖昧なる態度を取るに至る時は、其疑收力は忽ちにして散逸すべきなり。夫れ人民の其主治者に對する信用は信仰を以て基とす。常に宗教上の信條の互に相合一すと云ふ事のみならず、又主治者が己れ自ら信仰を崇奉し、之に従つて統治すてふ單純なる寄托に基くなり。異端の回教徒にありてすら、何等の信仰をも認めざる如き政府よりも、寧ろ其信仰の如何なるに拘らず、確乎たる主義の上に立つる政府を取るにはあらずや。これ實に國教が他の制度に比して優るの争ふべからざる所以なり。然るに一般に世の趨勢は周圍の事情の變遷の爲めに國教制を行ふの困難なるを致したり。初め歐洲文明の成るや、基督教の列國は一國として唯一の基督教會と離るべからざるの同盟を結びたりしが、幾もなくして教會は分裂して互に相排擠し、此單一信

仰の破綻と共に、教會は憫むべき状態に陥りたり。十八世紀の末、自由主義歐洲を風靡してより、殊に一八四八年以來、國家と教會との關係は全く一變して、基督教の基礎殆ど之が爲めに壞崩せられんとし、國家の凡ゆる宗教結社に對するや、恰も私立の團體に對するものと如くなれりと。これポピエド・ノ・スツエフが國教論なり。而して彼は斯くの如くに國家と教會との分離すべからざるを云ひつゝ、亦固より教會の寧ろ國家の上に立たざるべからざるを主張せるなり。彼即ち近時の所謂自由國家に於ける自由教會なる一制度を難じ、其缺陷を指摘して曰く、自由國家に於ける自由教會て一制度は全く抽象的の原理と假設との上に成るものにして、これ寧ろ信仰の主義にあらずして、宗教に對する冷淡を意味する者なり。宗教を寛待尊崇するが如くにして、却つて之を卑下するものなり。思ふにこれ近時合理論の結果として産出せられしものにして、其標榜する所は自由を主とし、不平等を治するにあるも、現に此制を用ひつゝある米國の如きにありては、羅馬加特力のみ獨り蔓延して、法主の勢力益増長しつゝあるを見るのみ。自由國家は又自由教會が之に干渉することなかるべきを言ふ。されど其自由教會にし

て眞に信仰の上に確立するものならば、決して斯かる命題を認許し、自ら自由國家に對して無關係なりと云ふが如きこと能はざるべし。教會は如何にしても人類の社會的生活に對する己れの干渉を止むること能はず。其活動の大なれば大なる程、其內的動力に關する自覺の強ければ強き程、斯くの如きは益不可能なり。教訓指導は教會の義務なり。之に就て教會は人生と永遠に接合しつゝあるなり。結婚及び教育即ち是なり。然るに國家は斯かる方面の事件をば己れ自ら之を盛せんとし、而も之と同時に靈的部分に關する凡ゆる自家の權を棄て去るが故に、教會は國家の放棄せる職能を拾收し、次第に道徳上及び宗教上に於ける勢力を專占するに至るなり。此勢力こそ實に國家に向つて缺くべからざるの要素なれ。國教制には疑もなく多くの缺點多くの不便多くの困難あり。されど教會と國家と同權なりと云ひて、一切の信仰問題に至るまでも同權なる政治問題のみを以て觀んとするは甚しき謬なり。これ即ち自由平等友愛の政治的形式の精靈上の管見を缺くと同じく、亦靈的方面の觀察を無視するものなり。此二つの場合に於て自由を主張する人々は、平等の中に自由ありと思ひ誤れり。これ自由の常に平

等に伴ふものにあらず、平等の又決して自由にあらずてふ人類多年の經驗を忘れたる者なり。又教會と宗教とを同一物なりとせば、國家は信仰の自由を許さざるべからずと思ふも誤れり。近世の歴史は自由と平等との同一ならず、自由の決して平等より生じ來るものにあらざることを證せるにあらずや。彼は既に今世の自由主義を基とせる教會論を斥けて多少の缺點を認めながらも、國教制の尙優れるを唱へたり。然らば宗教の如何なる分派を擇んで之を國教となすべき。これ蓋し彼の頗る得意とせる議論にして、彼が露國の内治外交に少からざる勢力を有するに至れるもの全く爰にそが唯一の立脚地を有しつゝあるに根源す。所謂正教同盟なるもの即ち是なり。彼は凡ゆる教會中にありて正教の獨り秀卓する所以を論じて曰く、プロテスタントの徒は吾人の祈禱の形式的なるを非難すと雖、決して然らず。吾人のは單純にして崇高、頗る幽玄なる趣旨を有せり。吾人の僧の勤は極めて簡なり。其唇より洩るる聖語は其語それ自らの解釋にして、人の精靈に感觸し、其情操及び思情に於て衆人を結合す。新教のは之に反して一見單純に見ゆるも常に虚飾に陥るの虞あり云々と。而して彼は尙疑々として、露

國正教會の美點を指數して、其凡ゆるものは悉く以て神に觸るる所以のものにあらざるはなしと讚美せり。

四 諸家の宗教論を破す

吾人は今茲に彼の教會論を終るに臨み、其宗教に對する態度を詳にせんが爲めに、尙彼が諸碩儒の宗教論を批評せる言の一斑を窺はんと欲す。

彼以爲らく、近時新宗教を唱ふるもの極めて多し。所謂實理哲學及び功利主義の徒は述べて云ふ、陳腐なる神を棄て、真理を採れ、神は何處にかある、獨り自然と人類とのみが實際上の事實たるにはあらずや、人類は確に理性と試験とによりて年と共に益、完美し得べきの力たり、宇宙的宗教の根本觀念茲にありと。

然るに此等の無神論者は斯くの如くに宗教を惡みて之を排しながら、己が家庭生活に於ては却つて大なる迷信に陥り、自ら一の信仰に歸依して僅に安んじつつあるなり。これ又何たる矛盾ぞや。己が生存競争の持説よりして、凡ての慈善を僞にして害なりと見做す理論家も、貧者を見れば財囊を探つて之を助くるにあ

らすや。一切の結婚及び家族生活を排する自由の愛の說法者も、優しき夫たり又父たるにあらずや。獨身及び隠遁を辯護する熱狂者も、愛らしき生兒を見ては微笑むにあらずや。富を蛇蝎視じ、資本を惡魔視する黨人と雖、己れが富資の膨脹に向つては流石に機を逸する事なきにはあらずや。俗世の事沼々として皆是なり、これ正に生命を無みして立てられたる説の虚なるを示すものなり。人性には多く矛盾あり、言行は伴ひ難し。大なるも小なるも人の精靈の中には、其奥底に於て既に偽善の埋藏せらるゝを見る也。

ストラウスの耶蘇傳及び新舊宗教論は十九世紀の學界に於て破天荒の一事業なり。彼は個體的の神を斥けて基督教を排したるも、宗教的感情に至つては其必要なるを認めつゝユニヴァーzumなるものを立じ、之を以て凡ゆる善及び力の根源なりと云ひて、衆人の須らく之に歸依せざるべからざるを論じたり。而も其所謂ユニヴァーzum即ち宇宙觀念の何物たるやに至つては、彼は實理哲學を唯物論とを以て之を説明し、生命若くは靈性の大問題に至るまで悉く機械的の動力によりて成れるものなりとせり。ホビエドノスツエフ即ち之を評して、これカント及び

ラプラスの系統や、ダーウソンの種族起源論に絶對的の價値を置きて、之を動物生活及び靈性生活の凡ゆる現象にまでも當て徹めんとするものにして、斯くの如き新宗教は畢竟するに新しき迷信に過ぎざるものなりと斷せり。彼は更に言を進めて進化論の新信者がダーウソンの理論の不完全にして矛盾なるにも拘らず、強者の保存及び弱者の絶滅を以て生命の根本法則なりとし、更に之を推弘して人類社會の原理となさんとするの僭越を詰り、其説を冷刺して曰く、進化論の徒は、凡ての有機體は強きも弱きも共に數學に於ける數字の如きを以て之を見んとせり。即ち内容なき量に過ぎざるものゝ如くせり。彼等は凡ての力が行爲及び經驗等に於て生ずるものにして、若し世に己が保護を求むる弱者なからんには、強者と雖、自己の力を擴充し、之を發展する機会を得ざるべく、又弱者と雖、良好の境遇に慣らざる時は次第に強健となり、而して其良性を子孫に遺傳する事を得べきを知らざるなりと。哲學會一派の利己主義者たるもの、此論に傾聴して、須らく其三十餘年の非を悔悟すべし。

同一の議論はミルの「宗教三論、自然、宗教の効用並に有神論」に向つて述べられた

り。ミルはストラウスの唱道せるが如き宇宙観念を採らず。これ彼の觀想を以てすれば自然は盲目的の動力に過ぎざればなり。されど要するに彼の求むる所も亦抽象的の觀念にありて、全く人生其物、靈性其物を無視したり。斯くの如きものは哲理思想に富めるミル其人の如き深玄の思想家に向つてこそ満足せらるべけんも、躍々たる感情及び良心によりてのみ結合せる人民の有機體に取つては斷じて其渴仰すべき所以を發見する能はざるなりと。ポビエドノスツエフは尙彼が鋒先を進めてジョン・モーレーの説を難じたり。モーレーは云ふ、吾人の自己及び人類に對する第一の義務は、有神無神の大問題を自ら解決するにあり。彼にして若し神の信仰をば不健全なる迷信に過ぎずと決定せば、須らく此信念を持して各人に諭説し、家族郷黨は素より能ふ限り凡ての人々をして改宗せしむるに至るを期せざるべからずと。ポビエドノスツエフ即ち之を以て、これ實に個人の意見を以て他人の良心を侵すものにして、斯かる虛榮心の中には愛も信仰もあるべき理なく、愛なく信仰なくして真理のあり得べき謂はれなし。而して信仰より發源せざる凡てのものは、これ即ち罪惡なりと云へり。

一八八二年、シーレー教授、自然宗教を著して基督教を排し、所謂新宗教を主張して曰く、何故に吾人は宗教に就て爾く相争ふや。何故に爾く相反目するや。吾人は同一信仰に歸着し得べし。吾人の神は即ち自然なり。自然は吾人の外に存する力にして、其法則は吾人に向つては絶對的なり。而して其處に吾人の崇奉する所以の神格存するなり。故に吾人科學者も亦決して無神論者にはあらざるなりと。彼は個體的の神を否認して、其説頗る實理哲學に類し、又ストラウスの宇宙論と酷似するものあり。故にポビエドノスツエフは又此場合にも生きたる神を無みしては、宗教の自ら支ふる所以のもの全く崩壞したるべきを述べ、宗教の本質を説きて曰く、宗教は歸納法によりては到底到達し得べからざる公理的真理を認むる事なくしては、全く不可能なり。個體的の神の存在並に靈魂不死てふ二の性質は實に此真理に屬し、而して是よりして宗教の最も眞髓とすべき超自然性が生ずるなり。凡て科學上の眞理は數學を除きては性質上悉く假說的なり。學者は唯之を意識するのみにして、之を人に傳ふるは全く一種の欺瞞により獨斷的形式を以てせらるゝに過ぎざるなりと。

五 絶對の統治者と絶對の被治者

吾人は上來述べ來れる所によりて、ポピエドノスツエが宗教論の大體、即ち彼が教會を以て人類の社會生活に於ける最高の形式なりと見做す所以を、知悉し得たり。然らば彼が唱ふる國教の半面たるべき國家は果して如何なるものなるか、彼が之に關する説は所謂其專制論にして、自由民權の聲至る所に喧しき今世にありては實に稀有の事に屬す。曰く、人は生れながらにして二の階級に分かる。一は己れの上に立たんとする權力を認むる事なくして、單に他を統治せんと欲する者にして、一は寧ろ己が獨立の行動又は己が意志の決行を避けんとする者なり。後者は唯服従せんが爲めにのみ存する者にして、少數者の意志及び決定に盲從する一團體をなす。凡そ才能ある者は却つて服従する事を喜び、好んで人をして己れを監督せしめ、其指導に於ける道德上の責任を強者に委託する者にして、彼等が己れの首領たるべき者を求め、之に附するに十分の信任を以てし、又之が忠實なる器具たるを以て自ら満足するは全く本能的なりと。即ち彼に依れば人

類社會には統治者と被治者とありて、而も此被治者は政治上に於て何等の權利もなく、一切を統治者なる權力團體に附歸して、絶對的に之に屈從するに過ぎずと云ふなり。これニーチェの所謂君主道德及び奴隸道德なり。ポピエドノスツエ乃ち曰く、國家の義務は活動し、命令する事にあり。其志向は唯一の意志の發現なり。之なくしては政府なるもの成立し得べき所以を見ると能はずと。國家には唯一の意志を許すのみにして、人民個々の意志は斷じて之が存立を認めずとせば、從つて民意なるものとあるべからざるは彼の立脚地よりして自ら明かなり。これグロチウスが人の自主獨立を認め、ルソーが人民の總意を以て主權爰にありとする説とは全く反對なり。彼即ち人民主權説を駁して曰く、政治主義の偽なるもの多きが中に、人民主權説なるものあり。總ての權力は人民に出で、其意志に基くものなりと云ふ説にして、此論不幸にして佛國革命の徒に於て益、跋扈せり。所謂議院政治の説即ち是なりと。彼は斯くて此政治主義の徒に議員の個人的功名心、虛榮心、及び利己心を満足せしむるに止まりて、結局今世に於ける利己主義の勝利を表示するものに外ならざるを詳述せり。彼又其專制論を述べて云ふ、吾

人は過去幾千年の歴史的経験によりて最も有効にして最も永續し得べき改革が政治家の高級意志よりす。然らざれば高尚なる理想及び深遠なる智識を有せる少数者より出でしものにして、決して代議主義の擴張に基因せるものにあらずるを學び得たりと。彼が議院政治の弊害に關する議論は已に世人の知る所なるを以て、吾人は茲に之を省く。要するに彼の國家及び教會に就ての法理哲學は、吾人を以て之を見れば稍、其明晰を缺きたるものゝ如く然り。これ思ふに宗務院總監たる官職の自ら彼の言論を專にせしむることなかりしに原因せざらんや。吾人は博識卓見彼の如きの論客をして、一切の情實を離れ、唯一個筆々の操觚者として世界及び人生に關する其理想を發揮せしむることなかりしを怨む。

六 彼の學問論

彼の學問論は頗る吾人學徒の傾聽して、以て自ら反省するに値する所のものなり。曰く、今や日進文明の智識は専ら綜合によりて得られ、人生及び社會の根本法は抽象的の原理もて言明せられんとしつゝあり。これ豈に舊き迷妄に代るに就

き迷妄を以てするものにあらずや。此抽象的の原理の信仰は今日最も普通に行はれて何人も之を怪むものなき事なるが、これ實に生命なる事實と之が必要とを無視し、時間空間の別を忘れ、個人の特性を打棄て、歴史の性質を無みせる獨斷的信仰より派生したる一大誤謬たるに外ならず。

夫れ人生は科學にも哲學にもあらずして、寔に活動せる有機物なり。科學も哲學も共に人生に根源せる外在の力にして決して、吾生を支配するの能力なきものなり。何となれば彼等は單に現象を觀察し、解剖し、又分類して作り出されたるものに過ぎずして、人生の限なき行爲を包容し、之に新分子を與へ、又は新しき基礎の上に之を再築すると云ふが如きこと能はざるものなればなり。彼等の命題は之を人生に適用すれば僅に假設の價を有す。故に之をして眞價あらじめんが爲めには、常に先づ之に當て徹むるに常識を以てし、推理を以てし、將た既に用ひられたる事實及び現象を以てせざるべからず。然らずんば徒に之をして非理と虚偽に陥らしむべきのみ。彼等は多く世上、争論の好題目なりき。新しき實驗と探索とは忽ちにして又其基礎を動搖す。如何に應用的の科學と雖、縫目なき外套には

あらず。彼等は多少巧に製せらるるも、檻籠もて補綴され、其形の唯流行に倣ひて出来せりと云ふに止まるなり。然るに世の學究先生が絶對的に自己の命題を唱論し、無條件に之を人生に適用せんとするは眞に僭越の極にあらずや。

「科學の形式の學問の進歩に効益ありし事は、吾人の素より認むる所なれど、それは決して絶對的のものにあらず。極めて皮想的なる人や、最も懶惰なる策士輩の時ありて深玄なる哲學者を以て呼ばれ、偉大なる政治家を以て推さるゝに至るものなるを見るは、要するに此等抽象的の命題及び原理の力なり。凡て衆人の心意は概括的の命題をば其眞意味に於て了解する能力なきものなるが故に、彼等は必ず先づ之を具體的實像又は形體として理得す。衆人良心の墮落を遂ぐる所以のもの主として之に因る。斯くの如き不吉の現象の今や吾人の學校に於て又民主政府に於て頻々として之を目撃するに至れるは、又何たる悲むべき事ぞや」と。彼は人生を以て空想にも夢想にもあらず、一の大なる實在なりとし、科學も哲學も共に假設に過ぎずして絶對的たるを得ざる旨を斷言し、今世の人々が徒に抽象觀念を目して幽玄なりとし、深達なりとし、之に隨喜渴仰して却つて己が足下

に横はるなる生命の實在を無みするの妄を誦れり。其所論の時世に適切なる、流石に師カールライルの衣鉢を繼襲して利鋒向ふべからず。今人の通弊を剔抉して之を諷し、之を警むるの所最も吾人學徒の沈慮に値するものあり。彼尙知と行との關係に就て述ぶるらく、吾人は吾人の本分として己れの力を集中せざるべからざるの事業を有す。古の神託は汝の天職の範圍を踰ゆる勿れと云ひたるが、今や吾人は汝の事業の範圍を踰ゆる勿れと言はんと欲す。己れの力を種々の事に放散する者は、必ずや之が爲めに其思想を裂き、意志を弱め、終には我集中の力を失ふに至るべきは明かなり。此實例は世上之に乏しからず。人々は好奇心と智識慾との驅る所となりて、智識より行爲に移らんが爲めに切要なる其活力を集中すること能はざるなり。諧謔者如何に智識を廣めたりとて、彼にして己れのエキルギを集中し、之を事實に適用するにあらざるよりは、何等の結果を齎らし得べけんや。智識其物は理解力をも意志をも修練し得るものにあらず。強き記憶力と想像力とあり、修養あり、多聞なる才人にては、判斷を要し、決語を要するの時に臨んで、却つて踏躓するは世上屢見する所の事實にあらずや。况や吾人公私の生活

は絶えず速決を要するものたるに於てをや。故に世の活劇場裡に處しては明晰なる頭腦を有し、事の凡ゆる關係を了解し得る者を以て最も有用なりとなさざる能はずと。ポビエドノスツエフの此論は彼が信仰論の立脚地よりして知を貶して専ら行の一を揚げ、其言の時に當を失せるなきにあらざるも、大體に於て堅固にして頗る吾人を規するに足るものあるを見る。

七 教育觀

以上は彼の學問に對する意見の大意にして、其重を智識に置かざるの意を見るに足ることなるが、之に關聯して聊か觀察せざるべからざるは彼の教育論なり。彼は普通教育に對しても亦甚だ同情を表せずして、世人が自由教育と云ひ、義務教育と云ひ、將た義務年限に於ける兒童の勞働制限と云ひ、或は又サドヴン戰役は小學校に於て勝たれたりと稱して、頻に學校の増設を絶叫するを非難し、これ常識を失へるの議論にして、兒童其者、彼等の兩親、將た天然の事業等を打算せざる妄説なりとして曰く、「一般の啓蒙てふ美言に惑はされて吾人は教育とは宛ら學

校を卒業して得たる雜駁なる智識の加ふるが如くに思ひ、即ち學校を建設し、人生より離れつゝ強制を以て兒童を教導せんとするなり、これ吾人が教育すなる彼等、兒童と雖、日々の食を得ざるべからざるを忘れたるものにあらずや。此糊口の勞働に向つては抽象的概念もて作り上げられたる吾人の教案も果して何等の用をかなす。これ今日の人々が多く學校を嫌ひ、之を目するに無用の長物を以てするに至れる所以にあらずや。元來教授の本分てふものは、常に讀むこと書くこと、並に數ふることを教ふるに止まらず、神を知り、之を愛し、之を畏るゝ義務及び我國土を愛し、我兩親を敬するの義務を教ふるにあるなり、此等は何れも智識の分子にして、共に良心の基礎を造り、彼の惡本能、惡情操、若くは誘惑を制御せん爲めの必要な道徳力を彼等に供給するものたるに、教育は兒童をば此彼等將來の職業を定め、又之に關する趣味、能力を與へたる境遇より割かんとするなり。學士となり、博士とならんと欲する兒童は、一定の學年を修業し、一定の學科を了得せば其目的を達するを得れど、彼等の最大多數は己れの小き手もて自ら己れが口を糊する道を講せざるべからずして、而も之が爲めには身體の鍛鍊の其

幼時に於て頗る必要なること疑を容れざれば斯くの如き準備時代に兒童を其兩親の膝下より奪ひ去るは生計の爲めに苦闘せざるべからざる多數人民に向つては一の重荷を加ふるものたるべく、社會公衆の資本たる經濟力自然の發展を其幼芽の中に家庭に挫き終るとも云ふべきなり。即ち斯くの如くに國民教育の聲が獨り家計の支持に必要な生産力を家々より掠略するのみならず、兒童の面前に學問の幻を高めつゝ其浮誇心を挑發し、心意を腐敗せしめ、虛榮心と自惚との渦中に投せしむるに至るを見ては、吾人は更に滔々たる俗世の只管此現象に謳歌する所以を發見すること能はざるなり」と。ポビエドノスツエフは即ち是によりて露國の教育に大なる束縛を加へたるなり。之に就き近頃クロボトキンと彼との間に爭論ありたり。クロボトキンは一九〇一年五月の北米評論に「露西亞に於ける現在の危機」と題する一篇の論文を投じ、露國は斷然從來の專制主義を捨て、人民多數の輿望に従はざるべからず、これ時勢の然らしむる所なりと云ひて殊にポビエドノスツエフの政策を非難しけるが、ポビエドノスツエフは乃ち是に對し、同評論記者の求に應じて九月の誌上に「露西亞と普通教育なる答書を

掲げ、クロボトキンは露人なるも永く外邦に流浪して郷國の事情に迂なり、従つて其言甚だ信すべからずと云ひたり。是に於てクロボトキンは更に翌年四月の同誌に「露西亞の學校と宗務院」と題したる其一文を載せて、ポビエドノスツエフの所論を反駁し、輒近二十二年の間、露西亞の新聞紙にして今日の教育制度及び宗務院總監より皇帝に呈せる報告書に就き非難の言を加へざるものは、僅に莫斯科新聞及び露西亞報知の二紙あるのみなりと云ひて、ポビエドノスツエフが其答書に於て、露國に於て教育事業の兎角に振はざるは、其地理の悪しきが爲め、商業に適せず、従つて一國を通じて貧窮せるに原因すと云へるを笑ひ、これ露國の地理を知らざる者の言なり。小學生徒と雖、斯くの如き答案を作らんには落第點を免れざらんと揶揄し、さて云く「ポビエドノスツエフ君が教育の不完全を地理に歸したるは非なり。こは寧ろ一八六三年より八三年に至るまで露西亞政府一般の方針にして、歴世の文相は皆之を以て其政略とし來り、又八三年以後に於てはポビエドノスツエフ君自ら國務院に於ける一大勢力となり、益其自由なる發展を束縛したりしに歸因するなり。彼は正教會の下にあるものゝ外は一切學校の開

設を妨止するの主義なり、學校の教會化を標幟し、自ら自家の政略を辯護して云へり、小學校を建つることは何處にありても各村の僧侶のみに之を許すべし、之を何人にも許さんよりは寧ろ全く學校なきを可とす。教育費として支出すべき中央政府及び地方政府の資金は總て此目的に於て費用せられざるべからず。ポビエドノスツェフが普通教育論を一讀して、然る後彼が自家防衛の言辭に及び、縱令彼積極的に教育の普及を妨ぐることもなきも、少くとも消極的に之を制せんごしつゝありしや蔽ふべからずと云ふべきなり。

八 厭世主義論

吾人はポビエドノスツェフが雜論の最後に於て彼が近世文明の二大特象厭世主義及び社會主義を批評せる言の梗概を一見せんと欲す。彼が殊に厭世論に關して爲したる數千言は、實に好個の一小文として、吾人の日夕愛誦する所なり。吾人は、先づ茲に彼が人生論を觀察せんことを欲す。

「凡そ人生は運動なり。されど思ふ、其運動の迅速なること今日の如きはなきを、何

となれば、それは間歇的なればなり。熱症的なればなり。病的なればなり。自然の繼續にあらで單に感覺の無意的行動なればなり。單一なる目的に向つての不斷の精進にはあらで、風のまにまに動くなる多くの慾望の結果に過ぎざればなり。

「吾人は群衆が生命を喰ひつゝ、而も亦之が爲めに喰はれつゝある様を見る時、自ら胸に向つて問ひ、且つ永く思ひ煩ふなり。こは果して人生なるべきかと。

「ゲーテは云へり、神と自然との最も高き賜物は生命なり。單子其れ自らの革進なり、休息も靜止もなき活動なり。人々には縱令其性質は不分明なりとも、兎も角も彼等を鼓勵する所以の衝動が先天的に賦與せられつゝあるなりと。生活すと云ふ事は、如何に單純なる事に見ゆるぞや。モンテーニニは何をか我職分なりとなすと自問して獨り答ふらく、生活すること、これ我職分なれど。

「されど吾人にして今若し凡ての思想を一の目的物の中に集注して人生の進路目標を沈思する時は、吾人の作れる、就中近世の人々が爲せる生活の如何に複雑なるよ。思想なき生活は動物的生活なるも、思想も人生實際の目的に適用せられざる時は、生けるものにあらず。然るに今日の人々は唯思想の爲めに生活し、而し

て神の賜物たる尊き生命は、却つて思想の飲み込む所となりつゝあるなり。元來人生とは人性一切の力及び衝動の自由運動なり。而して此運動其れ自らの中に其終極の存するにあるなり。故に人生の目的を智力のみ又は情のみ以て現さんとするは之を制限し、又之を人工的に變態すると異なるなきなり。ゲーテは嫌惡の情を以て叫びたり、頭のみなる憫むべき者よと。又曰く、吾人は生きつゝあるにあらずや。然らば吾人は須らく生命を解剖して自營し、而して又終に之に入らん事を計らざるべからずと。彼の此語は其同代の學士によりて鼓吹せられたるもの以外ならざるか。彼以後如何に生命の解剖は進捗せしか。如何に多くの生命の却つて之が爲めに食まれたるか。十八世紀の後半に於ては思想家は思想と生命との不調和により、所謂世界苦痛なるものによりて打撃せられたりき。今や此痛患は其多く世に流布するを見ざるも、人生の一新思想たる厭世主義の之に代つて起り來れるにあらずや。こは蓋し精靈の最高理想と現實との矛盾より生せる者にあらずして、唯吾人の活動するに世界を否定せんとするものなり。單に俗世の惡弊混加するなからんとする人生の飽厭に因來せるものにはあらで、絶望的なる

又破壊的なる排絶なり、失望の淵より唯一道の活路を許すものなり、吾人の精靈其れ自らより生活するの欲望を切り取るこ即ち是なり。

「人生は斯程までも邪曲せられたり。吾人は思想が能く人生を導き、其活動を整理し、即ち吾生を助くるものなるを信じつゝありき。然るに今や人生の却つて之が爲めに破壊せられ、其結果生命も思想も何等の痕跡をだも留むるなきの有様を呈せんとす。思ふに此説たるや、人生をして一層幻影的ならしめたるものにして、信仰又は正義に就いて何等の餘地を容れず、又活動せんとする意志力をも有せざる人工説なり。其主張者の自ら己が動物的本能を專にしながら、此人生と自家の人工的學説の矛盾せるを證するも、亦奇ならずや。是に於てか彼等の探るべきものは何ぞ。曰く其書籍より一知半解したる人生否認論のみ、真理の骸骨のみ、化學的形式の衣つけし自然の枯像のみ、物質的管見よりして誤斷せる人生排否の薄志のみ」。

實にもゲーテは其智腦の博宏なるにも慊らずして、感情の充足を求めんと欲し、而も懊惱煩悶、更に精神の靜平を覺えざるに及んで終に奔つて意志生活に趨歸

したり。彼の後十九世紀の初期に至りて當時に於ける政治經濟一般の不調は思想界にも之が影響を及ぼして厭世的風潮は滔然として正に一代を靡かせたり。所謂ロマンティック派なるものは是なり。伊國の詩人レオナルドは寧ろ戰慄すべき闇陰の思想を齎らして愛と云ひ、自由と云ひ、進歩と云ひ、凡てありと凡ゆる人間の理想はこれ偽なり幻なりと唱へ、畏るべき怨刺と絶望とをもて死の福音を説き、之と時を同うして獨逸にハイネ、レーナウあり。英にバイロンあり。佛にシャトーブリアンあり。而して其間に於て厭世主義の預言者たるショーペンハウエルは一八一九年を以て彼が大著の初版を公にせるあり。其哲學の版を重ねて歐洲の思想界を動かしたるありしに續きて、ショーペンハウエルが「意志論」の出でしより五十年に恰當するに、ハルトマンの「無意識哲學」新に著述せられて又一代の耳目を聳動したり。此間鬱なる思想の如何に露國に入りて其青年學生を動かしたりしかば、此國の近世史を讀める人の能く知る所たるべし。ポビエドノスツェフ乃ち一層具體的に厭世主義の由つて來る所を叙述して云ふ。

「人にして若し已に現在の境遇に打勝ち、眼前の妨障を排するに足るの意志と智

力なしと思意するときは、彼の一切の活動は鈍り、其エネルギーは弱り、今まで活動的たりし者も宿命論者となり、自己の成功に向つては先見と聰慧とによらで不定不測の僥倖を冀ふに至るべし。これ今日流布せる厭世主義の主因にして、又或程度までは多くの人々が頼用する肉樂的實用唯物論の由つて來る所なり。

「吾人は日によく自殺者あるを聞く。斯くては自殺てふ事は終に通常の出來事として怪れざるに至るならむ。これ思ふに、世人が人生及び其目的に關して之が眞義を誤解せるによるなからんや。或は人生に關する思考の失當なるよりして死する者あり。或は己れ以外、人生に於て一の頼りなきを知れる憫むべき人の、其闘争に際して己れを支ふべき道徳上の主義原理を我裏に求めて、却つて此活動場裡を隱遁せんとするなり。或は又己が周圍なる人類の虚偽及び制度の虚偽と我高き理想とを和解せしむること能はずして死する者あり。要するに彼等は其理想に於て何等の信仰をも有せず、即ち自ら慰むべき眞信仰なきが故に、生命の權衡を失ひ、恰も憶病者の如くに我生を捨つる者にして、又其中には己が熱求せる權力を攫取して此重き負擔の爲めに却つて見事墮落を遂ぐる者も多きなり。而

して今日に於ては此後者の類例殆ど其常なるを見ると。ストア派の哲學者は自殺を以て惡にあらずと云ふ。されど如何に之を辯護する者と雖、其結局薄志弱行を現すものたるを拒むこと能はざるべし。然らばライブニツの云ひける如く、此世界は果してあり得べき世界中の最も完全なるものたるべきか。ヘーゲル派の樂天的世界觀は果して現世の實相を發き得たるものなるべきか。凡そ唯一神を信する所の哲學系統は多くは樂天論に傾くを見る。ポピエドノスツエ既に神を奉じ、之を以て宇宙の中心となし、至善、至美、至正、至真なりとなし、之を信仰し、之に歸服するは、これ人生唯一の天職なりと云へり。其厭世主義を排して止まざるは、自から然るべき所のみ。

彼の幸福論は殊に吾人の愛讀する所にして又實に一の福音たるを失はず。云く「人は總て幸福を求むる者なり。幸福を求むるてふ瘡やすべからざる渴望は意識の覺起せられし時よりして吾人の衷に燃え、而も其最後の瞬間に至るまでも終に充足せられざるなり。幸福の慾には終極の目標てふものなく、宛ら世界の如くに其涯を見る事なし。何となれば其初も終に共に永遠の中に存すればなり。葉古

の小説家は此不斷の慾求をば唯一の愛女を失へる母の小話を以て喻へたり。曰く、頭の頂上にのみ一目ある一人の老婆は號泣しつつ世界を流浪して其愛兒の在家を尋ねつゝあり。何物かの其身體に觸るゝあれば、彼は留りて之を取り上げ、頭上に差し上げて之を檢視し、若し其求むる目的物にあらざるを發見せば、彼は忽ち失望して之を地上に抛ち、然る後又其茫々たる無限の旅路を辿るなりと。人の求むる幸福は此譬言の示すが如くに却つて不幸の結果を彼に齎らすものなり。カーライルは云ふ、人間の難境は彼の偉大なるよりして起るものなり。彼は己れの裏に存する無限の爲めに却つて惡運に陥るなり。彼は如何にしても此無限を有限の範圍中に押し込め了ること能はざればなり。

「夫れ吾人の慾求は斯くの如くに限なく、到底悉く之を満すこと能はず。然るに世人の之を知りて其無益の旅路に急ぐは何故ぞ。何故に彼等は現在を棄て、失望に將來を打ち棄て、獨り過去を眺めつゝ羨ましげに之を凝視するや。實に過去に於て幸福の己れに近かりしを回顧せざるものは世甚だ稀なるべし。されど彼にして尙此無限を征服し、之を己れの領地とし、又之を知らんことを求めんか、其瞬

間に於て幸福は正に彼を去つて復た還らざるなり。
 「若し世に正しく幸福を呼び得べきもの此地上にありとせば、それは吾人の精霊が全く知るを求めずして其れ自らに於て生命を感じし、休息を感じ、唯恰も梢に懸れる清き露の滴が、美しき日光を浴びて之を反映するが如くに、自ら永遠を思念せる其單純たる存在及び單純なる意識に於ける寡慾の時にありたり。斯かる状態の存する所には、天は永く之に幸福を許すなり。總て幸福の戸は外方に向つて開く。故に之を開かんには内側よりせざるべからず。若し一度内側より之を押さんか、それは最早閉ぢざるべし。されば之を閉づるを欲せざる者は復再び之に觸るることあるべからざるを要するなり」と。吾人は此幸福論を一讀して、端なく心中に回想するものあり。ミルの言是なり。彼己れの自叙傳に於て記して云く、快樂を保持する唯一の方法は之を指さざるにありと。

社會主義の精神は既に早く之が萌芽を見ることなれども、其一體系として歐洲の天地を震盪するに至りしは十九世紀に於てなり。ポピエドノスツェフは佛國革命以後所謂革命熱なるものが獨り政治上のみならず社會上に至るまでも其勢

力を波及し來れるを見て大に反對し、今日は進歩てふ語を購るものは如何なる愚頭も、大智識の如くに見ゆと誹り、その意義を精究して曰く「吾人は先づ之を吾人共同の母にして師なる自然によりて批判せん。自然は吾人に教ふるに凡ての發展は中心よりして起るものにして、之なくしては發展も不可能なることを以てするにあらずや。植物も其成長力の源泉たる汁液生産の中心が枯渴せる曉には最早地上に樹立すること能はず、花も實も到底之を得べからざるを示すにあらずや。然るに愚なるかな吾人は此自然を忘却し、之を無視して吾人自らの兒戯に類せる企を敢てし、未だ開花の機熟せざるに手荒にも機械的に其芽を開かしめんとし、而して得々然としてこれ進化なりと呼號し、芽を破り、花瓣を萎ましめ、花實をして全く望なからしむるに至るなり。天下豈に之に比すべきの狂態あらんや。これ豈に魁もて海水を汲み乾さんとする小説中の一小兒の行と異なるあらんや。彼は凡ての改善又は改革を蛇蝎視するなり。彼が民權論自由説に反對するよりして之を見れば、其社會民主主義を賛することなきは固より明かなり。則ち言ふ、多くの人々は自己の境遇に満足せず、其社會制度に感服せず、其性の最も

野なる本能によりて旨せられ、又狭き妄想の爲めに昏迷せられて、社會の史的發展によりて生せる凡ゆる現存の制度を捨て、即ち教會、國家、家族、財産等を擧げて、以て地上に彼等の野想を實現せしめんとするなり。彼等は己れの企圖する其改革は凡ての今の制度の蕩然として全く其跡を止めざる平野に於て始まるものを主張するなり。歐洲の政治家は此等の輩を目して文明の敵なりと叫び、即ち文明の名に於て改革家の團體に抗するなり。されど彼等こそ却つて現在の事物を撃ち、舊制度を破壊して新制度を建て、斯くして人民の智能と歴史とより起れる口碑及び習慣を打破せんとせるにあらずや。人生を無みし、之に適合せざる新法律を立て、文明の敵が否認する實際の事物を崩せるにあらずや。……

「汝の天運を踏る勿れ」とは古の神託の云ふ所なるが、汝の實力の耐へざるが如き事を企つる勿れとは、又如何に善き箴言ならずや。凡ゆる智慧は思想及び力の集中に存し、凡ゆる害患は其散逸に存すればなり。働くとは多くの綜合作用の野心の爲めに吾人の力を放散せしむることにはあらずや。吾人自らの尺度に應じて己れのなすべき業と其場所とを擇び、自ら掘り、耕し、植ゑ、我が生ける力を之に費し

て事業より智識に、智識より己れが完成に、次第に我を高むる事に存するなり。此最後の數行は輕薄浮躁なる學風の横行せる時代に當り、正に頂門の一針なりと云ふべし。

九 社會主義論

ポピエドノスツエフは斯くして虛無主義者を以て自ら己が発見せる印象を追ひ、其誤れる管見よりして凡ゆる事物を觀じ、徒に宇宙は己れの周圍を回轉しつゝあるものゝ如く妄想する者なりとし、又神なく、真理なく、善なく、惡なしと云ふ無神論及び無政府論の狂を難せり。彼はフリーリエーを評して、彼は熱性の狂なりと云ひ、其社會主義をば材料の不合理を忘れたる觀念の建築物にして、其外觀のシメトリとハーモニーとは之もあるも、毫も之が効果の如何を打算せざるものなりと稱し、而して極端なる社會主義、無政府主義の社會に流す病毒を指摘して曰く「最も熱狂的なる無政府主義の説教者と雖、靜平なる市民、賢き親又は有徳の君子たる事あり。されど其門下の追従者は彼の教及び名の爲めに往々にして慘行

を演ずるなり、社會主義の預言者も其著書を公にし、演説を試みて靜に教義を傳布するも、彼の教は却つて世人を煽動して不良の行事をなさしむることあり、之が爲めに如何に多くの人の墮落せしぞ。如何に多くの虚偽の未熟なる人の心中に撒かれしぞ。如何に多くの新しき災害の人類の間に齎らされしぞ。如何に多くの浮弱なる心意の敗類せられしぞ。今や思想界は行動流轉して寸時も止まる所を知らず。凡そ何れの時と雖殺人や、不正や、虚偽や、不幸の頻々たること今日の如きはなし。惡と不信とは限なく吾人の前に展開しつゝあり。心意は此不健康なる周圍の爲めに汚されて其結果、拒否、憤怒及び自暴となり、此否定は終に一の偽なる形式を醸生して又他の形式と争ひ、終に其底止する所を知らざるなり。人間の限なき行列は斯くの如くにして真理とは何ぞやてふピラテの間に向つて答案を探しつゝ繼續し、獨り眞理を體せる者のみが之を探すの勞なくして之が答を得べきのみと。彼が如何に此等の改革論者を嫌忌するかは彼の口吻に由つて略之を推知すべし。かのヒルトン事件の如き又其好例なり。エドワルド・ヒルトンは英人なり。露國に住して説教を事とせし者なりしが、一八八四年三月、時の内相ト

ルストイ伯より俄に四十八時間以内に此國を去るべきの命を受けたり。英國大使エドワルド・ソルントン乃ち其何故を以て自己の國人を放逐するやをギエルス外相に問ひしに、彼はこはボビエドノスツエフの權能によりて行はれたる事件なりとて曰く、ヒルトンは異宗派の熱心なる信者にして屢警告を與へられたるにも拘らず、我正教會の禁制せる教説を説布せんと固執したる者なりと。而してボビエドノスツエフ自身も亦之に就いて云つて曰く、ヒルトンは共產主義者なり、斯くの如き論客の我國内にあるは治安を害するものなりと。されどこは全くボビエドノスツエフの誤解にてありき。又以て如何に彼が改革説の抑壓に銳意しつゝありしかを見るに足るべし。

吾人は上來述べ來れる所によりて略、ボビエドノスツエフが莫斯科雜纂の要を抄録せり。即ち彼を以てすれば世に制度の崇奉すべきものは正教信仰と專制政治との二あるのみにて、信仰と云へば唯一の前者を措きて外になく、法と云へば又唯一の後者を措きて外になきなり。これ彼が大に歴史を尊びて一切の史的現象を國民精神の所産なりとし、何人とも雖、之を變ずること能はざるものなりとする

に起れるなり。其民權論を排し、新聞を斥け、普通教育を難じ、學問を賤めて、獨り國家及び教會の二を認容し、即ち人間社會に信仰以外に於ける文化の産物を認めざらんとするが如き、亦以て一種の虛無論とすべきにあらざるか。吾人はステッドが彼を評せるの言を擧げて此項を結ぶ。云く「ボビエドノスツエは露西亞のラウド僧正(一五七三年に生れ一六四五年死)なり。彼はチャールス・ステイヴルトの此臣下の長所短所とも兼ね有す。されど寧ろラウドよりも一層中世に近き人なり。余は彼得堡に於て常に人に語りて、彼は恰も六百年間熟睡して突然覺起し、其十三世紀の精神的及び政治的衣服を着けたるまゝ街上を濶歩せる人の如しと云ひたるが彼が甚だ近世の文明を尊重せざるが如き會、以て此比喻を確むるものと言ふべし。其鐵道布設の新立案に對して反對を唱へたる、豈に亦カーライルがバドソンの彫像建立に關して其「ラターデー・パンフレット」に述べし言の鼓吹する所によるならんや」と。

第十一章

ウィツテ

一 技師出身

セルギイ・ユーリエヴィチ・ウィツテ(Sergii Iulievitch Wite)は一八四九年四月十七日を以てティフリリスに生れり。彼の父君の祖先は露西亞に移住せる和蘭移民なり。父はカウカス州なる農務課長たり。母はフアデーエフ家の人にして、ウィツテは幼よりして正教會の信者として教養せられたれば、彼は之に由りて純乎たる露國的民質を享有するに至れり。キシネフにて初等教育を卒へ其れよりオデッサ大學に入りて物理數學科を卒業し、カンディダートの學位を得たり。彼は一八七〇年、即ち普佛戰爭の年、ロノヴォフック大學の數學科を出で、一時新聞に關係してスラヴ國粹主義者のカトコフ(Katkov)と交りしが、一八七七年に至りてオデッサ國有鐵道に入り、一八七八年の露土戰爭に際しては彼は同西南鐵道の運輸部長たり。戰時の運輸事務に於て赫々の功績を顯せしかば、忽ちにして知られて拔擢せられ、一八七九年には同鐵道の企業局長となり、又バラノフ伯の鐵道委員會に與れり。彼は此所

にて該委員會の議事録中一卷をものし、尙又露國鐵道條例の草案を作出せり。一八八一年より一八八九年まで、彼は更に西南鐵道管理局長たり、又帝國鐵道會議員を命ぜられたり。該委員會は露西亞全帝國の鐵道布設及び管理の全問題に研究せんとするものたり。ウヰテは殊に鐵道と一國の一般經濟の發展との間には微妙なる關係の存することを熟知し、此點に於ては當時泰斗とせられければ、其頃此問題に關して一書をもつや、大に鐵道執務者の注意する所となれり。彼の才の鐵道事業に於て特に人を抜くことを知り、之を保護せしものゝ中には、時の大藏大臣ウヰシネグラードスキ一の如き有力なる政治家あり。彼は直ちにウヰテを抜いて大藏省の鐵道局長となせり。これ一八八九年の事にして、亞いで彼は關稅委員長を命ぜられ、一八九二年には通信大臣に進められ、翌年師ウヰシネグラードスキ一の退職するや、同年八月、其後任者となりて藏相の重位を占めたり。

二 彼の經濟政策

ウヰテが大藏大臣として十有餘年の在職中に計畫したりし事は、實に鐵道政策

を以て其中心となせり。彼は逓信大臣ヒルコフ公と肝膽相照らして鐵道事業を經營せり。十九世紀末に於ける露國の歲計豫算を見る時は露國が如何に其鐵道計畫に銳意せるかを明かにするを得べし。これ實に當に其年の現象として見るべきのみにあらずして、亦以て露國經濟政策の傾く所を知るに足るべきものなり。一八九九年の豫算に於ては逓信省所管の經費は三億九千七百萬留以上に達し、即ち陸軍省所管の經費を超過すること三千七百萬留なり。豫算は其總計に於て十五億七千七百七十三萬二千六百四十六留にして、前年度の全計より多きこと九千五百五十萬留に及ぶ。ウヰテは之に詳細の説明を與へたり。彼に依れば經常部に於ては歲入の歲出に超過すること六百四十六萬八千九百七十留にして、臨時鐵道敷設費の部に於ける九千八百六十萬四千四百四十三留の不足は之を國庫準備金中より填補し得て餘ありと云ふ。

ウヰテは又露國が過去十二年間に募集したる國債を以て十五億三千百萬留に上れりとし、而して之が歲計の收支平均を保たんが爲めにせられたるものにあらざることを明かにして云く、右金額の中、十一億三千九百萬留は鐵道の敷設及

び買收の爲めに起債したるものにして、こは此鐵道の収益によりて其元利を還濟せんとするものなり」と。彼は政治及び財政の事情の餘に香しからざりし時に當りて、其確立したる幣制改革の利なるを熱唱し、又一種の社會問題として露人の上下を頽破せしめつゝあるなる酒精の國庫專賣に關する法を立案し、之に附したる長大の説明書の中に「これ一般公衆の道德及び衛生の上に大なる効益を齎らすの手段なり」と。實際に於て此法の實施せられて以來、地方官及び僧侶の多數は過飲及び其結果として生ずる罪惡の之が爲めに減せられたるを報告するに於て皆一途に出でたり。一八九九年以往三年間此專賣法の行はれたる東部の四州に於ては國有鐵道及び酒精販賣の収益に關せずして政府の收入爾餘の諸州よりも三分を超過せり。該地方に於ける貯蓄銀行預金額の増加は蓋し右專賣法施行の結果に外ならず。

ウヰテは又此年度に於て饑饉地方の貧民救助の爲めに三千五百萬留を支出したり。之に對し藏相は特に意見を附して云く「露國農民社會に於て貧困の狀態益々甚しきを加ふる所以のものは、全く教育乏しく且つ權利の思想の尠少なるに原

因す。故に單に財政上よりして之を論ずるも、一般農民に完全なる教育を與へ、權利の思想を發揚せしむることは必須なり」と。ウヰテの此財政計畫上奏文は左の言を以て結べり。云く「皇祖のアレクサンデル二世の偉業たる隸民解放のことは先皇アレクサンデル三世の御世に於て已に完成し、今や陛下は其後を受けて農民社會の經濟上の状態を整理すべき運に向ひ給へり。至仁至慈なる陛下の鴻徳の上帝の助によりて、能く其績を顯揚すべきを疑ふ能はず」と。

ウヰテが苦心經營したる西伯利亞鐵道も一八九〇二年二月を以て全通したり。これ實に彼が遞信大臣に任命せられたる前年、即ち一八九一年五月三十一日を以て其起工式を擧げたるものにして、全線を第一期、第二期、第三期と三別して、第一期の成功期を一九〇〇年としたりしも餘に緩漫に失すとして、工事を督して之を今一層早むることとし、第二期線の如きも、一八九五年の起工に決して第一期線、第二期線とも一八九八年までに竣工の豫定なりき。然るに一八九四年、俄然日清戰爭の破裂するあり、其結果戰敗國たる清國は下ノ關係約を以て臺灣を割きたる上に遼東半島をも日本に與へて、日本をして新に根據地を占めしめんとし

たれば露國は之を見て、これ豫ねて其希望とせる大平洋岸に不凍港を得んとするの計畫をば根底よりして打破するものなりとして佛獨の二國を語らひて干渉し、十月十九日の條約に依りて日本に迫りて遼東を還附せしめ、而して報酬として新に滿州鐵道經營の讓許を清國より受くるに至りぬ。

斯して一八九六年九月六日に至り、露國政府の機關たる露清銀行と清國政府との間に滿州鐵道に關する一の約定成立し、是に依りて露清銀行は東清鐵道會社なる株式會社を組織せり、該會社の定款は露國政府の認許を得て、此年十二月十六日の露國官報を以て公告せられ、是に依りて露國大藏大臣たるウイッテは該鐵道會社の技師長、營業部長、其他の部長、及び技師の任命を認定するの權限を有し、線路選定及び工事設定等に關しては凡て大藏大臣の認可を受くるを要することとなれり。此舉ありて一年有半にして、露國は又關東州を租借し、且つ旅順口及び大連灣と西伯利亞鐵道を連絡すべき鐵道支線を敷設するの權利を得たり。日露戰爭の伏線既に此所に匿在しき。

露國晩近の經濟的發展は主としてウイッテ藏相が施設の結果なり、彼は經濟政策

の上には於ては獨逸の經濟學者フリードリヒ・リストを宗となせり、彼は徹頭徹尾リストの學說を奉ずるものにして、アダム・スミスの宇宙主義一般主義に反對して純乎國家主義を主張し、温和なる保護を與へて内國の産業を發展せしめ、産業上に於て外資を輸入せんことを計り、同時に紙幣の價格の變動を制し、兌換制を始むるの方法に取掛かれり。露國に於ける鐵道の驚くべき發展延長は主としてウイッテが精力と其財政上の卓抜なる手腕との賜なり。彼は又前に云へる如くに、酒精專賣制を斷行して露國民を墮落より濟はんとせり。外交方面に於ける彼は露國の勢力を北清及び波斯に擴張することに力を致し、本來闘性を有し露人に稀なる執着性を有するものから、外國の經濟的拘束より自國民を解放せんとするに於てはなさざる所なかりき。彼は斯くの如き見地よりして獨逸の殊に恐るべき敵手なるを感知すること甚しかりき。

三 ウイッテ藏相治下に於ける露國の經濟的發展

高率の關稅に依り、又外資の輸入に依りて勃發したる露國の産業の如何に長足

の進歩を遂げたるかを示さんが爲めに、茲に少しく數字を掲出すべし。一八八七年より一八九七年に至る十年間に於て各種産業に使用せらるる労働者の數は百三十一萬八千四十八人よりして二百九萬八千二百六十二人に膨脹し、紡績用綿花の消費額は一八八六年に僅に一億一千七百萬疋に過ぎざりしものが、一八九八年には二億五千七百萬疋に激増し、一九〇二年八月二日發行の週刊新聞露西亞に依れば同年の錘の數六百九十七萬を以て數ふるに至れり。斯くの如き紡績事業の旺になり來りたる許りにて一八七五年には一の大なる村落に外ならざりしロッツの町は此後三十年にして三十萬以上の人口を有するの大都會となりて、鐵鋼及び石油の工業も等しく著大の進歩をなし、一八九二年より一九〇〇年に至る間に、露國にて製造せられたる金屬品の價格は一億四千二百萬留より二億七千六百萬留に上れり。斯かる場合に兎角免れ難き現象として保護政策の結果は過剰生産となり、其爲め財政上經濟上の恐慌を喚起するに至りしが、ヘンリ・ルマンに依れば該恐慌とても甚しきに至らざりしが如し。何となれば會社の中、一九〇一年の初め九個月の間に、利益の配當をなせしもの五百八十以上に

及び、其資本總額一億五百萬磅、平均の配當利益一割一分を下らずと云へばなり。此著大なる進歩の大部分はウヰッテの功績なり。

四 彼の開國主義、立憲主義

一九〇二年春を以てウヰッテが苦心經營せる西伯利亞鐵道の全通するや、此年秋を以て在職十年の祝典を擧げし彼は、東亞視祭の途に上り、十月三日イルクックを發し、九日浦鹽斯德に達したり。此行彼は其目的を秘して世に公にせざりしかど、旅行の結果彼は其大金を投じたる割合に鐵道の出來榮宜しからず、局に當れる官吏の潰職より少からざる國益の空しく費消せられたるを見て、失望したるものと如し、彼は歸りてより其視察の復命書を官報に掲げたり。これ堂々たる彼が東方經營の大議論なり。其要は左の數項に歸着す。

- 一、西伯利亞鐵道及び滿洲鐵道の性質は歐亞間の世界的通路なり。
- 二、其性質已に世界的通路なるが故に其任務としても亦世界的なり。即ちこは第一は日清韓三國をして歐洲との關係を密切ならしむべし。第二には東洋

人の歐洲貨物の需用の度を加ふべし。第三には歐洲人が東洋市場に投資するの便を享くるに至るべし。

三、其地方的任務に於ては西伯利亞の生産力を發達し移住を容易にし、鑛業亦從つて發達すべし。故に歐露よりの移民を植うるを以て急務とすべし。

四、西伯利亞鐵道及び滿洲鐵道の任務と性質とを完うせしむる爲め、速にバイカル線の工事を進捗せしむべし。

五、大連灣の築港完成は一年の後にあり。築港完成の曉には以て世界市場の中心たらしめん。之が爲めには凡ての商業上の便利を具へ、石炭集屯を設け、其採掘を盛にすべし。又之を以て世界市場の中心たらしむる上は、露國にして其商權を擴めて之を我有となさんとせば其商人をして市の不動産所有權を握らしめざるべからず。

六、大連と浦鹽との關係に於て斯くの如き施設は浦港の爲めには不利なること勿論なれども、こは一時の現象のみ、將來必ずや之を償ふを得ん。大連を以て要港となすは、これ大局の吾人に命ずる所なり。要港としての性質に於て

は浦港の大連に如かざるは勿論にして、世界的市場として再設され、露國の商權を伸張し以て全局の利を計ること大連に如くはあらず。關東州占領の實行よりして鐵路を黃海に接続するに至りたる今日に於ては、かの結氷港よりは不凍港にして支那の中央市場に進き大連を要港となすべきは事の當然なり。唯適當なる方法を二港に間に付し以て衰頽に陥るの弊を濟はざるべからず。其方法とは他なし、浦港と大連との商業範圍を分割し、浦港は沿黒龍及び東北滿州地方を、大連は南滿州を以て各、其範圍とすべし。又浦港には自由港制を設くべし。

七、西伯利亞滿洲二鐵道、ベルム、マドラス支線、エカテリンブルグ支線、及びバイカル湖周回鐵道の工事費實に十億に上り、其効果の如き決して今日に於て評斷すべきものにあらず。假令今日に於て非常の損失を見ることあるも、將來必ずや至大の利益を見ん。

之を要するに、ウイテは其復命書に於て極東に於ける露國の經營は漸く其緒に就きしに過ぎず、今後施設を要するもの、尙頗る多きを述ぶるものにして、彼は之

が爲めには外國の助力を藉らざるべからずとし、而して其外債募集の必要の一九〇四年にあるべきを云へり。

されどウイッテは此遠大の經濟發展策を實現せんが爲めには内閣に於ける種々の困難と闘はざるべからざりき。彼は素より經濟上よりして其立國の大根本を説きて開國主義を主張し、西伯利亞鐵道を以て單に軍用のものたるに止まらしめずして、經濟上に於て大に之を活用せざるべからずとしその公開すべきを求めたるが茲に第一の難點は旅行券問題に關して起れり。露國從來の制の如くに内地の旅行に際して、嚴重なる旅行券を勵行せば、外國人は斯かる不自由窮屈なる法規の下にあらんを欲せざるべく、斯くて若し外人の旅行家の此線を取るものなきに至れりとせば、之は露國の鐵道營業上に少からざる影響を及ぼすこととなすべし。されど時の内務大臣ブレヴェーは保守主義、鎖國主義の人なりければ、鐵道の爲めに從來の政策を改めて開國主義を宣するを喜ばず、ウイッテと衝突したり。此時に當り地方農民事情調査の爲めに大藏省内に任命せられたる委員等は農民困窮及び不平の原因を以て、警察制度の宜しきを得ざると言論印刷の自

由ならざるに歸するの報告をなしたるもの少なからず。中にもウオロネシニ地方の委員は到底立憲政體を立つるにあらずしては、此病を醫すべからざるを斷言するに至り、此にウイッテの進歩主義とブレヴェーの保守主義とは陰に陽に相争うて終には大藏次官カワレウスキーは其職を辭し、一時はウイッテの地位亦危からんとまで傳へられき。

されど露國內外の經濟上の状態は此際ウイッテの計畫をして中絶せしむるを許さざりければ露帝は一九〇三年一月十二日、各省設置の第百年祭を行ふや、之を機會として左の如き感謝狀を彼に贈り以て帝の信任の依然として更る所なきを示されたり。云く、

朕の尊敬すべき父は今より十年前に卿を以て大藏大臣に任じ、爾來卿は一八九一年の不作にも拘らず、露國の經濟上の實力を確信し、卿の先任者の財政計畫を受けて耐忍、其實行に力め以てアレクサンデル三世の信任に酬い其感謝を得たり。今や卿の財務行政に於ける十年の努力の經過したるの時に當り、朕も亦卿が既往八年に於て朕の信任に對ふる爲めになしたる各般の施設に向

つて朕の感謝を明かにするを愉快とす。而して又卿は露國の經濟力に於ける同一の確信と皇室に對する同一の忠勤とを以て、常に國力の増殖及び上帝より朕に信託せられたる邦家の安全幸福に關する朕の辛苦經營を容易にしたるのみならず、又國民工業の數科を新に起し、貨幣の流通を安固にし、國庫の財源を鞏うし、以て年々膨脹する歲計豫算の權衡を維持せしむることを得たり。卿は又卿の任務の錯雜なるにも拘らず、朕の依囑を容れて朕の多愛するミハイル・アレクサンドロウイチ皇太弟に國家經濟學を教授し、朕に十分の満足と與へたり。茲に卿が現在の地位に居つて國家並に朕の爲めに斯くの如く有益なる忠勤を尙永く繼續せんことを希望し、朕の卿に對して變ることなき意向と感謝とを明言す。

滿洲問題の喧しき一九〇三年の三月三十一日、即ち先帝アレクサンデル三世の誕辰を機として、ニコラス帝俄然行政革新に關する一箇の詔勅を發したるは、以て帝がウッテ等進歩主義者の意見を容るゝに吝ならざりしことを示すものなりき。其詔勅の要旨左の如し。

一、國民に與ふるに信教の自由を以てし、其宗規に従ひ禮拜の儀式を行ふの權利を以てすること。

二、正教僧侶の地位を高め、從來の檀家組織を改め、之に一定の俸給を給與すること。

三、貴族たる地位と農民との爲めに農業に關する信用制度を改良すること。

四、從來の村團制を保存しつゝ、或地方の自治制を發達せしむること。されど農民が村を去ることを比較的容易にし、以て個人の自由を發達せしめ、村の各員たる農民をして聯帶責任を負はしむるの制度を廢すべく、縣郡の行政は土地の有力者を召集して開きたる郡縣會をして處分せしむべし。

以上の中、第三の施設は全くウッテの考案に成りたるものなり。彼の信する所に依れば、露國を改革せんと欲せば、露人其者を一層個人的に進歩開發せしめざるべきなり。從來の如く個人をば村たる團體に附着せしむるは、個人としての露人を進歩せしむる所以にあらず。租税の負擔を人に課せずして、村團に課し、又は個人の自村を去りて他村に移住するを禁止し、若くは其移住を困難にするが如き

は甚しく個人の發達を害するものなり。さればウヰテの考案は斯かる舊弊を一洗して、一方に於ては村團の自治主義を保存すると同時に、他の一方に於ては個人の自由を發揮せしめんとするにあり。蓋し從來の制に依れば、儉約にして勤勉なるものは、常に浪費者にして怠惰なるものゝ爲めに負擔を課せらるゝことゝなるが故に、是に依りて個人の自由發達を庶幾せんこと到底不可能の業たるを以てなり。

五 日露戦前に於ける露國財政とウヰテ

ウヰテは其經濟上、財政上の理由よりして、露國が妄に極東に於て事を構へ、日本を挑發して戦を起するに至らしむるの甚だ不策なるを知れり。斯くの如くんば戦争にして首尾能かりし時は兎も角、一旦、長途の遠征勞を以て逸に當り、武運拙く一敗地に塗れたりしとす。ウヰテが折角に苦心して經營したる十餘年の大計空しく地に委せらるべければなり。されば彼は戦前一年、即ち一九〇三年一月の閣議に於て、帝國財政の現狀を證明すること明晰に、力めて國內の無謀なる進取

策を抑制せんとしたり。彼は先づ十年以前に溯りて、一八九三年の財政を以て一九〇三年の歳計に比較し、經常臨時を併せて總歳出十億留を越えざりしもの、今や其倍額に達して二十億留となれること、されど一九〇三年の歳計に於ても豫算は尙收入の超過を示しつつあり。唯注意すべきは此超過は一九〇〇年、北清事件の緊急に應ずる一時の策として課せられたる間接税の維持に依るものにして、若し此間接税の收入を除くとせば、忽ちにして二千三百萬留の欠陥を見るべきことを述べ、扱て結論して云く、直接税となく、間接税となく、人民の負擔は今や其極點に達し、一國の經濟狀態は此上の増税を許さざるものあり。租税は寧ろ却つて輕減せざるべからず。殊に貧民の負擔に歸すべき税目に於て然り。之に加ふるに現時地方税の負擔に屬しつつある費目にして、今後之を國庫の支辨に移さざるべからざるものあり。國庫の收入は斯くの如くにして自然に大なる影響を被らざる能はざるなりと。

ウヰテは鐵道國有の結果に關しては、之を三期に分けて云へり。第一期は一八八五年より一八九四年に亘る十年間に於て、此期間に於ては私設鐵道の買上げと

鐵道の改善との爲めに少からざる國費を要したり。就中其最も甚じかりしは一八八六年にして、實に六千三百萬留の補助金を要したりき。第二期は一八九五年より一八九九年に亘り、此間に於ては作業の利益が常に支出に超過し、一八九六年に於ては超過一千百萬留に及べり。されど西伯利亞鐵道が其作業を始てよりは、收入超過は漸次減少の傾向を呈し、一八九九年に於ては超過一百万留に下りて、第三期は一九〇〇年を以て始まり、是より鐵道は益、國庫の損害を來したり。一九〇〇年の損害二百六十萬留なりしもの、一九〇一年には三千二百九十萬留となれり。一九〇二年の決算は思ふに其損害額四千五百萬留に達したるべく、一九〇三年には五千百萬留に上らん。此外七月一日より運轉を始むべき東清鐵道の損害豫定額九百萬留を合したらんには合計六千萬留の巨額に上るべし。尙一九〇四年には東清鐵道の損害は此倍額に上るべく、一九〇五年にシードレット・ポロゴス線とオレンブルグ・タシケント線との開通を見るに至らば、前者に於て八百二十萬留、後者に於て七百三十萬留、合計一千五百五十萬留の損害額増加を見るべし。即ち今後二年に於ける鐵道全線の損害は總計八千四百五十萬留とならん。

ウツテは是等鐵道の損害の由來する所を揣摩するに過去十五年間に於ける鐵道の經營が軍事上政治上の必要に出でたるに由ると尙之を細説して云く、此等の鐵道をして經濟上に於て有力なるものたらしめ、其競争者に打ち勝たしめんが爲めには更に毎年數千露里の増設をなすの要あり。元來波蘭及び露西亞の軍用鐵道、烏蘇里鐵道、中央亞細亞の鐵道、東清鐵道の南線等は悉くこれ軍事及び政治上の目的よりして敷設せられたるものにして、其收入は爲めに投じたる資本の利子にだも及ばざるものあり。甚しきに至りては其作業費をだも償ふ能はざるものあり。一八九三年より一九〇三年に至る間に於て單純なる軍事鐵道の改善の爲めに費されたる所は、六千五百五十萬留なりと。彼は尙轉じて其觀察を一般歳出入に向けて經常費増加の趨勢を比較して云く、一八九三年に於ける經常歳出九億四千六百萬留、一九〇三年の經常歳出十三億四千八百五十萬、之を比較するに約四割二分五厘の増加にして、毎年約四分の増加を見たり。而して歳入に就いて之を見るに、過去五年間に於ける平均は、毎年三分二厘の増加に過ぎず。然

るに之にも拘らず、鐵道の爲めに投すべき費用は、毎歳益増加する傾向あり。これ大に憂慮せざるべからざる所なり。一九〇三年に於て豫算は千六百七十萬留の收入過剰を示すと雖、支出増加の傾向は正に之を打ち破らんとす。斯くの如くに層次増長しつつあるの支出の爲めに、國民の負擔は益、其重を加へたり。之を要するに、ウヰテの意見の窮局する所は國民の租稅負擔力には限界あり。此限界を越ゆる時は、國の經濟上の繁榮を損するの結果、内にありては、其實力を殺ぎ外に對しては爲めに從來占め來りたる地位を失却するに至るべし。帝國の防衛、法律秩序の維持、農民の地位の改良、裁判の改正等は、其れ自らに於ては善良なる施設たるを失はざるものなれども、之が爲めに一國の資力を越えて各種の施設をなし、其爲め一國の經濟發展の途を塞ぎ、終には内外に對する國家の地歩を失却するが如きは最も採らざる所なりと云ふにあり。スウェットガルト市發行の露國革命黨機關雜誌「オスヴオボジニエ」の傳ふる所によれば、各大臣はウヰテの此主張を認め、政費の増加に對し、最早増稅の餘地なく、寧ろ租稅を減輕するを以て切要なりと同じたりと云ふ。然るに此後、滿洲撤兵を確約したる露國が漸く日本に

對して威壓的態度を採り來り、極東に於て益、侵略主義を行はんとしたるは、蓋し内治よりも外征を急とする一派の人士のウヰテ等の平和論を制して露帝を動かしたるによりしなり。

六 對日本外交とウヰテ

一八九四年、露國が三國干渉を試みて、日本に挑戦し、日本が空しく之に屈服せし後は露國は只管に日本人民の敵愾心を激越せんことをのみ力め、其一八九七年ツァルスコエ・セロ宮の御前會議に於て極東に關する協議をなすや、時の外務大臣ラムスドルフ伯は陸軍大臣ウァンノグスキーの賛成を得て、極東に於ける露國の勢力を維持せんには此要地を占領するの必要なる所以を極論し、ウヰテは大に之に反對せしも帝は侵略説に耳を傾けたり。これ露國が清國と交渉三個月の後、一八九八年の初めを以て遂に旅順口の占領を敢行するに至りし所以なりき。同時に露國は極東艦隊を創設し、一八九九年には滿洲鐵道の布設に着手し、團匪の亂に乗じては滿洲の占領を行ひ、清國の交渉を受けて一九〇二年九月二十七日

を以て撤兵最終期と約しながら、期日に至りて此を果さざるのみか、剩へ韓半島を窺ふに至りたり。帝の寵臣にして鴨綠江占領の主張者たる顧問官ベゾブラゾフは之に因りて日本との戦機の次第に熱しつつあるを見、陸軍大臣クロバトキンに迫りて南滿州に於て七萬の動員を行はしめ、アレクセーフ、アバザ等と内外相呼應して益々其侵略策にと着手せり。是に於て陸軍大臣クロバトキンは親しく極東視察の途に上り、日本にも到りて具に日本官民の滿韓問題に對する意向を探り、其最後の決意固くして戦争猶其辭する所にあらずとするを見て、鴨綠江遠征の擧を中止するにあらざれば、日本との戦争は避くべきにあらず、日本は威嚇を以て屈するものにあらざる旨を本國政府に急電し、其無謀の擧を思ひ止まらしめんとしたりが、ベゾブラゾフ等の進取主戦黨は廟堂に跳梁して、ウイテ等の經濟的平和論を沮み、一九〇三年七月三十日、露帝をして新に極東總督なるものを設け、之に委ぬるに極東に於ける陸海軍の指揮權を以つてし、尙隣接の諸邦と外交的交渉をなすの大權をも與へたり。アレクセーフ海軍大將之に任せられぬ。クロバトキン陸軍大臣は之を見て八月二日、辭表を提げ、九月十五日、皇帝に上奏

し、軍事上より觀察を試みて日本が優に九十萬以上の動員をなし得ること、露國が極東遠隔の地に於て戦争を試むるの危険至極なることを陳べ、ウイテはラムスドルフ外相と共に之に賛成したりしも、終に容れられざりき。當時ベゾブラゾフが一九〇三年七月二十八日(露曆附)を以て宮廷になせし報告に下の如き事を記せり、云く「小官の接手せる諸報告によれば、現今我國は日本と協商せんとするに際して次の困難あり。

一、日英同盟及び日本が諸外國と協定すべき一切の外交問題に關し、英國の干渉言を換へて云へば日英同盟存在の爲め英國人は我國と日本とが將になさんとする一切の妥協條件に干與するの便宜を有し、日露兩國の反目は英國極東政策の根本なるべきこと。

二、日本は目下朝鮮半島の南部を事實上其勢力の下に置き、其北部は時の経過に伴ひ、獨力を以て占領し得べきものと思惟すること、日本の意志斯く明白なるに依り、吾人が朝鮮に於てなさんとする讓歩は日本人に向つては得易からざるの利益なるべきこと、斯かる利益を獲得したるを以て、極東に於て

我國と提携すべきものたるを日本人をして覺悟せしむるに困難なること。以上の理由により目下の難關を濟せんが爲めに吾人は次の如き唯一の手段を採らんと欲す。

一、大平洋沿岸に我軍事的、政治的勢力を増加すること。

二、日本をして英國を除く外の諸外國より孤立せしむること、思ふに英國は獨力日本を扶くるなきこと過去の如くなるべし。

三、上述の政策能く其功を奏し、日本が英國の政策に依りて得たる自己の地位を自覺するに於ては日本に於ける世界政策の變化を豫想し得べく、對日本協商の成功をも期し得べく、吾人が提出せし現在の讓歩に比し、日本に取りては一層利益なる條件を基礎として協商をも遂げ得べきなり。

斯かる形勢を見たるウヰッテは我事止めりとして直ちに大藏大臣を辭し、大臣委員會長なる閑職に轉じたり。斯くて極東事件は日露戰爭に開展しぬ。

戰爭の間に於て露國の專政を厭惡せる學生や勞働者は得たり賢じと反政府の運動を試み、運動は軍隊の中にも波及して外患と内憂とに並び惱殺せられたる

政府は益窮狀に陥れり。これ實に流石の露國も其幾百年の傳説を破りて茲に立憲の新時代を拓かざるを得ざるに至りし所以なりき。

七 ポーツマスに於けるウヰッテ

合衆國大統領ルーズヴェルトの仲介によりて日露兩國は一九〇五年夏を以て合衆國ポーツマスの軍港に講和談判を開き、此際日本の小村外務大臣に對してウヰッテは露國の全權を命せられて出席したり。ウヰッテが談判首尾能く結了し、凱旋の名譽を負うて歸國の途上カイゼル・ウイレム二世號上に佛國マタン新聞の記者に語りたりし談話は、自家の成功を誇張すること甚しきも、以て當時の有様を推察せしむるに足るものあり。乃ち之を掲ぐ。曰く、

「ポーツマス談判の初めには小村男の意氣込盛にして殆ど征略者の態度を以て我に臨み、一も二もなく其主張を押し通さんとしたれども、余は成るべく談判の破裂を避けんとすれば、出來得るだけの忍耐を以て事に當り、談判の進行さるゝに従つて初め我を壓倒せんとしたりし彼をして、今は余に服従するの已むべか

らざらしめたり。余は如何にして斯かる豫想外の勝利を得たりしか。乞ふ暫らく苦心の跡を物語らん。

「八月十一日の朝余は日本の媾和條件を聞かんが爲めに談判に赴きたり。此日や余の終生忘ること能はざる時なり。席上余の正面に着席したる小村男の大切の書面を提出するや、余は急がず周章せず、之を取りて一瞥を與へ、扱てさも不必要なる書面ともあるかの如くに之を側に置きしまゝ雑談を始めしに、小村男は非常に驚きたる様子にて、屢話頭を媾和談判に轉せんと試みたり。されど余は悟らぬ振して之に應せず、已にして晝飯の時刻迫りたれば余は此貴重文書を卓上に棄て置きて立ち上り、將に室を去らんとしたれば之を見たる日本書記官の一人は大に狼狽したる様にて書類を取り上げ、追ひ掛け來りて曰く、閣下、之を御忘れになれりと。余は無造作にあゝ然りしかと言ひて之を受取りたるのみにて、其儘此重要な文書を半巾同様にフロックコート後部の衣囊に押込みたり。此時余は容易に感情を表はさざる日本全權委員の面上に驚愕の色をありくと読み得たりき。

「余は日本委員と食卓を共にして食事中も故と相變らず、吞氣なる世間話をのみなして談判の大事を打ち忘れたらん如く装ひしが、日本委員も辭し去り、最早憚る所なきに至るや、初めて前の文書を取り出して之を精讀し、殆ど其一言一句を記憶し得るに至れり。

「談判は必ずしも會議室のみに於てせず、屢小村男と公式ならざる會見をもなせしが、その話題に上る所は殆んど常に償金問題なりき。余一日問ふて曰く、露國若し樺太全島を割讓せば貴國は償金問題を撤回せらるべきやと。小村男は直ちに斷じて然らずと云へり。後數日再び質して曰く、聞く、閣下は樺太半部を賣渡すの意ありと。御好意謝するの辭なし。されど若し我國にして之に應せざるときは日本は之を以て戦争繼續の正常なる原因となすの決心あるかと。小村男は又言語明瞭に然りと云へり。以て當時日本政府の同じく其主張を貫かんとするの決心を有せしを推するに足る。會見を重ねること數回、日本提案四個の條件に就いて彼我の間に意志の合致を見る能はず、諸判の様様險惡となり來りたれば、大統領は一書記官をして來つて戦費賠償を承諾せんことを説かしたれども、余は素

より之に同せず、居ること數日、大統領はローゼン男をオイスターベールに招きて日本が満足するだけの金額にて樺太の半分を買ひ戻さんことを申込みしが、余は又遺憾ながら之を拒まざるを得ざりき。大統領は前二回の失敗にも懲りず、三度調停を試みんとて更に樺太全島買戻案を出し其代償は仲裁々判に付して決定せんことを提議し來りたるが、余は此等種々の要求に答へて云へり。余は日本が償金問題を撤回する位ならば、寧ろ戦争を繼續するの決心なるを知れり。戦争の繼續は悲むべしと雖、日本の要求に應せんには露國の國威を汚すに至るを如何にせん。故に將來滿洲に於て再び戦争の悲惨を見るに至るとすとも、こは一に日本が金錢を貪るに急にして、人命の重んずべく平和の尙ふべきを知らざるの致す所、露國が其責に任せざるべきは何人も許す所ならん。大統領は余の動かすべからざるを見るに及び露帝と交渉し、露帝は余の勸を容れて是に初めて樺太半島の割讓を見るに至れり。

日本が其媾和條件の首位に置きたる償金を放棄することは殆ど何人も豫期せざりし所ならん。余は米國に至りてより列國民の同情の、漸くにして日本を離れ

て露國に向はんとするものあるを見て衷心欣喜の情なき能はず。益、此非日本的感情を昂騰せしめんと欲し、乃ち日露戦争の原因となり、且つ世人が視て以て日本の正常なる要求なりとする所の韓國、旅順口、遼東半島の諸問題に就いて讓歩の大雅量ある事を示し、露國が平和を思ふの切なる、出來得る限りの犠牲をなすに吝ならざるを明にし、以て露人に對する世人の疑惑を一掃したり。斯くして殘る所は割地、償金の二問題にして而も割地は償金と聯絡し、世人の注目の焦點となれるは償金問題なりき。之に就いても初めは日本の申出は全勝國として無理ならぬことなりとて、余が斷然之を拒絶せしを聞きて一時物議を醸せしことなきにもあらざりしかど、斯かる中に、余は自余の問題に就いて十二分の讓歩をしたれば、日本も亦多少謙抑の徳なかるべからずと唱へ、日本をして其要求を輕減せしむるも不當にあらずと考ふるものあるに至れり。

「これ余の豫期しつゝなりし好機會なりき。余は是に於て正義人道の上より見て、日本が金錢の爲めに尙血を流さんとするの非を鳴らし、戦争繼續の責任の日本にあるを説き、日本全權をして償金を放棄せしむるか、然らざれば人道の敵とな

るか二者其一を擇ばざるべからざるの窮境に陥らしめんとし、米國多數の新聞紙は熱誠ある同情を以て余の主張に應援し日本を責問するの聲囂々たり。是に於て輿論の趨勢を見るに敏なる大統領は遂に黙すること能はず、八月二十二日、償金の放棄を金子男に勸告し、且つ曰く、貴國若し單に償金問題の爲めに戦争の繼續を取てすべくば、將來米國の幫助を望むべからずと。金子男は全權委員小村男に一應の相談もなく、直ちに之を日本政府に電告し、日本政府をして大なる感動を起さしめたり。翌日、大統領は再び日本が其主張を頑守するの不利益なるを切言して、之が反省を促せしかば、日本は終に心機一轉、俄然其主張を擲棄するに至りしなりき。

少しく手前味噌の感なきにあらずと雖、事實は確に日本は戦に勝ちてポーツマスに敗れたりしなり。ウイッテは此赫々の功を以て一躍して貴族となり、伯爵にせられたり。

八 露國最初の内閣總理大臣

ウイッテがポーツマスより歸りて間もなく、露帝は従來の大臣委員會なるものを眞の内閣組織となして委員會長たるウイッテを内閣總理大臣に任じ、深く其卓越なる手腕に依頼して各般の改革を行はんとしたり。ウイッテは是に於て先づ十月三十日の詔勅を編制したり。こは帝國の保全官民協和を其根本の主義とし、良心言論、集會結社の自由を約するものなり。追うて召集せらるべき國會は立法院によりて如何なる法律もゾーラの協賛を経ずしては作らるべからずとし、其官吏に對するの監督をして有効なるものたらしめんとせり。

この趨勢を見たる官僚と警官とは相互の地位の不安を感じて、「モスクバ新聞」を其反動運動の中心として活動し始めたり。キエフ、オデッサ等には改革革命を唱ふる猶太人多かりしかば、此等の反動黨は終に亂を起して猶太人を窘逐し始めたり。彼得堡にては之に反して労働者を中心とせる立憲革命の氣運熾盛にして、此輩は其代表者の大會を開き、立憲會議及び民主的共和政治を求めて、十一月一日、同盟罷工をば停止して、最後の對政府の戦闘に着手せんと敦囑けり。

衆論紛起して中央に之を制するの力なきは、露國をして破滅の運命に沈ましむ

る所以のものなれば、温和の改革論を唱ふる志士は、十月三十日の詔勅の保持を標榜して、一の大團體を組織し、以てオクトーブリスト(十月黨)と稱せり。ウイッテは力を竭して、是等穩和の見を有するの政黨と和協せんことしたりとも、意見兎角に融和せず、斯くてウイッテの内閣は重立ちたる凡ての政黨の代表者を網羅すること能はずして、之に列したるは反動黨たる内相ヅルノウを初め官僚黨のみ。改革主義者は唯一人のウルツフのみなるの有様なりき。而して芬蘭には八日間、亘れる一般的同盟罷工あり。こは十一月十七日、普通選舉によりて國會を選出すべき旨の詔の發布せらるゝに依りて漸く止み、十一月五日には波蘭にもワルシャワの街上に二十萬人の國民的示威運動あり。ウイッテは依りて十一月十日、全波蘭に戒嚴令を布きたり。十一月八日にはクロンスタットの水兵の一揆あり。前にも記したる彼得堡の労働者大團體は農民出身の法家クルスタレエフを首領として、十一月十一日を以て、労働者は凡て一日八時間以上の労働に従事すべきにあらざるを宣言し、亞いで第二回の總同盟罷工を叫びたり。此企は成功せざりしかど、其勢力の大なる一時はウイッテはクルスタレエフを捕ふるか、クルスタレエフ、ウイッ

テを捕ふるか、何れと評判せしめたる程なりき。

是より先、十月三十一日、ウイッテは主なる記者を召集して其協力を求め、印刷に關する法律を緩和しければ、新に自由を得たる出版界は亦放縱となりて、言論の不羈底止する所を知らざるの有様に陥れり。是に於て政府は十二月七日を以て新法を制定して再び之を緊制したり。同月十二日に至りては、政府は又苛激なる運動を制せんが爲めに彼得堡に戒嚴令を布き集會に解散を命じたり。過激黨は之に抗して革命的宣言を發布し、貯金の引出し、租税支拂の拒否等を勧め、十二月十四日には郵便電信局事務員の全同盟罷業を行はしめ、此政府對過激黨の闘争は全國の主立ちたる市府に波及したり。

ウイッテは是等の反亂に鑑みて、十二月二十四日を以て更に市政權を擴張するの法令を發布したり。こは十月三十日の詔勅と共に全くゾーマ(國會)の性質を一變せるものにて、之に依れば八月十九日の法律に依りて市政權を附與されざりし凡ての者は、悉く選舉權のみならず、被選舉權をも許さるゝこととなれり。爰に於て露國政府は危機を遁るゝを得たり。政府も人民も今や新に國會の準備に餘念

なかりき。準備の爲め種々の法令は雨の如くに下れり。一九〇六年二月二十二日の爆發物取締法、同二十日の警察用として軍隊を使用することに就いての定款、三月九日の財産保護法、四月二十八日の地方労働者の罷工を制せるの法等の如し。此間に總選舉は行はれたり。然るにウイテ首相は内國財政の缺陷を濟せんが爲めに、外資の借入に奔走して首尾能く成功せるが、間もなく第一回の國會の召集を見るに及はずして其職を免せられ、内相ブールノウ亦罷めてゴレミキンは首相となれり。爾來ウイテは閑地にありて動かさず、雖其一舉一動は尙世人の視聽を聳動せしめつゝあり。依然として露國現存の最大の政治家たるを失はざるものあり。

第七 匈牙利政治家

第二十一章

コッスート

一時勢

匈牙利は東歐の一大農業國にして、その平野は頗る物資に富めるのみならず、周圍の山岳亦礦産を出すこと少からず。面積凡そ二萬方里餘、人口凡そ二千萬、單に國土の富饒なるのみならず、國民の大部は熱誠にして勤勉なるマジヤール人より成り、殖産興業のこと見るべきもの少からず、實にこれ東歐の美國たるを失はず。然れども國土は夙く十五世紀より奥太利のハプスブルグ家に合併せられ、其制壓の下に苦むこと茲に年あり。然れども之を奥太利より見れば、面積及び人口に於て奥匈全國の約半部を占めたる匈牙利を有するは、其富強を稱せしむる所にして、之を失ふは實に奥太利國家の休戚に關するものなり。况や幾多の異なる風俗習慣言語を有し、各その國有の國民性を保持せる民族の上に建國せる奥太利の如きは、一度匈牙利にして喪失せんか、應てこれ國內諸種族の動搖を招くも

のにして、幾百年間歐洲強國の一たりし埃太利國家の分裂離散を來すものなり。されば埃太利が國內諸民族の統御に力を盡すと共に、殊に對匈牙利政策の上に苦心して止まざるもの全く此故なりとす。蓋し匈牙利は埃太利の至寶たること英國の印度に於けるが如きものあり。而して一朝之を失ひし時の苦痛は、後者が印度を失ひしより遙に大なるべければなり。殊に十八世紀以降埃太利の威望漸く傾き、加之連年の戰役は財政を枯渴せしめ、十九世紀初期には國土は一代の怪傑ナポレオンの鐵騎に蹂躪せられ、國運頗る振はず。唯宰相メッテルニッヒの辣腕は能く一時の急を糊塗し得て、爾後埃國の高壓手段は益、匈牙利の上に加へられたりと雖、時運推移の大勢は何時までか埃匈兩國の關係を舊時の儘になし置くべき、遂に一大紛議は醸されざるを得ざるに至りぬ。

匈牙利は久しく埃國に合併せられ、埃國と等しくハプスブルグ家の君主を國王に戴けども、其政府及び議會は獨立にして、唯軍事外交財政の三大權のみ埃國政府の指令を仰げり。而して十八世紀末ヨセフ二世帝は匈牙利を以て全然埃太利の治下に立たしめんとし、匈牙利人が尊崇措かざるサン・ステファノの王冠を維納

に移し、強硬なる態度を以て匈牙利に臨みしも、匈牙利人の自活的精神は頑として彼等が特權を主張して止まざりしかば、帝の計策脆く敗れ、以後斯くの如き高壓手段は行はれざりしが、常に祖國の光榮ある歴史を顧みて、埃國の干渉政治に憤慨せる熱血のマジヤール人は、自由政治を求めて止まず、殊に十九世紀初めより全歐に瀰漫せる自由思想の風潮は匈牙利にも浸入し、更に歐米諸地に於ける獨立運動の成功は、マジヤール人の心血を湧かじめしこと少からず。而して埃國は國土統一の爲め、其匈牙利に對する干渉政治を益、嚴にせり。此際匈牙利國內には尙封建時代の舊習存し、貴族僧侶等上級者流が幾多の特權を壟斷して安逸を貪れるに反し、農民の如きは制壓を加へらるること多きが上に、國家に對する負擔の義務頗る重きものあり。而して埃太利政府は此等の固陋なる貴族等を爪牙として、匈牙利に臨み、民論を抑壓して自由思想の興起を防ぎ、一に舊制を維持して國家の動搖を警戒すること嚴なりき。されど河水の氾濫は防ぐべきも、思想の流入は防ぐべからず。時運の進歩と外國の形勢とはマジヤール人をして自由政治を求めしめて止まず。斯くして埃匈兩國の政治的關係は漸く急迫を加ふるに至れり。

且つ又匈牙利國內にはマジャール、スラヴの兩民族對立して其間調和を缺くこと多く、而して奥國政府は其反目を利用して統御の一手段とせしかば、兩族の軋轢甚しく、爲めにマジャール人の獨立心は益々其強固の度を加ふるに至れり。自由主義の思潮は全歐の天地を震撼し、之に對する諸君主の恐慌漸く大にして政府人民の反目甚しく、匈牙利の形勢亦之と同じく、熱血に富めるマジャール人の決心漸く固からんとするの時、彼等の間に出で、一大波瀾を捲き起したるをルイ・コッストとなす。以下少しく彼が變化多き生涯を傳せんかな。

二 コッストの生立及び其記者時代

十九世紀の劈頭、一代の英傑ナポレオンが歐洲大陸に横行して奥太利は方に其防禦に苦心しつゝありし時、ルイ・コッスト(Louis Kossoth)は匈牙利の北隅ゼムブリン州の一小市モノックに生れたり。之を一八〇二年とす。彼の父アンドレアス・コッストはマジャールの古き血統に屬し、辯護士を業とし、且つ市外に多少の資産を有したり。其性質果斷にして勇氣に富みしが、母は又溫和にして慈愛の念厚かり

き。父母の間一男四女あり。ルイ・コッストは其長子なりとす。兩親の性質は能くコッストに於て調和せられ、其剛健不撓の意志は之を父より享け、又一面に於て慈仁の美質を母より傳へたり。コッストは幼時若き新教牧師より教育を受けしが、一家ゼムブリン州の首府ウーリに移るに及び、該市の小學校に入り、更に轉じてカルビン派の教會學校に入れり。彼は長するに及び、當時の匈牙利人士の常として法律の研究に従事し、後故郷に歸り、父の膝下に止りて、其辯護事業を助けたり。而して彼が匈牙利の國狀、政體等に就て知る所ありしは實に此頃にして、祖國の過去と現状とは熱血に富める青年の頭腦を刺激せしこと少からざりしなるべし。斯くて彼は二十一歳の暮ベスト市に赴き、司法官見習として高等裁判所に出席し、難て辯護士試験に及第して故郷に歸り、ゼムブリン州會に舊族(ノビレス)として列席するに至れり。此間彼は又同地方の大地主として名ありしサバリー伯爵未亡人の法律顧問たりき。此時より彼の勵精と敏腕とは夙くも衆の認識する所となり、特に雄辯を以て人に推されたり。以後彼は暫らく郷土に止りて該地の諸事に干與せしが、遂に一八三一年末、サバ

リー伯爵未亡人及び其他上院議員の代理者として翌年の匈牙利國會に出席することとなりぬ。斯くて一八三二年の國會は實にコッスートの政治的生活の第一歩となりぬ。縦令代理者として國會に臨む者は投票の權なかりしも、コッスートは此際政治の實況を窺ひ朝野政治家の活動を目撃し、國家の前途に就いて少からず學ぶ所ありき。殊に自由主義を標榜せる革新黨の諸名士と往來し、就中トランシルヴァニアの愛國者ウエレニ男爵と交ること深かりき。

抑十八世紀末以來、匈牙利國會の議事は常に埃國の政策に關するものにして、該政府の非違を糾彈し、其救濟法を絶叫して止まざりしが、埃國政府の態度は毫も匈牙利人をして満足せしめず、従つて反抗の氣焔益々盛なりき。一八三二年の匈牙利國會亦是にして、革新黨は農民救濟、商業自由、出版自由、土地賣買自由等の政綱を掲げて當路者に肉迫せり。この國會は頗る長期に亘りしも、革新的運動は悉く失敗し、下院を通過せし提案は埃太利の爪牙たる舊貴族より成れる上院に於て悉く否決せられたり。當時埃國の大宰相メッテルニヒは、國家統御の爲め國內諸民族の獨立的運動を忌むこと甚しく、殊に自由思想の漫延を怖れ、出版言論の自

由を制壓すること甚しかりしが、コッスートは此出版の不自由を以て國民の發達を沮害するものとし、先づ國民一般をして國會討議の經過を知らしむる要ありとし、自ら記者となりて、議會報知なる議事録を刊行せり。斯くて彼の政治的生涯の幕は文筆を以て開かれたりき。此議會報知は普通の議事録と異り、新聞紙の體裁にして、議會及び政府の行動を批評せしものなるが、彼の公明正大なる論評は、單に愛國の士をして奮起せしめしのみならず、又反對者をして顔色なからしめき。コッスートは議事録出版禁止の法令に牴觸せざらん爲め、刊行の際には石版術を用ひしも、政府は間もなく此印刷機を沒收せしかば、彼は更に人を備ひて筆記せしめ、以て之を郵送せしめたり。されどこれ將た郵便局にて拒止せられしかば、彼は又特別の配達人を備ふに至れり。斯くの如き政府の妨害にも係らず、國民の間には議事録需要の聲漸く高く、彼等が祖國の政治の實況を知らんとするの念は轉た急なりき。

一八三〇年七月、革命の佛國に破裂するや、自由主義運動は一時全歐を震撼せしが、間もなく鎮撫せられて、唯暗流として社會の上下に浸染したりき。匈牙利の自

由主義も決して閉熄せず、政府と州會との暗闘は益々激甚を加へたり。當時プレスブルグに上流青年者の一團體ありて、盛に時世を誹議せし爲め、其數名は逮捕せられしが、コッスートは當時彼の刊行せし自治の魁なる新聞紙に於て、此等の件に就き盛に政府を攻撃せしかば、彼は遂に輕き謀叛罪に問はれ、一八三七年、其他の志士と共にブダ要塞に檻禁せられ、幽囚二年の後、更に四年の禁錮に處せられたり。一八三九年、匈牙利國會は再び開かれしが、下院の革新黨はコッスート等志士の解放を迫つて止まず。當時墺國政府は東方問題の風雲頗る不穩なるより、匈牙利に對し多額の出金と壯丁とを要求せし際なれば、討論六箇月の後、遂に下院の請求を容れてコッスート以下の志士を出獄せしめたり。之を一八四〇年四月とす。數年の幽囚に依り、コッスートは健康を損すること多く、爲めに一時バラードの山野に放浪して靜養せしが、間もなく倍舊の精力と不撓の勇氣とを抱いて、再び奮闘場裡の人となれり。

コッスートの活動は再びベストに於て開かれたり。彼は先づベスト新報を創刊して、農民救済、トランシルヴァニア合併、自治機關改善等の主義を標榜し、數多知名の

士を糾合して立ちしかば、同志は間もなく匈牙利の有力なる政治雜誌となるに至れり。此前後に於て彼は其父を失ひ、又新妻を迎へしが、妻テレサ・メスレニは實に彼の献身的精神を敬慕するの餘り、彼に嫁したりき。彼今や年齢方に壯、元氣旺盛、加ふるに多少の經驗をも積みて、一方ベスト州會を指導しつゝ、他方に、ベスト新報を提げて、屍を祖國の政界に曝すの氣慨凄しく、其銳鋒當るべからざるものありき。斯くして祖國を念ふこと深き彼は、祖國をして其豊饒なる風土、其剛毅なる國民に相應せる地位を得せしめんとし、一方には政府の威迫を冒し、他方には國民の輕舉を戒めつゝ、其目的に向つて歩武を進めたり。而して彼は匈牙利各地の州會を鼓舞し、彼等をして國民利害の代表者として、自由主義の健闘者として立たしめ、彼等の一致運動に依つて墺國政府の中央集權的運動に對抗せり。當時貴族黨及び政府側の人士は新聞雜誌を創刊して、盛にコッスート一派の士を論難攻撃せしも、銳利なる筆鋒に於てはコッスートに及ばざること遠く、爲めに「ベスト新報」は依然として匈牙利の政界に濶歩し、民論を指導し得て餘ありき。

一八四三年、又匈牙利國會は開かれしが、墺國政府の革新黨抑壓の氣勢は益々盛な

りき。これ當時匈牙利の自由主義を掣肘し、箝制するに好都合なる一機關を生せし故なり。之をクロアチアとなす。是より先東歐のスラヴ民族は自族の存在を自覺すること深く、漸く獨立運動を始めしが、こは露西亞の後援ありし爲め其勢侮り難きものありき。而して匈牙利の治下に立ちしクロアチアのスラヴ人も此運動を開始し、南方諸スラヴ族を訂つて一丸とせる獨立國を建てんとせり。最初塊太利は此事を知ると共に、直ちに之を撲滅せんとせしが、クロアチア人がマジヤール人を嫉視すること甚しきを看て、直ちに態度を一變じ、陰にクロアチア人を使喚して匈牙利の自由運動に當らしめたり。爲めにクロアチアに住せるマジヤール人は少からの迫害に苦みたりき。而して兩國人の反感は其公用語問題に依つて益々激甚を加へたり。從來匈牙利國會にはクロアチアよりも議員を出し、國會の用語は凡て羅句語なりしが、極端なるマジヤール國粹主義者は此際羅句語を全廢してマジヤール語を以て代用せんとせり。これ即ちスラヴ語を使用せるクロアチア人の利害を無視せるものなれば、激烈なる反對論起り、之に依つて兩民族の暗闘は益々急なるに至れり。コッスートは固よりマジヤール語を以て匈牙利の公用語とな

すを望めども、彼の第一の目的は匈牙利部内の諸民族を融合せしめ、以て其上に統一せる新國家を建設するにあれば、マジヤール族の爲めに他民族の利害を蹂躪するを好まず、従つて如上のマジヤール萬能主義者の所論を抑へたりき。斯くて公用語問題は何等の決定をも見ずして國會は閉會せられぬ。國會の閉會に次いでマイラート内閣は辭職し、アッポニ伯代つて匈牙利政府の主領となれり。アッポニは寡人政治を主義とし、佛國流の政府萬能主義を奉せるものなり。されど才幹に富める彼は革新黨の形勢を察し、先づコッスートを追うて自由主義者の上に一大打撃を與へんとせり。其結果コッスートは政府の詭計に陥り、ベスト新報の記者たる地位を失ひ、斯くて彼は從來活動し來りし新聞雜誌記者の徑路を棄てざるべからざるに至りたり。パツチャーニ伯以下自由主義に同情せる人々は彼の失職を憐み、彼に一定の財産を寄附して、彼をして生活の顧慮なく國事に努力せしめんとせしも、高潔なるコッスートは之を辭して郷里に於ける多少の資産に依つて一家を支へ、以て満足したりき。

三 議會に於けるコッスート

埃匈兩國の關係は益々急迫となり、新に匈牙利政府に入りしアッポニ伯の政府萬能主義は着々實行せられたり、全然伊太利黨なる彼は先づ匈牙利自由運動の根據たる州會を拘束せんとし、高級行政官吏を各州會に派遣して激しき干渉をなさしめ、以て州會の自由行動を拘束せり。當時コッスートは文筆を揮ふの自由を缺きしも、尙ベストの州會に臨みて時事を論ずるを得たり。而してベスト州會は全匈牙利の諸州會の牛耳を執りしものなれば従つてコッスートの熱烈なる言論は全國に普及して依然民論の指導者たりき。而して今コッスートはアッポニ伯の干渉政策を見て大に憤慨し、これ匈牙利の自治を覆すものにして、國民の政治的生命は今や其危機に瀕せりと絶叫し、各州會に檄して聯合して之に反抗せんとせり。政府の干渉政策は單に之に止まらず、尙其抑制の手は匈牙利の物質的繁榮の上にも加へられたり。從來匈牙利の煙草栽培及び賣買は自由にして、こは永き歴史を有せるものなりしが、政府は更に一舉にして其利益を政府に收めんとし、煙草專賣法を布き、政府自らシガーを廉價に販賣して私設の製造所を撲滅せんことせり。而して匈牙利の保守黨は此際舉つて身を政府の手に託し、其進歩妨げ策に諷

歌せり。彼等は遂に一八四六年十一月、ブダに會合し、宣言して云く、吾人は現政策の維持せらるゝ間は、凡ゆる問題に於て票數に依つて反對黨を壓倒すべく、以て政府の擁護に努むべしと。要するに彼等は革新的運動が古來傳襲せる彼等の特權を殺がんとするを懼れ、且つ又反對黨が政府と握手せんを患ひて自ら甘んじて埃太利の爪牙となりたりしものなり。

高級行政官吏の派遣及び煙草專賣の實行に依つて埃太利より威迫せられ、同時に内には保守黨の示威運動に依つて激發せられて、革新黨も亦對抗運動を起し、一八四七年三月、大會合を開き、全國諸地の名士集るもの約六百名、而してコッスートは起つて彼等の面前に宣言書を朗讀し、革新黨の名士デアク之を修正し、同黨の綱領として發表せられたり。其要に云く、

前議會以來政府の態度は、立法及び司法の諸件案に對して冷淡なるのみならず、更に之を破却せんとするものあり、これ即ち國家及び憲法の運命を危うするものなり。吾人何ぞ協力奮闘、國民の權利を擁護せしめて可ならんや。之を要するに吾人の望む所は國民の利福にあり。吾人は好んで反對黨の名を買ふも

のにあらず。政府の提言にして國利民福の増進を計るにあらば、吾人何ぞ一臂の勞を惜まんや。吾人の確信は次の如し。國內上下の庶民が一度其利害を同うするに於て國家は興隆すべく、憲法は安固なるべく、祖國の福利は求めらるべく、更に王權に對して有力なる後援となり得べきなり云々。

而して彼等は此目的を達すべき手段として、トランシルヴァニア合併、均等課税、農民救済等を聲言せり。斯くして革新保守兩黨は最早妥協の途なきに至りぬ。此際コッストは衆に向つて上下協和の必要なるを説き、之が爲めには濫に貴族の勢力を排斥すべからずと云へり。彼云く、

吾人は匈牙利の存立が何人の力に依つて維持せらるべきか、匈牙利國民は何人に依つて憲法を確保し、且つ強大に自由に幸福なるべきかを思ふの時、吾人は決して貴族を度外視すべからず、彼等の勢力は千餘年間の戦争に依つて鍊磨せられしものなればなり。要するに貴族は平民と共に平等なる利福を享受し、平民を指導し、訓育し、慈愛と公明なる心を以て平民と交るべきなり。云々。以てコッストが、かの革命者流の破壊主義者と類を異にせるを知るべきなり。

匈牙利國民の自由精神益々盛なるの時、一八四七年の國會は近けり。政府は保守黨と結托し、嚮に派遣せる各州の行政官吏と相應じて革新黨の屈服に努め、賄賂や、威嚇や、凡ゆる手段は用ひられざるなく、爲めに革新黨の名士にして議員に落選するもの多かりき。此時革新黨はコッストを起たしめんとし、政府が凡ゆる妨害を加へしにも係らず、遂に千三百十四票に對する二千九百四十八票の多數を以てコッストを入選せしめたり。斯くて從來野に在つて民論を指導せしコッストは遂に其雄辯を以て國會場裡に臨み、前主領デアク等の名士に代つて革新黨を率ゐ、今や祖國の舊法舊慣の擁護者として仰がるゝに至れり。これ實に彼が其生涯の初めより濶歩し來りし徑路にして、彼が手腕を揮ふべき戦端は彼の眼前に開展せられたるなり。

此議會に於ては革新黨の氣勢頗る盛にして、政府も讓歩する所あり。多年評議の因たりし農民救済の問題も解決せられしが、クロアチア及びトランシルヴァニアの問題に關しては、議論區々として定らず。時に二月革命佛國に破裂し、其報匈牙利に傳はるや、人心の動搖少からず。且つ當時奥國の財政窮迫を極め、紙幣の下落

甚しく従つて國人の兌換券引換を求むるもの多く、上下不安を極めたりき。此時
 コッスートが議會に演説せし財政救済策は少からず人の注意を招きたりき。斯く
 て議會も過ぎ、前内閣は辭職し、革新黨内閣組織せられ、パツチャーニ伯首相となりし
 が、深くコッスートを信せる伯は、直ちに彼を擢んで、大藏大臣に任せり。之を一八
 四八年三月とす。斯くてパツチャーニは維納に急行して、埃帝に新内閣及び新法律の
 認可を求めしが、帝の態度頗る不明瞭にして、其意之を拒むにあること知られし
 かば、匈牙利革新黨の一派はベスト市に暴動を起すに至れり、而して間もなく宣
 せられし勅命に依れば、埃政府は匈牙利の財政及び兵力を全く自己の支配の下
 に置き、匈牙利の大藏大臣及び陸軍大臣をして有名無實のものたらしめんとす
 るにありしかば、國人の激昂甚しく、温良なるパツチャーニ伯もその地位を賭して勅
 命の撤回を逼り、コッスート等も極力反對説を唱へ、之に伴ひて示威運動諸方に起
 りしかば、埃國も遂に讓歩し、四月十一日、帝親しくプレスブルクの議會に行幸し
 て閉會式を行ひ、斯くて革新黨の主張せし新法は認可さるゝに至れり。新法の内
 容は大約次の如きものなるが革新黨の勝利たること明に認めらるべし。

行政權は内閣に依つてのみ執行せらる、而して内閣諸員は自己の職務に對し
 責任を負ふべし。

國君不在の時は總督は代つて王權を執行す。

國民の負擔すべき義務は、人種階級の如何を問はず、平等なり。

匈牙利及びトランシルヴァニアは合併せらる。其各自の國會も亦然り。

國會に出すべきクロアチアの議員は三名より十八名に増加す。但クロアチア
 部内の制度は従前の如し。

匈牙利國境の軍隊は匈牙利陸軍大臣に屬す。

議會終了後コッスートは健康を損するに至りしかば、一時退いて靜養に勉めたり。
 されど此間も彼は財政救済殖産興業の獎勵に意を用ひて少しも休止せず。紙幣
 を發行して財界救済を企てしは此時にして、コッスート紙幣と呼ぶるもの即ち
 是なりとす。

四 時局の切迫

一八四七年より翌年に亘れる國會は終りて、革新黨は多年の宿望を達し得たるに似たれど、四圍の形勢は益々國狀をして紛糾の裡に陥らしめたり。嚮にクロアチア人が匈牙利に對して獨立運動を開始せしことは前述せしが、埃國は陰に陽に之を煽動して以て匈牙利に於けるマジヤール人の革新運動に對抗せしめしかば、その勢益々盛にして、殊にクロアチアの貴族にして同地の都督たるエラチッチの如きは、その張本人なりき。是に於て匈牙利政府はクロアチアの行動を謀叛なりとし、エラチッチを免職し、且つ該地に駐屯せる軍隊を悉く匈牙利陸軍大臣に屬せしめしに、埃國政府は陰にエラチッチに銃砲その他軍需品を給して之を援助せしかば、クロアチアの氣勢少しも衰へず、而して一八四八年六月頃には匈牙利の南部なるセルヴィア人及びトラシシルヴァニアのワラック人も亦叛亂を起せり。これ即ちクロアチアの使嗾に基くものにて、クロアチアは斯くして匈牙利諸地のスラヴ族を糾合してマジヤールの勢力を壓倒せんとするなり。匈牙利は今や四面に敵を受けたり、徒に晏如たらんは遂に自滅の外なきのみ。熱血の男兒コッスト何ぞ黙止せんや。彼は再び文筆を揮つて國論の喚起に勉めたり。彼は先づ

人をして、コッスト新聞を發刊せしめ、之を以て大蔵大臣の機關新聞となし、國人をして内外の形勢を知らしむるに努力せり。彼同紙に書して云く、

余は名譽ある平和を切望す、而して其故に余は戦争の準備をなすは必要にこて避くべからざることを断言す。眠れる巨人に對しては何人も恐を抱く要なし。唯不用意なるは脆弱なるよりも更に危険にして、其結果たるや亡滅は避くべからざるものなり云々。

形勢益々逼迫して遂に一八四八年七月、再び國會は開かれたり。是れより先、埃國は伊太利諸部の叛亂鎮定に苦み、匈牙利軍隊の出兵を求めしが、匈牙利内閣は法規に従ひ之を諾する意ありしも、極端なる革新黨の人士は之を非とし、政府彈劾の聲漸く高し。當時コッストは病みて靜養中なりしも、内閣諸員の懇求により遂に議會に一大演説を試みて政府の意見を述べ、且つ時局の經過を述べて應急の策を開陳せり。熱誠彼の如く、而して雄辯彼の如き志士が病を推して議會壇上に立つ、説く所何ぞ平凡無用の言ならんや、反對黨さへも一語なく、滿場寂として彼の説く所に傾聴しぬ。其要に云く、

今日はこれ極めて重大の時機、匈牙利の安危は懸つて此瞬間にあり。吾人は嚮にクロアチアに對し多くの特權を與へたり。而も吾人の此公明正大なる態度に酬いるに、彼クロアチア人は謀叛を以てせり。斯くして吾人が彼等と調和融合せんとせし好意を蹂躪せり。匈牙利王冠の下に統合せられたる諸部は決して分離さるべきものにあらず。且つ又匈牙利は濫に外國の國事に干與せざると共に、又外國の干渉をも受くべきものにあらず。然るに何事ぞ、露國軍隊は今やアルト河邊に集中せられて、其態度甚だ疑ふべきものあり。これ又吾人の警戒を要する一方面ならずや。而して又埃國政府が陰に陽にクロアチアを幫助しつゝあるは争ふべからざる事實なり。されば嚮に該政府は吾人に向つてクロアチアと和せずんば、匈牙利を敵視するに至らんと云へり。吾人は決して埃國の人民を疑はずと雖、其政府に對しては多大の懸念なき能はず。今や吾人は一方に埃太利の壓迫あり、他方にクロアチアの舉兵あり、セルヴィアの叛亂あり、而してスラヴ民族大統一の精神は益々此傾向を助長せしむ。形勢日に急迫を告ぐる今日に於て吾人が唯囑望し得べきは外國あるのみ、されば吾人は既に英

國政府に對し交渉する所あり、其結果英國の利害に牴觸せざる限り、彼の援助を庶幾し得べきを認めたり。されど佛國及び獨逸聯邦に至つては、國家の現状未だ希望を屬し難きものあり。兎も角危険は日々祖國の頭上に迫りつゝあり。而して此際自ら立つの力なく、徒に外助を待つ國民は自滅の外なきのみ。今日はこれ我國民が大決心を要するの日なり。吾人は獨力にて祖國の權利を擁護せざるべからず。されど吾人は其大決心をして能ふ限り有効ならしむる策を取る要あり。此爲めに政府は軍隊を二十萬人に増加し、之に要する費用として四千二百萬佛の課税を行ふの要あり。而して課税にして足らずんば、或は紙幣を發行し、國債をも起さざるべからず。若し諸氏にして此權限を政府に許與せられなば、詳細の計畫は更に數日の内に諸氏に示さるゝなるべし。今日に於て吾人は國民の將相なり、恐らくは吾人の地位は明日は他人の代る所とならんも、而も國家と國民とは長へに易らず。而して此國家國民を永存せしめんとせば、吾人は先づ國防を嚴にせざるべからず。是非とも二十萬の軍隊は握有せざるべからず云々。

病を推して演壇に立ちし彼は、懸河の辯熱誠の辭説き去り説き來つて止まざりしが、遂に慷慨の情胸に塞つて一語を發する能はず、少時の休憩を得て、僅に氣力を恢復し、再び立つて政府の誠意を誓ひ、國家の事一に政府に託せらるべきを希望して、其大演説を終れり。聽衆の感奮は如何許りぞ。保守黨と云はず、革新黨と云はず、極端主義者と云はず、温和主義者と云はず、一齊に立つて彼の言に同意し、雷の如き拍手の間に、増兵出費の件は決定せられぬ。偉大なる光景、これ實に匈牙利國會開かれし以來稀に見る所の現象なりき。

匈牙利が久しく希望せし軍隊増加及び之に要する出費の件は始めて此に解決せられしが、其軍隊の用途に至つては議論未だ全く定まらず、埃太利に對して比較的好意を有し、比較的時局を樂觀せる温良なる首相バッチャーニは、軍隊をば埃太利に貸して伊太利叛亂の鎮定に助力せしめ、同時に埃國軍隊の援助に依つてクロアチア及びセルヴィア人の叛亂を平定せんとの意あり。蓋し彼は匈牙利は能く獨力にて其國家の急を救治し得るやを危惧せし故なり。されど深く埃太利の誠意を疑へるコッスートは容易に之に同意せず、且つ彼は伊太利人の獨立運動に同

情を表すること深かりき、而して衆議の結果は遂に軍隊を伊太利に派遣するに決したり。此際匈牙利政府は其財政計畫を實行し、一及び二佛の「コッスート紙幣」をも發行したりき。こは元來埃太利の助力なくしては、匈牙利は財政上獨立し能はざるものなりと信せし維納政府を驚かしたること大なりき。而して一八四八年、三月、國庫には五十萬六千六百六十佛の金あるのみなりしが、コッスートの盡力に依り同六月末には五十一萬六千六百七十萬佛に増加するを得たり。而してコッスートは更に着々其計畫を進めて、六千二百萬佛の國債を起して軍備擴張を行ふに決せり。

匈牙利政府の計畫着々其歩武を進めつゝある時、埃太利軍は伊太利に於ける叛徒を破りしかば、之と共に埃國政府の匈牙利に對する態度再び強硬となり、九月一日、埃帝は匈牙利總督が國人に責任内閣を許可せしを越權の所爲として問責し、且つ匈牙利の財政權及び邊境の行政權は、埃國大藏大臣及び同陸軍大臣に屬すべき旨を示せしかば、ベスト國會の憤激一方ならず、殊に下院に於ては各員怒號して止まず、形勢不穩を極めしかば、コッスート等は辛うじて之を調停し、暫らく

怒を抑へて輕舉せざるに決し、先づ百名の委員を維納に派してクロアチアの不法行爲に關し、埃帝に訴ふる所あらしめ、且つ匈牙利軍隊を凡て匈牙利國內に駐在せしめ、匈牙利政府は自由に之を自國防衛の爲めに使用し得むことを哀願せしめしが、帝の答辭は甚だ曖昧にして遂に要領を得ず、委員等は事の成らざるを見て憤然意を決して維納を去れり。而して彼等が歸途汽船に上るや、其帽子に赤羽毛を挿みてクロアチアと戦ふの決意を示しぬ。而して其匈牙利首府に歸着するや、彼等を待ち受けつゝありし諸人の眼底に先づ映せしものは、船首に翻れる赤旗にして、出發の際掲げられし三色の國旗は收められて在らざりき。嗚呼戰機は迫れり、國人の決意は成れり、風雲は遂に捲き起されざるべからず。

五 戰亂の破裂

匈牙利南方の形勢日に急にして、局面の開展は遂にマジヤール人をして起たしめざるを得ざりき。嚮に匈牙利に對して叛旗を翻せしクロアチア都督エラチッチュは、埃軍の後援を頼みて益、凶暴を逞うし、一八四八年九月遂にドラーブ河を渡り

しかば、匈牙利の監視隊も退却の止むなきに至れり、敵軍既に國境を越えて匈牙利に入る。徒に晏如たらんにはこれ自滅を待つに等しきのみ。斯くて匈牙利國內の物情騒然として形勢漸く急迫を告げしかば、遂に温和を主とせる首相バッチャーニは、職を退き、コッストは衆望を負うて匈牙利總督となり、軍國の大權を握つて假政府を組織せり。マジヤールの劍は斯くしてその鞘を脱せんとす。而もバッチャーニは尙平和を求めて止まず、總督ステフン大公と共に、埃匈兩政府の間に往來して斡旋頗る勉むる所あり。コッストも固より平和を切望せりと雖、徒に穩和の解決を急ぐは遂に埃國政府の猾策に陥るものなりと、深く埃國の誠意を疑ひて、頭として最初の決心を易へず、其間に總督は調停運動を停止すべき旨埃帝より命せられしかば、遂に匈牙利を去れり。斯くしてバッチャーニの翹望したる平和の解決も成らず、事を干戈に訴へんこと已に避くべからざるに至れり。時にコッストは絶叫して曰く、

都鄙の有力者は、能ふ限りの壯丁を率ゐてベスプリム地方に集合せよ。而して婦人は該地方に墓穴を掘れ。其墓穴は實に敵屍を埋むるか、又祖國の臣民と榮

譽を葬るべきもの。而して其上には吾人が失敗の記念として神は怯懦を罰すてふ碑銘を建つべきか、或は又自由の常盤木を植ゑて吾人が成功の記念とすべきものなり。嗚呼自由と榮譽と幸福と希くは吾マジャールの上にあれよ。

匈牙利の状況斯くの如し、埃國政府も亦匈牙利クローチア兩地の軍事總督としてランベルヒ將軍を任命し、直ちに赴いて兩地の叛亂を鎮撫すべきを命せしかば、匈牙利人の激昂更に甚しく、國會は將軍の任命を無効と宣言せり。然るにランベルヒ將軍は既にベスト市に近づき、ブダ要塞を占領して市民を威壓すべしとの急報あり。時にコッスートは議會に在りしが、之を聞いて急遽難を救はん爲めに馳せ向ひ、一群の市民は怒號しつゝ彼に従ひしが、遂にランベルヒ將軍の向ひ來るに逢ふや、激昂せる市民は前後を顧るの暇なく、直ちに將軍を馬上より引き卸して之を虐殺せり。嗚呼匈牙利の軍隊及び國民は激昂既に其頂に達せり。事茲に至る、蓋し又止むを得ざるなり。

是より先、クローチアの叛徒匈牙利部内に侵入するや、匈牙利軍隊は直ちに之に向ひ九月廿九日、大に之をスコローに破り、更に十月五日、一萬二千人の敵軍を降

服せしめ、敵將エラチッチの逃ぐるを追ひて埃太利の國境に至り、此所にて兵を屯して埃國政府に叛亂者エラチッチを引渡さんことを要求したり。時に埃太利の首都維納にも暴動起れり。元來埃國內にも自由思想は瀰漫し、憲法要求の聲盛なりしが、遂に政府と人民との間に衝突起り、一八四八年三月及び八月には暴動を醸せしことありしが、今匈牙利問題の急迫を告ぐるに及び、維納市民の内には匈牙利の行動に同情を表するもの少からず、而して議會も亦政府に反對し、エラチッチの免職を要求して止まざりき。然るに埃國政府は毫も之には耳を借さず、匈牙利の風雲急なるに及び、維納の守兵に匈牙利進發を命令せしが、其一部は命に服せず、且つ學生勞働者等の之に加擔するものありて進發を肯んせざりしかば、政府は他軍隊に命じて彼等を銃撃せしめしに、却つて市民の激昂を招き、忽ち暴徒は起ちて陸軍大臣ラツールを襲ひて之を殺し、更に武庫を毀ら、軍需品を掠奪し、凶熾悔るべからざりしかば、皇帝も遂にオルミュツに蒙塵するに至れり。之を一八四八年十月初旬とす。斯くて首都維納は無政府の状態に陥り、全く暴徒の占領する所となりしかば、埃將ウインディングレーツは來つて首都を圍み、クローチアより逃

れ來りしエラチッチェと協力して盛に暴徒を砲撃せり。されども暴徒は匈牙利軍の來援を頼んで頑強なる抵抗を試み容易に屈せざりき。

嚮にクロアチア軍を追撃して埃國々境に至りたる匈牙利軍は、國境に駐屯して埃國政府に敵將エラチッチェの武裝解除或は其引渡を要求せしかど、埃國政府は何等の返答をも與へず、却つて益々エラチッチェを擁護せり。時にコッスートは匈牙利軍中に来りしが、埃國政府の眞意竟に匈牙利の要求を拒むにゐるを知つて深く決する所あり、且つ維納に於ける一揆の運命頗る急なるを聞き、論難數次の後遂に意を決して進軍を命じ、茲に匈牙利軍は國境を越えて彼等に對峙せる埃國軍を攻撃せり。形勢は大に改りぬ。局面は大に開展しぬ。今や匈牙利は斷然埃太利と砲火の間に相見えしなり。斯くて十月廿九日、兩軍シュエハットに戦ひたるも、衆寡敵せず、匈牙利軍は空しく敗退の非運に陥りぬ。而して此退却の際、匈牙利の都將ゲルゲーは能く匈牙利軍の全滅を救ひ、大に武名を輝せしが、以後彼の名は匈牙利史上にコッスートと並びて重視せらるゝに至れり。コッスート等が年來畫策し來りしマジヤールの運動は先づ不幸の戦敗を以て其幕を開かれしが、之が爲めに維納の

一揆も顔色を失ひ、首都は忽ち埃國の爲めに陥れられ、激烈なる市街戦の後、暴徒は四散し、斯くて埃國內に於ける革新運動も全く失敗に歸しぬ。而して埃國政府の氣焰益々揚り、十一月六日には勅令を出して、匈牙利王冠治下の諸地に對し武力鎮定を命じ、且つベスト國會の決議は凡て勅裁なきもの故無効なりとし、コッスート以下の黨與は凡て叛逆者と宣告せられたり。而して維納の一揆を壓服せしウィンディングレーフ將軍は、エラチッチェと共に大軍を率ゐて匈牙利に入り、一舉にして國を屠らんとす。此後十二月二日、埃帝フルデナンド一世は國家の多難に耐へず、遂に其位を皇甥フランツ・ヨーゼフに譲りぬ。シュエハット戦敗後、匈牙利は一時絶望の狀態に陥りぬ。ベスト國會は類に埃國の不法を唱へて其軍隊の士氣を鼓舞すること少からざりしも、軍隊は多く老朽の兵士か、然らずんば新募の若兵より成り、その狀甚だ悲むべきものありき。且つシュエハットの戦敗の爲め、獨逸匈牙利兩地の運動の連絡を失ひたるは極めて不幸なりき。而して嚮に維納の叛亂を平げし敵軍は、エラチッチェ等の指揮の下にドラーブ河よりカルパチア山に至る線を占領し、十一萬の大軍は少數の匈牙利軍を壓して迫り來りしかば、將軍ゲルゲーはタ

イス河の線を放棄して退却せんことを主張せしむる國防委員長たるコッストは一寸の土地たりとも失はざらんことを民心の離散計るべからざるものありとて、頑として戦線死守を主張して止まざりき。而も匈牙利の形勢は日に月に非にして、埃軍の侵入甚だ速に、エペリリス及びカシウ先づ陥り、將軍ゲルゲーもライタ河を通過するときエラチッチの爲めに破られ、プレスブルグ及びラーブ河沿線の堡砦悉く敵手に歸し、ゲルゲーの後隊は十二月廿八日、辛うじてパボルナに達するを得しのみなり。加之、敵の一軍は小カルバチア山を越えて北方より侵入し來れり。此時敵將ウインディングレーツはラーブに在りしが、匈牙利人に對し、威嚇的布告を出して、此際些少なりとも革命運動に加擔し、同意するものは嚴重に處分すべき旨を宣言し、意氣頗る盛なり。而して此時コッストと同じく不斷の退却を以て屈辱となし、寄せ來る敵軍の狂瀾を支へんとせしベルツェル將軍の計畫も、十二月卅一日、モールの戦敗にて畫餅に歸したり。

六 戦亂の經過

戦況日に非にして人心の動搖亦計るべからず、遂にパツチャーニ伯を首席となせる數名の協議委員は、敵將ウインディングレーツと會見すべく、其許に派遣せられたるも、敵將は匈牙利の無條件降服を主張して會見を拒みしかば、此窮策も功を奏せず、終にコッスト等首都を棄て、ゲルゲーの建策に基きてタイヌ河を越えて防戦するに決せり。斯くして國會及び國防委員會はデブレチンに避難し、ベルツェル將軍はソルノクに止りて之を掩護し、又ゲルゲー將軍もワイツェンに留まりて敵に當れり。戦敗又戦敗形勢日に盛りて志士暗恨に咽ぶ時、國都ブダペストは遂に埃軍の掌握に歸せり。これ實に一八四九年一月五日なりとす。埃軍ブダペストに入るや、志士の追捕せらるるもの甚だ多く、パツチャーニ伯も亦縲紲の辱を免るゝ能はざりき。而も匈牙利の不幸は之に止らず、政府側を代表したるコッスト等軍人派なるゲルゲー將軍とは常に不和にして、殊にゲルゲーはコッストを憎んで已まず。國防委員等は自由の爲めに戦へる祖國の軍隊を、備兵として蔑視するものなりとて其命に服せず、且つ竊に自ら匈牙利軍政の全權を握らんとすの野心ありき。この時ゲルゲーはタイヌ河方面の軍隊と合せんとせしも成らず、遂にシニニツ

ツ附近の山間に逃入せしが、再び出でトローカイ方面に在りしクラブカ將軍の軍と相應じて敵軍をカシヤウより驅逐したり。

是より先、コッスート等國防委員はゲルゲー將軍の不遜なる行動を憎み、指揮權を委ぬべき人物を求むること久しかりしが、幸にも嚮に波蘭叛亂の際、露將ティービッチと戦つて令名ありし波蘭の老將軍デンピンスキは匈牙利に居りしかば、直ちに同人を歓迎して之に託するに匈牙利軍隊の總指揮權を以てせり。斯くして匈牙利軍はベストを恢復すべく進撃せしも、諸將の一致は到底望むべからざりき。二月廿六日匈牙利軍はカボルナに陣せしが、此時埃軍は猛烈に進攻し來り、匈軍も能く奮闘して二度之を撃退せしが、デンピンスキとゲルゲーとの間に命令屢、齟齬し殊にゲルゲーの不柔順の行動は遂に全軍破綻の因となり、敵將シュリックが味方の右翼を横撃するに及び、遂に全軍敗退するの已むなきに至れり。此カボルナの戦敗は戦争として注意すべき大事件にあらざるも、之が爲めにデンピンスキ將軍に對する批難俄に高く、ゲルゲー、クラブカ等の各部將は擧つてこの老將軍の命を奉せざるを誓ふに至りぬ。是に至つてコッスートも讓歩せざるを得ず、

遂にデンピンスキを免じてフッター將軍をして代らしめしも、將軍間もなく病みて軍隊の全權は再びゲルゲーに屬するに至りぬ。

此頃英國にては埃國の伊太利政策には干涉すべきも、匈牙利に對する其行動には傍觀の態度を取るに決せしかば、埃國は外國干涉の患なきに乘じ、益々其高壓手段を逞うせり。されど時運の變轉は匈國をして何時までも絶望の淵に沈ましめざりき。コッスートよりトランシルヴァニアの軍隊の全權を委ねられしベム將軍は二三次の敗北に屈せず、遂に埃軍を破りて軍氣頗る揚り、殊に來援せし露軍を驅逐して三月十一日、ヘルマンヌスタットを恢復し、全トランシルヴァニアを鎮撫して南方のベルセル將軍と連絡を通じ、ベルセル將軍も亦セルヴァニアを破り、バナート地方を平定して、匈牙利軍の爲めに大に氣勢を添へたりき。加之西方にてもウィンディングレーツ親王がベストに止まりて埃軍の行動敏活を缺きし間に、ゲルゲー將軍は再び主力を集中し、五萬の軍隊を擁してカボルナよりボロスノに至る線を占領し、四月に入りて諸道より一齊に進み、行く敵を破りて之をベストに壓迫せり。是に於て埃國政府は軍將の無能を責めてウエルデンを以て總指令官とし、又

エラチッチュをも召喚して彼をして南方の守備に當らしめたり。而して埃軍は新指令官の命に依り、ベストの防衛を難しとして漸次退却を開始するに至りぬ。而して此際コッストが常に陣中に在りしことは、匈軍の士氣を鼓舞するに力ありき。連敗の非運の裡より一躍連勝の成功を贏ち得し匈牙利上下の狂喜は譬ふるに物なかりき。熱烈火の如きコッストの血何ぞ湧き返らざるを得んや。斯くて彼は大膽にも匈牙利の獨立を絶叫するに至りぬ。嗚呼彼は遂に戦捷に眩惑せし一人たるを免れざりき。遂に熱血兒たるを免れざりき。コッストの絶叫は遂に議會を動かして茲に「獨立の宣言はなされぬ。實にこれ一八四九年四月十四日とす。彼が此時の演説の大要に云く、

三百年來、匈牙利は埃太利の爲めに苦められたりき。神に依つて恵まれたる我美しき邦土は、十萬方哩の物資に富める國土と、内に包容せる千五百萬の勤勉勇武なる人民とに依つて、實に東歐の樂園たるを失はず。而も此美しき祖國の發達は、如何に埃國の壓迫に依つて沮害せられしぞ。かのハブスブルグ王家の不信なる態度は、如何に祖國に禍すること甚しかりしぞ。今や吾人は神明の裁

判に訴へ、吾人既得の權利及び實力に依つて、公明なる列國の前に左の條項を宣言するものなり。

- 一、匈牙利はトランシルヴァニアと共に一體となりて獨立國を形成す。
- 二、埃太利のハブスブルグ・ローレン王家は、匈牙利の王位及び國土に對して何等の權利を有せず。
- 三、匈牙利は從來同一主權の下に支配せられし諸政府に對し、親善の關係を保持せん。

四、將來に於て取るべき政府の形式は、國民議會に依つて決定せらるべし。而して更にコッストは議會より選ばれて匈牙利總督の地位に立ち、國家は方にコッストを戴ける共和政府の治下にありき。

是に於てコッストの得意は其極に達せしなるべきも、如上の行動は戦捷の美酒に沈醉せし嫌なくんばあらず。匈牙利が多年の歴史を有せる埃太利との堅き連鎖を絶つて、一舉遂に自由の行動を取るに至りし事實は、却つて彼等の間に混亂を益さしめし傾向ありしのみならず、殊にマジャール人の悲壯なる決心と、勇武

なる奮闘とに對して寄せられし内外の同情も滅却するに至りしは、頗る惜むべきことなりとす。此間匈牙利諸將軍の不和は益々甚しく、行動常に一ならず、殊にゲルゲーは政府の命を奉せざることを大なりき。さればコッスートの苦心は一方ならず、クラブカ將軍の助力を得て、諸將に一致行動を取るべきを警告すること頻なり。而して匈牙利軍は益々進みてブダを強襲し、之を埃國軍の手より奪ひ、六月初旬、コッスートは意氣揚々として再びベストに入市し、最後の勝利は茲に其曙光を放ちし如く見えしも、運命の變轉は遂に量るべからず、懸て曙光を蔽ふべき暗雲は來らざるを得ざりき。

抑、匈牙利が其獨立を全うせんと思せば、次の二件を豫定せざるべからず。第一に匈牙利は埃太利以外の敵に對して抗せざることは是なり。第二に埃太利軍隊の精銳は常に伊太利戰役に從事せんことは是なり。然るに埃國軍隊は伊太利に於て著々効果を收め、名將ラデッキ一部下の良將は今や漸次伊太利より東方に轉送せられつゝあり。斯くて猛勇を以て聞えしハイナウ將軍は匈牙利鎮撫の全權を託せられて東方に來れり。加之、埃國は更に一步を進めて援助を外國に求むるに至りぬ。

是より先、埃帝フランツヨセフは匈牙利の氣勢頗る揚り、動もすれば首都維納の運命も計られざるを患ひ、遂に膝を屈して恭しく露帝ニコラス一世に援助を求めたり。是に於て露將バスキウエッチの指揮の下に援軍は派遣せられ、且つ露帝の希望に依り、露軍を主力軍隊とし、埃國軍隊は其補助隊として行動することとなり。

露將バスキウエッチはカルパチア山をば越えて直ちに匈牙利の平野に降り、之と同時に露將リューデルの率ゐし一隊はトランシルヴァニアに侵入せり。兩軍合せて兵約十五萬人とす。意外の邊に意外の強敵の現れしを見て、匈牙利の上下は震駭せり。コッスートは已むを得ず、村市を毀ち、物資を空うして、敵をして飢餓に苦まじめんとせしも、當時人民の窮困は甚しく、殊に紙幣濫發の結果は益々此傾向を助長せしかば、到底斯くの如き極端なる手段を取るを許さず、殊に最もコッスートの頭腦を悩ませしは、形勢非なるに及び諸將の反目愈々激しく、加之、諸將が漸く彼より背き去らんとする傾向ありしことなり。而して此際ゲルゲー將軍が彼に對して不遜の行動多かりしことは言ふを俟たず。然れどもコッスートの百方盡力せし

結果諸軍は埃露兩面の敵に向つて行動しつゝありしが、六月中旬ゲルゲイのベレドに敗れしのみならず、ラーブ河沿岸の市は埃將ハイナウの爲めに奪取せられしかば、コッスト等は退いてバナート地方をば根據地として、タイス及びマロッシュ兩河に軍隊を集中するに決せり。斯くて西北方にてはコモルンの一市が唯其守を失はざるのみなりき。而して議會及び政府は再び亡命してセゲルンに據るに至れり。失敗に失敗を重ねたる軍隊の失態に憤慨して、コッストは、ゲルゲイの手より指揮權を奪ひ、メザロス將軍をして代はらしめんとせしも、部將の反抗の爲め遂ぐるを得ざりき。此間戦況は一勝一敗ありしが、八月三日に至り、セゲデンの地は埃將ハイナウの爲めに略取せられぬ。此地は嚮に匈牙利軍が其諸隊を集中して一戦を試みんとせし地なりしも、集中未だ行はれざるに、夙くも埃軍の襲ふ所となりて、事全く豫期と違ひしかば、政府はセゲルンの地さへも棄て、遂にアラドの地に逃れ、之を以て最後の根據地とするの已むを得ざるに至れり。而して埃軍の銳鋒益々侮るべからず、ハイナウ將軍はタイス河一帯の線を壓迫し來り、八月五日、セレドより匈牙利軍を追ひてアラドに通ずる道を制し、更に又南方にては

ベム將軍が幾度か苦戰惡闘を重ねしにも係らず、遂に露將リュールの率ゐる優勢なる軍の爲めにロス・シ・インに敗北して、ベムは辛うじてテメシバルに逃るゝに至れり。又ゲルゲイ將軍はアラド方面の敗報を聞き、之を救はんとして來りしも時既に遅く、又如何ともすべからざりき。

非運は幾度か匈牙利の上に落ち來りて、状況何ぞ悲惨を極めたるや。然れども非運は必ずしも戰敗の罪のみならず、八月五日、クラブカ將軍はコモルンより突出して埃軍を破り、鹵獲少からず。加之、ゲルゲイ將軍の軍は其將士の精銳を以て、尙埃軍の前進を阻止し得べく、又南方には敗れしと雖、尙勇猛なるベム將軍の在るあり。而してアラドの要塞は嚴として尙其中樞たる地位を保ち、且つ又熱血に富めるマジール人はコッストが一呼の下に戈を執つて國難に赴くの慨を失はず、されば匈牙利が一度祖國の運命を賭して、埃露兩強の精銳と雌雄を決せんは、必ずしも不可能のことにあらず、されど之が爲めには、擧國の一致なかるべからず、上下の協力なかるべからず、埃露兩國は必ずしも恐るゝに足らざるも、悲哉、匈牙利は一致を缺けり、協和を缺けり、外より寇する敵は防ぐべきも、内に起る

の敵は防ぐべからず。斯くてコッスートが半生の熱血を濺ぎし事業は水泡に歸したり。

是より先、屢政府の命に服せざりしゲルゲー將軍は、露軍に對し秘密に交渉する所あり。斯くて彼は露國の後援に依つて立憲政府を建て、露國のコンスタンティン大公を戴いて匈牙利王とし、自ら政府の主長たらんとせり。コッスートの憤慨如何ばかりぞ。然れども今やゲルゲーの率ゐる軍隊は匈牙利唯一の武器なり。之を失はば匈牙利の獨立も如何ともすべからず。嗚呼外敵は防ぐべきも内敵は防ぐべからず。政府は遂に職を去るに決しぬ。斯くしてアラドの假政府は解散し、コッスートは全權をゲルゲー將軍に譲りて、潔く匈牙利總督の地位を棄てたり。此際彼が國民に宣せし訣別の辭は次の如きものとす。

天運吾人に與せずして、幾度か戰敗を重ねし後、吾人は最早埃露聯合軍に對して防禦を繼續する能はざるに至れり。茲に至つて祖國の存立と擁護とを全うし得べきものは、唯軍隊指揮官の技能あるのみ。予は既に現政府の存立が單に無用となれるのみならず、更に又國民に有害なるを知りぬ。今予は此確信に基

きて次の決心を宣言す。予をして畢生の熱血を注いで國事に狂奔せしめし愛國心は、予及び全内閣員をして國事指導の任を放棄せしめ、且つ軍事行政の全權をゲルゲー將軍に譲りて、國民が其權利に依つて自ら國事を處理するに至るまで、一に將軍の指令を仰がしむ。予は神明に誓つてゲルゲー將軍が全力を以て我不幸なる國家の國民的政治的獨立及び其將來の安全を防護すべきを信ず。彼が祖國を愛するや、須らく公明正大なるべく、又彼が國民の獨立及び幸福の爲めに盡す努力は、予がなせしより更に大なる成功を以て酬いられんことを祈る。吾人は既に力盡きたり。今や祖國を擁護せんことは吾人の能はざる所。若し予の一死以て祖國の擁護に功あらば、一身を犠牲にする何ぞ敢て辭せんや。噫、正義慈愛の念深き神よ、願くば我不運なる國民に擁護の惠を垂れよ。嗚呼時運非にして男子志遂に成らず、半生苦心の事業を棄て、空しく流落の身となる。コッスート心中の懊惱察すべきにあらずや。斯くて即日、ゲルゲー將軍は代つて匈牙利總督となり、直ちに善後策に着手せしが、事茲に至る既に如何ともすべからず。此際執るべき策は唯全軍の無條件降服あるのみ。コッスート等が政府を

去りしより越えて二日即ち八月十三日、ピラゴスの野に於てゲルゲー將軍は二萬三千人の部下と百四十四門の砲とを捧げて、露將バスキウ、エッチの軍門に降服したり。之を初めとして其他の諸隊も續々降服し、又ベム將軍も八月十五日ルゴスに於て最後の一戦を試みし後、土耳其に亡命し、唯驍勇なるクラブカ將軍のみ、コモルンに據つて屈せざりしが、竟に九月廿七日、開城の已むなきに至れり。斯くして匈牙利獨立の壯舉空しく一場の夢と化し終れり。

七 流浪のコースト

ゲルゲー將軍ピラゴスに降りし以後の匈牙利の狀態は、極めて悲惨なるものなりき。露軍の銃砲に次で來りしものは、埃太利の捕縄なりき。斯くて匈牙利には軍政布かれ、埃國軍隊の峻嚴苛酷なる搜索は、國內普く行はれ、志士は續々捕へられて、刑戮に死するもの擧げて數ふべからず。ゲルゲー將軍さへも追求頗る急にして、纔に露軍の庇護に依つて生命を全うせしのみなりき。是より先、コーストは政府を去りし後、直ちにアラドを亡命し、同志の諸將を率ゐて土耳其に逃れ、土廷の

の庇護を求めたり。彼が漂流の生涯は、茲に始まりぬ。彼の土耳其に入りしを聞くと、埃露兩國は直ちに彼の引渡を土廷に迫りしも、土廷は之を拒みしかば、コーストは暫時は安全にウィッティンに止まるを得たりき。これ一時は陰に英國政府が彼を庇護せしに依るものとす。彼は土耳其に於て鄭重なる保護を受けし後、小亞細亞に赴き、此所にて彼の妻子と會合せり。此間英米兩國は彼及び其同志の士が流浪の身となれるに深く同情を寄せしが、遂に一八五一年九月、彼等は追捕の人たるを免れて自由の身となり、コーストは米艦に投じて佛國に赴き、マルセーユに上陸し、盛大なる歓迎を受けたり。されど大統領ルイ・ナポレオンは彼の佛國內通過を許さざりしかば、再び船に投じて遂に同年十月、英國サウザンプトンに上陸せり。

是より先、英人等はコーストの非運を憐み、其救助に盡力せしが、今コーストの來遊に會し、壯大なる歓迎式を以て彼を迎へたり。彼は暫らく英國に留まり、其間到る所の都市にて歡待せられ、特に倫敦にては同市長より正式の歓迎を受けたりき。而して彼は到る處に演説を試みて、英人の熱誠なる歓迎に酬いたるが、其間に

彼が鼓吹したる露國に對する反感は、英人を刺戟せしこと少からず。後クリム戰役開始せられんとするや、英人が痛く露國を惡みしも、亦コッストの演説に負ふ所少からざりしと云ふ。次に彼がパーミンガム市公會堂にて試みし演説の大要を記すべし。

革命が至大の不幸たることは予の確信する所なり。されど又抑壓せられたる人民が百計盡きたる曉には、當然革命を起すべき権利を有せることも事實なりとす。思ふに英人諸士は此眞理を熟知せらるゝなるべし。何となれば英國の自由と盛大とは實に此眞理を實行せし結果なればなり。今此に時局に關せる二個の場合を假想せんか、其一は若し大陸に於て某兩國互に戦ひたりとせん、此時に於て英國は決して拱手傍觀する能はざるべし。若し英國の干與することなくして歐羅巴の運命が決せらるゝ如きことあらば、これ實に英國が列強の一たる地位を失ひしものとす。今假に現今の危機に際して反動及び專制政治にして大陸を風靡せんか、英國の名譽は既に喪失せられしものにて、コサック騎兵が馬をテームス河に水飼ふを待たずして明白なりとす。又第二の場合に

於ては國家又國民が外國に對して鬭争することなく、唯國民が其支配者に對して國內に於て紛争を重ねたる際には、人道は英國國民に向つて何物を要求すべきか、蓋し英國國民は諸國民の天賦の權利を尊重せるものなれば、此際諸國民が英人に期待する所のものは、英人が大聲疾呼權利の迫害を沮止せんこと以外ならず。予が今諸士に向つて説く所の要旨は次の如し。曰く、匈牙利に對する露國の干渉は、露帝をして其足を歐羅巴に加へしめたるものなりと。嗚呼、匈牙利が自由を得ざる間、又伊太利が抑壓を脱せざる間、露帝の手は實に歐洲の咽喉を扼しつゝあるものなり。而して恐らく其手は咽喉より頭上に加へらるゝに至るべく、此時こそ歐羅巴に平和なく安靜なく、戰爭の噴火山は此に爆發して、紛亂流血終に止む時なかるべし。記せよ、匈牙利の問題はこれ各國民の自由の安危の懸れる問題なることを。

以てコッストが英國人に向つて何物を要求せしかは明かなるべし。

其後彼は米國に赴き、諸地にて一方ならぬ歡迎を受けしも、其際彼が餘に米人の同情を煽動して、聽ては米國をして埃國と國際的紛糾に陥らしめんとせし傾向

ありしかば、却つて米人の同情を失ひ、遂には歓迎も頗る冷淡となるに至りしは、彼の爲めに惜むべきなり。斯くて彼は再び英國に來り、此所に止ること約十年にして一八六二年に及べり。コッストは流浪既に十余年に及びしも、其間一日も祖國を忘れず、常に其興復を念とし、日夜畫策する所あり。さればクリム戰役に際し、匈牙利人をして起たしめんと欲し、軍隊組織を計畫せしも成らず、又一八五九年、埃伊兩國の關係切迫するや、再び匈牙利人をして事を舉げしめんとせしも、事志と違ひて成らず。佛帝ナポレオン三世に交渉し、匈牙利軍隊をしてダルマチア海岸に出でしめんとせしも、ビルラフランカの和約成立するに及びて計畫畫餅に歸しぬ。此の如く幾度か祖國の利權恢復を企てしも、天運遂に彼を見棄てしか、何れも失敗の非運に終りぬ。彼は又英國滞在中、伊太利の志士マッヂニーと相往來して肝膽相照らせしも、マッヂニーが伊太利の急を救はん爲め、コッストの名を利用せしことありし以來、交情又舊の如くなるを得ざりき。

コッスト齡既に六十、半生苦心の事業一敗地に塗れてより、雄志未だ尙撓まず、半白の老雄尙祖國の興隆を念として止まず、他國に漂浪して畫策する所一再なら

ざりしも、事悉く志と違ひ、遂に彼は一八六二年、佛國を去りて北伊太利に赴き、トリノの市に其靜かなる晩年を送れり。其間本國にては埃國政府と交渉數次にして、終に一八六六年、妥協條約は結ばれ、デアク等多數の志士は皆之を承認せしも、コッストは頑として此妥協を拒み、埃國の態度不信なる限り、埃匈牙利國は到底一致し難きものなりとの初一念を翻さざりき。されば其翌年彼は再び匈牙利國會議員に選出せられ、又大赦に依つて歸國の恩典に浴せしも、彼は敗餘の祖國を見るを潔しとせず、其頑強なる一徹心は彼をして決して匈牙利の地を踏まじめず、斯くて敗軍の將は寂しき晩年をトリノ市に過せしが、遂に一八九四年三月二十三日、九十三歳を一期として異域の空に其變化多き生涯を終りぬ。

八 コッストの事業

コッストは熱誠の男兒なり。烈々たる愛國の情は九十餘歳の生涯を通じて未だ一日も冷却せしことあらず。彼は又健闘の勇士なり、艱難に次ぐに艱難を以てするも、彼が不撓の精神は未だ一度も萎縮せしことあらず。彼米國に漂浪せし時、ボ

ストーンに於て叫んで曰く、

自由は決して天恵として國民に與へらるゝものにあらず。唯國民奮闘の褒賞として初めて享受せらるべきものなり。國民の犠牲、國民の辛勞、國民の堅志、此等を外にしては他に自由を得べきの道なきのみ。

以て彼が百戰敢て辭せざるの氣概を察すべきにあらずや。斯くの如くして彼は一意専念、埃國の高壓手段に對し、祖國の利權を主張して止まざりしも、時運非にして其熱血を濺ぎし大業は遂に敗れたり。彼の事業は遂に敗れたれども、彼の精神は決して泯びしにあらず。彼の熱誠彼の雄辯は九百萬のマジヤール人を感化せしこと幾何ぞ。一八四九年の獨立の壯舉は敗れて、匈牙利は遂に一八六六年の妥協條約を承認せしとは云へ、爾來埃匈兩國の關係は屢、圓滿を缺くにあらずや。匈牙利は日に月に進歩しつつあり。其埃國に對する關係は何時までか現狀を持續すべき。諸威と瑞典とは遂に分離しぬ。現埃帝萬歲の後、東歐の情勢は果して如何なるべき。彼が匈牙利の土に培ひたる自由の萌芽は決して枯死せず。彼の名は幾度か繰返されて、コッストは長へにマジヤール人の腦裏に生くるなるべし。其事實

は成らざりしとは云へ、一代の民心を指導して全歐の耳目を聳動せしめし人、コッストも亦一世の人傑なるかな。

第七 米國政治家

第二十二章 リンカーン

一 風雛何處に生る

合衆國大統領は悉く立志傳中の人物なり。高祖ワシントンは言はずもがな。歴代の大統領概ね微賤より身を起し、數多の辛苦艱難に勝つて國家最高の榮地に上る。これ一は其國體の然らしむる所なりと雖、此等偉人豪傑の品性志望亦流俗に卓然たるものありしや必せり。就中十六代の大統領リンカーンに至つては、其門地の卑き境遇の非なる、他に匹儔なくして、而して其榮達功業の大なるワシントンと併せ稱せらるゝは眞に偉とすべきなり。

一七八〇年、米國獨立戰爭の尙闌なる頃、飄然としてケンタッキーの荒野に來り住するものあり。其名をアブラハム・リンカーン (Abraham Lincoln) といふ。妻子を併せて三四人の小家族なり。是より二年の後、一日リンカーン畑に出で、耕作に餘念なかりし時突然一人のインディア人背後より窺ひ寄り、一發の下にリンカーン

を射殺し了りぬ。後に残れる妻は三男二女を貧苦の裡に養育せしが、其中最も年少のトマスと呼べるものは即ち後年の大統領リンカーンが父となれるものなり。トマス既に斯くの如く貧賤の身なりしかば、之に關する記録のあるべき理なく、従つて其人物の如何は之を知るに由なしと雖、目に一丁字なく、幼少より備役に従事し、僅に口を糊するに過ぎざりしは疑なきものゝ如し。齡二十八歳にして、ナンシー・ハンクス (Nancy Hanks) なるものを娶り、自ら丸木小屋を造りて之に住せり。アブラハム・リンカーンは則ち此家に生る。時に一八〇九年二月十二日なり。トマス深く我無教育を嘆き、二人の兒には相當の教育を施さんと苦心せしと雖、當時此僻遠の地には學校稀なりしかば、アブラハムは七歳の時僅に四五ヶ月就學せしのみ。八歳に及んで父は其家屋と少許の土地とを賣りて、インディアナに移住せり。此時三頭の馬に家財と小兒とを載せ、七日を費して目的地に達せしといふ。此所にて隣人の助を借りて再び丸木小屋を造り、貧しき小家族は之に居住する事となれり。是より數年の間アブラハムは父と共に野に出で山に上り、或は耕し、或は木を伐り、自家の爲め、他人の爲め、専ら勞役に従事し、復た學業に従ふの餘

暇なかりき。
 斯かる貧苦の中に在りてアブラハムを勵まし、向上の志望を起さしめたるは、實に其母ナンシー・ハンクスの力なりとす。アブラハムの父は温良寛厚の人なりしかども、材力とてはなかりき。母はリンカーン家と同じくヴァージニア州よりケンタッキーに移住せる貧家の女なれども、多少の教育あり。而して其性質明慈仁にして、史家の所謂宮殿を飾るに足るの淑女にして、陋屋に呻吟勞死するの運命に陥りたる人なり。常に其子に誨へて曰く、人の價値は其魂に在り。其身は富貴を極むと雖、其心腐り、魂迷ふものは、之を眞の貧賤といふ。之に反して、縱令其身は貧賤に陥るも、正に従ひ、道を踏み、上帝の心を奉體して怠るなくんば、富貴之より大なるはなし。嗚呼我子よ、母は汝が百頃の肥田を有せんよりは、寧ろ聖書一卷を携へん事を希ふと。されば朝夕勞働の餘暇には我子を膝下に招きて、聖書をも讀み聞かせ、讀書算術をも己が知る限りを教へて倦む色もなかりき。
 然るに賢母ハンクスはアブラハムが十歳の時無限の思を遺して世を去りぬ。身も心も優に淑さしかりし人の多年の貧苦と勞役に敵し得ざりしなり。アブラ

ハムの悲歎は幾何ぞ。父は固より貧困にして棺を購ふの資さへなければ、父子共に斧鑿を取りて形ばかりの棺を造り、我家に近き樹蔭の下に之を埋めぬ。此時附近二十哩の村落より來りて葬に會するもの二百人に及び、牧師エルキンは葬儀を司る爲め馬上一百哩の荒野を踏むで來りしといふ。アブラハムの母が徳望の如何に高かりしやを知るべし。

此時牧師エルキンを招請したる書翰は幼きアブラハムの手に成れり。此事一村に知れ渡りしかば、アブラハムは爾來村内の書記として珍重せらるゝに至りぬ。母が在世中の苦心は何時しか多少の讀書力をアブラハムに與へ、兎角する中に「インツプ物語」「天路歷程」なども解するに至りぬ。又ワシントン、フランクリン及びクレーの傳を愛讀したり。アブラハムがワシントン傳を獲るに至りしに就ては、彼が少時の性行を窺ふに足るべき一美談あり。當時アブラハムの隣家にラムセーの著「ワシントン傳」を藏する者あり。アブラハム一日懇請して之を借り來り、翌日熱讀せんとて戸棚に入れ置きしに、其夜大風雨起りて室内を犯し、濕ひ汚したり。アブラハム大に驚き悲みたれども、新書を購うて償ふの資力なかりければ、之

を携へて隣家に趣き、事情を陳べ、其身の勞働を以て之を償はんと請ひしかば、隣家の主人之を容れ、遂に三日の勞働を以て該書を購ひ、歸來之を清晒して愛翫措かざりしこと。

二 可憐の舟子

兎角する中に、父は再び妻を迎へぬ。後妻の子も一人二人と殖え行きぬ。家計は益窮まるのみ。アブラハムは日傭夫となり、舟子となり、日夜勞働に忙はし。一日小艇をオハイオ河に浮べて客を待つ。忽ち二人の紳士あり。アブラハムの艇に來り投ず。アブラハム大に喜び、之を中流の汽船に移し了はれば、二客各半弗の銀貨を與へぬ。アブラハム天にも昇る心地して、急ぎ歸り、之を父に報ず。後に大統領となり、年俸二萬五千弗を受け、盛名宇内に轟きける時、彼當時の事を語りて曰く、余は二個の銀貨を見たる時は、殆ど兩眼を信する能はざりき。これ實に余に取りて最も重大の出來事なりき。余の如き寒貧兒が一日足らずに一弗を贏け得んとは到底信する能はざりき。是より世界は廣く且つ美しく見ゆるに至り、前途の希望も開け、

自信も著しく強くなりぬ云々。アブラハム既に長じて、歳十九、軀幹長大にして、臂力あり。而して其性寛仁にして、義に勇むの風あり。四隣皆彼を愛し、争うて之が便宜を計る。當時ニューオーリアンヌとインデアナ間の貿易は、主にオハイオ及びミスシッピ一兩河の回航船に由つて行はる。其航程實に一千哩以上に及ぶ。アブラハム亦此貿易船の舟子となり、一日他の一青年を助手となし、ミスシッピ一河を下ること數日、一夕或る河港に碇泊せしに、七人の黒奴あり。各銃劔を提げて來り、劫かじ、船中の貨物を奪ひ去らんとす。アブラハム大に怒り、長棍を振つて立るに一人を撃ち倒せしかば、餘賊驚き恐れ、忽ち逃れ去りぬ。

既にして父トマスリンカーンは其インデアナの住地を以て健康に害ありとなし、且つイリノイの豊饒の地に富めるを聞きしかば、一八三〇年、一家を擧げてイリノイのメーコン郡に移住せり。アブラハムリンカーンが二十一歳の年なりき。アブラハム又父を助けて木造の家屋を造り、附近十エーカーの地を垣にて圍ひ、之を耕作に用ひ、父と共に力役怠らざりしかば、相當の收穫あり。斯くして家計稍裕になりしかば、アブラハムは父母の許を去りて、獨立の志を開拓せんとの運命

を起し、一日父に乞うて許されたれば、茲に始めて其天材を發揮するの新生涯に入ることとなれり。

三 正直なる店主

世には富裕の家に生れ、學識ある父兄を有し、前後左右皆正人にして、不善無知の人となる能はざる境遇に在りながら、悪人となり、愚者となるものあり。之に反して貧賤の家に生れ、父兄親戚悉く無知無學にして、其周圍の事情愚者愚人たらざらんとするも得べからざるの境遇に成長しながら、賢哲の志を失はざるものあり。アブラハム・リンカーンの如きは則ち後者に近きものなり。彼二十一歳にして父母の家を去り、獨立獨行して新運命を開拓せんとしたるは則ち可なりと雖も、中等教育だもなき一貧兒果して何事をか就し得んや。否然らず。彼の教育なく財富なきこそ、則ち彼をして偉人傑士たらしめたる深因なれ。彼は他より教育せらるゝの人に非ず。自ら教育するの人なり。他製の人にあらすして、自製の人なり。世間若し眞に自製の偉人ありとせば、リンカーンは正に其一人なり。彼家を出づる

や、先づ近村の農家に雇はれて耕耘に従ひ、後去りてスプリングフィールドに赴けり。是より先、彼は木造の小艇を造るの術を習得したれば、直ちに其家に雇はれて扁平の一小艇を造り、更に其主人に勧めて一群の生豚を買入れ、之を其小艇に載せサンガモン河を下り、イリノイ河に入り、更にミスシッピー河を経てニューオーリアンズに上陸して之を賣却せり。此冒險意外に成功し、特にリンカーンの事に従ふや、熱心誠實を極めしかば、雇主は深く彼を信用し、更に一商店と一製造所とを併せて之を管理せしめたり。

一婦人あり。一日店頭に来りて物を買ひ去る。其夜賣上高計算の時、リンカーンは囊の婦人が六錢二厘の誤算をなしたるを發見し、夜中直ちに二哩半を隔つる婦人の家に馳せ行き、六錢二厘を返したり。一夕店を閉じつゝありし時、一婦人の來りて半磅の茶を購ひ去れるものあり。翌朝リンカーンは夕闇の暗に四オンス不足に衡り與へたるを知り、直ちに店扉を閉じ、不足分を携へ行きて、かの婦人に與へたり。朝食前の往復には長き道程なりき。リンカーンが商賣振は斯くの如くなりしかば、幾もなくして顧客店頭に盜るゝ計りとなれり。

リンカーンが住める町に某と呼べる無頼漢あり。常に良家の子弟を扱して金品を奪ひ去るを以て、町内之を蛇蝎視して畏れざるものなし。一日リンカーンが店頭に来り、大聲慢罵して鬭を挑む。リンカーン姑らく忍びしが遂に叱して曰く「咄、懲さねばならぬ奴なれば吾々とても容赦はせぬぞ」と言下直ちに巨臂を伸ばして暴漢の頸を捕へ、小猫の如く之を地上に投げ倒し、傍の枯草を取りて其面皮を摩しければ、流石の悪漢も悲鳴を揚げて憐を乞ひたり。何人にも悪意を挾むことなきリンカーンは之を見て扶け起し、水を與へて面部を洗はしめ、温言之を誠めければ、悪漢深く其徳に感じ、爾來翻然非行を改め、遂にリンカーンが無二の親友となりとこいふ。

當時リンカーンは飲酒の深く畏るべきを知り、固く禁酒して一滴だも之を口にせず。彼は世上大酒家の産を傾け身を亡ぼすもの多きを見て、悚然たりしなり。又學藝の人生に必須缺くべからざるを想ひ、閑あれば書を覓めて之を讀めり。知人より英語の文典を借り來りて、精讀數次、遂に英文典に熟達するに至れり。彼は勉めて其地方の學識ある者と交際を求め、其討論會に加はり、寸時の閑暇あれば之

を學問に利用するを忘れざりき、ルイスビル・ジャーナルと稱する一雜誌を金玉として愛讀措かざりしも、此時なり。

一八三二年、インディアンの酋長として有名なるブラック・ハック・蠻族を率ゐ、ミシシッピ河を渡り、更に進んでスプリングフィールド附近を犯さんとするの勢あり。有司檄を移して義勇兵を募る。リンカーン隣保の壯丁と共に之に應ず。一隊の兵合せて二千四百人なり。陣中一人の士官を欠く。選舉の議起る。候補者二人あり。一人は則ちリンカーンにして他の一人はカーク・パトリックといふ。カーク・パトリックは嘗てリンカーンの雇主たる人にして、性甚だ暴慢殘酷なりしかば、リンカーン之に仕ふるを好まず。去りて他に仕へたり。今其人と士官の位地を争ふは頗ぶる奇なり。選舉の法も亦簡にして妙なり。數十歩を隔て、二人の候補者を立たしめ、軍中の人をして各其好む所に行かじむ。號令一下、選舉の事始まるや、全軍殆どリンカーンの周圍に聚まる。後リンカーン當時の事を語り、一生中の最大快事と稱せり。士官既に定まる。總司令官ザッカリ・テローア全軍を率ゐてブラック・ハックの軍を討ち、大に之を破り、ハックを虜にす。亂起りてより三月にして全く定まる。而し

て此小役に上下の將校たりしテローアとリンカーンが異日前後して共に大統領とならんとは何人も夢想せざりし所なるべし。

四 義侠の辯護士

ブラック・ハウクの亂定まるや、リンカーンは舊居サンガモン郡に歸りしが、郷人は直ちに之を推して、州議會議員の候補者としたり。時に歳二十三、郷黨悉く彼に投票したれども、郡全體に於ては反對黨多數なりしかば、彼は落選したり。リンカーン更に小店主になり、郵便局長となり、次で測量師となり、幾多の辛苦を重ね、一八三四年、遂に大多數を以てサンガモン郡の州議員に選舉せられたり。時に歳二十五、この間讀書を怠らず、シグスピアは再讀三讀して倦むを知らず。パーンスの作は殆ど暗記するまで熟讀したり。同時に彼は法律を研究し、一八三六年、遂に代人の免許を得、翌年スプリングフィールドに移り、直ちに代言の業を開きしに、其人物辯材一も間然すべき所なかりしかば、幾もなくして聲名遙に古老を凌ぐに至れり。

リンカーンは自ら正義と信する者は、如何に不人望を買ふも意に介せずして之を辯護したれども、其不正非義と信する處は、如何に巨額の報酬伴ふも決して辯護の勞を取らざりき。當時逃亡せる奴隸を助くるものは、忌憚すべき犯罪として何人も之を辯護するものなかりき。然れどもリンカーンは奴隸制度を以て人道に反するものと信じたれば、此種の犯罪者より依頼を受くる時は決して之を辭することなかりき。一日某被告人スプリングフィールドに來り、第一流の辯護士某に此奴隸辯護罪の辯護を依託せんとしたるに、某辯護士は之が爲め其政治上の地位を危うするを恐れ、直ちに之を拒絶し、且つ教へて曰く、當地にリンカーンといふ辯護士あり。此人不評判の事件をも畏れざれば、必ず子が請を容るべしと。其人則ち去りて之をリンカーンに託したりといふ。

彼は又貧困者の爲めに義侠の辯護をなし、無辜を救ふを喜べり。彼嘗つて貧時法律研究の際、其家に寓居して家族同様に撫育せられたるアームストロングといふものありき。不幸妻子を遺して早世せしが、家産全く傾きて、子は人に雇はれ、母は家に在りて其子の仕送りに細き烟を立てぬ。一日其子の職工仲間と争闘起り、

一人の死者を出せり。其加害者は奸悪なる者にて其場に居合はせたるアームストロングに罪を負はせ、己れ自ら証人となりて法廷に出頭し、審理の結果罪なきアームストロングは死刑を宣告せられぬ。リンカーン新聞紙上にて之を知り、直ちに老母を訪ひ、其冤罪なるを確認せしかば、歸來直ちに辯護届を法廷に提出し、聽て開廷の日とはなれり。被告の証人として出廷したるは則ち憎むべき眞の加害者にして、其言に依れば彼は現場に於てアームストロングが棍棒を以て被害者を打擲するをば月光にて照見したり。其日時は某月某日なり。リンカーンは証人に向つて二三の質問を試みたる後、三日間の猶豫を乞ひ、歸來種々調査する所ありしが、忽ち有力なる反證を得たり。他なし、証人の言ふ日時には月の出づべき筈なかりしなり。三日の後法廷は再び開かれたり。愚なる証人は月光説を繰返しぬ。リンカーン則ち一喝して曰く、某日某時は闇の夜なり。汝は地平線上に月を引上ぐるの魔力あるか。滿廷驚倒す。証人座に堪へず逃げ出しぬ。廷丁忽ち之を捕ふ。彼遁るゝに由なく、罪狀を自白して死刑を宣告せらる。斯くして罪なきアームストロングは辛うじて死を免れぬ。是よりリンカーンの名益高し。

五 非凡の州會議員

一八三六年、リンカーン再選せられてイリノイ州議員となる。歳二十七、其れより四會期間引き續き州議員たりしが、終に思ふ所ありて議員を辭し専ら代言事務に従事せり。顧みて之を案するに、彼が州議員たりし此八年間は實に政治家としての技倆を天下に示したるものにして、彼は州議院に入りてより二三年の後既にホイッグ黨の指導者となり、黨の主義に據つて鐵道教育、治水、銀行、其他内地改良の事業を進捗せしめたり。特に當時世論を沸騰せしめたる奴隸制度の存廢に關しては、全力を傾けて輿論の矯正に力めたり。當時デモクラット黨の奴隸保存説勢力を得て州議院の多數之に傾きたるを見て、慷慨の情禁する能はず。乃ち議員の資格を以て新聞に投書し、或は公開演説を開き、極力奴隸制度の人道に背き、合衆國憲法に違反する所以を唱説したり。彼がデモクラット黨の名士ドーグラスと論戦して政界を震動せしめたるも此時なり。ドーグラスはリンカーンより後るゝ二年にして州議院に入りしが、縦横直ちにデモクラット黨の首領となり、爾來リン

カーンの勁敵となれり。其始めて議院に相見えし時は、リンカーン二十七歳、ドグラス僅に二十三歳にして、其身材も亦低かりしかば、世人之を呼んで「小き巨人」と言へり。實に彼は身材は矮小なれども、巨人たるを失はず。其議院に演説するや、聲は洪鐘の如く、論鋒の鋭きこと、劍の如し。リンカーンとイリノイ州議會に相見えしより、兩々相對して政界に馳驅し、互に國會議員を争ひ、大統領を争ひ、一はリパブリカン黨の龍たり、一はデモクラット黨の虎たり。されば一八六〇年、大統領選舉の勝敗までは、兩黨の戦は全く二氏の戦たりしなり。

一八四二年、リンカーンはケンタッキー州レキシントン郡の名家ロバート・エストロップの女メリーを娶りて妻となす。同年、郷黨彼を舉げてイリノイ州議員たらしめんとしたれども、固辭して受けず。専ら代言の職務に執掌して復た政界を顧みざりしが、既にして一八四四年、ヘンリックレーが自黨大統領の候補者たるを聞くに及んで、乃ち曰く、彼は我郷國ケンタッキーの人なり。我親友にして又我主義の將なり。助けざるべからずと。乃ち出でてイリノイ、インディア十二州の間に遊説して大に盡す所あり。反對黨はボルクを候補者に舉げ、有名なるジョン・カルホンをしてリ

ンカーンに當らしめたり。當時リンカーンは其學問遠くカルホンに及ばず。名望も亦遙に其下に在りしと雖、會、經濟上の一大論戰を試みし時、リンカーンの識見反つてカルホンに優る所ありしかば、聽衆は大に驚き、リンカーンが凡人にあらざるを信するに至れり。されば此期は自黨の敗績となりて、大統領の椅子はボルクの占むる所となりしと雖、リンカーンの名聲は此時より益揚がり、遂に其後二年を経て、一八四六年、イリノイ州のサンガモン郡より大多數を以て合衆國の中央議會に選舉せらるゝに至れり。

六 始めて中央議會に出づ

一八四七年十二月、リンカーン始めて國會に出席す。建國以來實に第三十回の國會なり。此時に當りて、奴隸存廢の論争、其極點に達し、政治家、宗教家は勿論、詩人小説家も詩歌小説にも、之が是非を説き、國論二派に分れて、何時終局すべきを知らず。奴隸逃亡事件の裁判は到る處に紛起し、南部諸州に於ては、奴隸益、繁殖して既に三百餘萬の人口を有するのみならず、綿織機械發明の爲め、需要愈盛に。

して、奴隸使用の利益莫大なりしかば、強ひて之を禁ずれば、叛亂をも起さんとするの形勢あり。顧みて歐洲大陸を見れば、同じく奴隸問題の議論沸騰し、英國に於てはピット、フォックス等の俊豪奴隸制度の不正を鳴らし、一八三三年、早くも其禁令を發するの運に接したるも、佛國は未だ奴隸賣買を禁ずるに至らず。西班牙ブラジルの如きは奴隸賣買禁止條約を結びしと雖、未だ實際に行はれず。一八四一年に至りて、歐洲の五大國始めて條約を結び、五國の軍艦は隨處奴隸商船を捕獲するの權利を認めしと雖、佛國の加盟せざる爲め、其効力薄く、密賣買到る處に行はれ世論紛然たり。

奴隸廢止はリンカーンの宿論なり。されば奴隸廢止の主義に出でたる議案には、滿腔の熱血を濺ぎ、之が成立に勉めたり。かの有名なるウイلمット案の爲めに四十回起立したりといふも、此時なり。ウイلمット案とは議員ウイلمットの提出したる法案にして、凡て合衆國に屬する聯邦諸州外の所謂「テリトリ」即ち未だ聯邦の一州に編入せられざる地方に於ては、全然奴隸を禁止すべしとの事を規定したるものなり。當時かのドーグラスは元老院に在りてリンカーンと同一議場に相見

ゆるに及ばざりき。元老院に於ては有名なるダニエル・ウエブスター、奴隸制度反對の大演説をなしつゝありき。然れども反對黨は上下兩院に大多數を占め、大統領ポルクも既に敵黨なりしかば、正議概ね行はれず。リンカーンは又テキサス加入問題に起因せる墨西古戦争にも反對し、之を以て不必要且つ憲法違反なりと絶叫したれども、何等の効なかりしかば、愛國の情禁する能はず。怏々として一會期を送れり。

一八四八年、テローア將軍ホイグ黨の大統領候補者として競争場裡に打出でしかば、リンカーン之を助けて大に盡力する所あり。テローア遂に大多數を以てデモクラット黨の候補者カッス將軍に打勝ちぬ。其翌年國會議員改選の期來り、リンカーン再び其候補者に選定せられしが固辭して受けず。因つて更にオレゴン州知事の候補者に推されしも、思ふ所ありとて亦之を辭し、専ら代言の職を守る事となれり。

七 主義の政治家

爾來五年間、リンカーンは専ら代言の職に従事し、無辜を救ひ、非違を糾すに餘念なかりしが、一八五四年かの有名なるカンサス・ネブラスカ法案國會に可決せられ、國論鼎沸するや、リンカーンは憂國濟民の志油然而として禁する能はず。曰く、正義泯びんとす。一身の安危を慮るの時にあらずと。乃ち意を決して再び政界に投じぬ。

カンサス・ネブラスカ法案とはカンサス、ネブラスカの二地方を合衆國の領地に加へ、奴隸制度取捨の權利は此地方に住する白人に一任すべしといふの法案なり。其理由とする所は合衆國人民は憲法上自治の權利を有す。奴隸制度を存するも廢するも、此自治權に一任して可なり。中央政府より干渉して強ひて之を廢止せしめんとするは、これカンサス・ネブラスカの住民に自治の能力なしといふに均しく、之を侮辱するの甚きものなりといふに在り。前記のドーグラス之を國會に提出し、デモクラット多數を以て之を議決したり。リパブリカン黨は極力之に反對して曰く、合衆國憲法は國民の自由平等の權利を確認す。黒奴と雖、同じく合衆國々民なれば、之を賣買使役して其自由を拘束するは、憲法違反なり。且つカン

サス、ネブラスカは一八二〇年のミズリー協約に定むる所の緯度より北に在り。されば本案は合衆國建國の主義に悖り、憲法に反すると共に、ミズリー協約をも破壊するものなりと。ミズリー協約とは一八二〇年、ミズリー州を合衆國に編入するに當り、奴隸許否問題起り、紛擾を極めし爲め、ヘンリ・クレイの盡力により、ミズリーの南境則ち北緯三十六度三十分より北部は全く奴隸を嚴禁すとの法案を國會に於て議決して兩派を調停したるものをいふ。其主義に於ては奴隸反對論者の勝利と見るべきものなり。さればリンカーンはカンサス・ネブラスカ法案によりてミズリー協約の主義破壊せられ、合衆國の西北部に奴隸制度の侵入するを見て、悲憤の情に堪へず、蹶起して狂瀾を既倒に回さんと企てぬ。

恰も好し、此時イリノイ州上院議員一名の改選あり。リンカーン乃ち自ら之に當らんとして打出でぬ。此時かのドーグラスは既に上院に在りしかば、自らリンカーンと争ふの必要なしと雖、自黨候補者を助くる爲め來り戦ふ。是に於てか當時の習慣に従ひ、リンカーンは直ちに書をドーグラスに送り、立會演説を挑む。ドーグラス之を諾じ、其第一回を十月四日に開く。ドーグラス固より雄辯の名あり。先

づ登壇してカンサス・ネブラスカ案の辯護を試む。然れども議論概ね詭辯を弄するに止まりて熱誠の人を動かすに足るものなし。リンカーン次で登壇し、一々ド・グラスの所説の要點を駁す。其論正大にして明直、其態度聲調眞摯篤實にして一片浮薄の色なし。スプリングフィールド、リバブリカン誌上に掲げたる當時の評を見るに左の文あり。

彼は情激し身戦きぬ。満堂の聴衆は静黙して死せるが如し。彼は類なき熱血と氣力とを傾注してカンサス・ネブラスカ法案を攻撃しぬ。満堂の人々皆本案に對する強敵の現はれたるを知りぬ。彼の演説は、最も成功のものに見られたり。満堂の聴衆は長き喝采を以て眞理の勝利を祝せり。婦人連は手にく手巾を打振りて満足の意を表しぬ。云々。

されば此立會演説に於て、リンカーンは全くド・グラスを打破りぬ。ド・グラスがカンサス及びネブラスカの住民に奴隸制度取捨の權利を與へざるは、之を侮辱するの甚しき者なりとの論旨を駁したる左の數句の如きは、特に痛快を覺ゆ。有名なる我友人(ド・グラスを指す)は曰く、カンサス、ネブラスカの人民を以て

自治の能力なしと想像するは、彼等に對する侮辱なりと。此種の論法は不用意に之を聴けば、人耳を衝くの理あるを以て、吾人は漫然之を看過すべきにあらず。カンサス及びネブラスカの住民が自ら治むるの能力あるは我之を認む。然れども或る他の人の承諾なくして其人を治むるの權利ありとは認むる能はず。

奴隸制度を保存するは則ち奴隸と呼ぶるゝ人の承諾なくして其人を治むるの權利を取るものなり。人文の自由を以て憲法の精神とする合衆國に於て斯くの如き怪事ありと絶叫するを聞いて、誰か悚然たらざるを得んや。ド・グラスは悄然として去りぬ。彼は再舉して勝利を得んとの企圖を懷きてピオリアに赴きぬ。リンカーンは其後を追うて復び立會演説を試む。ド・グラスの巧辯は再びリンカーンの熱誠ある雄辯に破碎されたりぬ。其演説筆記は合衆國全部に傳はりて、リンカーンの名は兒童走卒も之を知らざるなし。

斯くの如くなればリバブリカン黨は優に敵黨を壓するの勢ありしが、是より先、ライマン・ツランブル亦舉げられて同黨の候補者たりしかば、リンカーンは兄弟

牆に闖ぐの不利を思ひ、一日選舉人を集め、ツランブルをも立合せて公然候補者
 辭退の意を陳べて曰く、我親友ツランブル氏の候補に立てるを聞いて、予は欣喜
 の情に堪へず、氏は予が先輩にして親友なり。其主義政見素より異同あるなし。希
 くは予に投ずるの票を以て悉く之をツランブル氏に投せよと。ツランブル之を
 聞いて、大に驚き、起ちて曰く、予不敏にしてリンカーン氏に投せよと。此
 謙讓の君子を措いて誰か自ら椅子に倚らんとすべき。諸君請ふ、予が尊敬する偉
 人リンカーンに一切の選舉を與へよと。兩々相譲りて決せず。然れどもリンカー
 ンの決心容易に動かすべからざるを知るに及んで、選舉人は強ひてツランブル
 に議員たるを承諾せしめぬ。リンカーンは之を見て始めて安堵の思をなせり。

八 上院議員

此時に當り政界の分野頗る明瞭となり、ホイグ黨は二分して、一は奴隸制度反對
 の人士とともに一團となり、リバブリカン黨に入りて所謂新リバブリカン黨を
 作り、一は奴隸維持を主張するデモクラット黨に入れり。此間リンカーンは常にリ

バブリカン黨の大成に盡力し、イリノイ州リバブリカン黨の組織に關しては各
 處に演説して奔走最も力めたり。されば西部諸州に於てはアブラハム・リンカー
 ンの名其黨中に最も高く、遂に彼を擧げて副統領の候補者となしたり。此時リン
 カーンはデイトンの爲めに敗れたり。雖、各處になせる大演説は彼の人物を數
 層大ならしめたり。當時某所に演説して數千の聴衆醉へるが如くなるに際し、場
 の一隅より大聲に呼ぶものあり、リンカーン君、君は其昔跣足にて牛を追ひなが
 ら、始めて此州に入りしといふが眞實なりやと。聴衆は息を凝らして静まり返り
 ぬ。リンカーンは一分程躊躇せしが、靜に答へて曰く、然り。予は此場中少くも十二
 三人は其事を證明し得べき人なるを信す。而も其人々は何れも君より尊敬すべ
 き人々なりと。斯く答へて彼は再び莊重なる態度に復り、妨害者の在りしを忘れ
 たるものゝ如く、昂然として陳べて曰く、然り、我輩は我國の憲法が言論の自由を
 保障する限りは、自由の爲め、奴隸制度反對の爲め、演説せんとす。此廣き國土の何
 處にも無償の勞苦に服するもの一人もなきに至るまでと。拍手は急激の如く起
 りぬ。リンカーン萬歳の聲は屋宇を振撼せり。牛飼男は帝王の尊敬を買ひぬ。

一八五八年、リンカーン再び上院議員の選舉を争ふ。今回は例のドーグラス當面の競争者となりぬ。是より先有名なる黒奴ドレッドスコット事件起る。スコットは妻子と共に一紳士の奴隷たりしが、其主人のミズリー州に移住するに及びて自由を請求せり。蓋しミズリー協約に據れば、ミズリー州の奴隷は總て自由たるべきものなり。然るに主人之を聽かざりしかば、スコットは之を法廷に訴へぬ。時恰もカンサス・ネブラスカ問題と關聯してミズリー協約の問題社會の耳目を惹きし際なれば、人皆判決如何を注目しつゝありしに、裁判の結果スコットは敗訴となりぬ。其理由に云く、奴隷の持主は何れの州と土地とを問はず、其財産と共に奴隷をも伴ひ行くの權利を有すと。奴隷廢止論者は之を見て大に激昂し、維持論者は大に其氣勢を高めしかば、兩派の軋轢日に甚しく、遂にヴァージニア州にジョンブラウンなるもの現はれ、同志を糾合して兵を擧げ、先づヴァージニアの武庫を奪ひ、進んで全州奴隷の自由を布告するに至れり。後幾くもなくして捕はれ、死刑に處せられて、此一揆は鎮定したれども、此時よりして人心恟々、皆戰亂の近く起るべきを覺悟するに至れり。

リンカーンは奴隷黨の横暴斯くの如きを見て坐視すべからずと、猛然として逐鹿場裡に立つ。乃ち書をドーグラスに送り、立會演説を求む。ドーグラス之を諾し、八九十の三箇月を期し七箇所に於て開演するに決し、最初はオタリ、二回はフリーポート、三回はジョネスポロ、四回はクインシーに於てす。此等の演説に於て二氏共に畢生の力を盡したり。何となれば當時リンカーンは既にリパブリカン黨中の名士にして、ドーグラス亦デモクラット黨中出色の人物なりしかば、二年後に來るべき大統領改選の期には、或は二氏を兩黨より其候補に推すことなきを保せざればなり。然れども公開演説に於けるリンカーンの技倆は、儘にドーグラスの上に在りき。かの有名なる「アングル・トムスケビン」の著者ピーチー・スタウ女史は現に二氏の立會演説を傍聽したる人なり。嘗つて之を評して曰く、ドーグラスは好紳士なり。風采人を壓し、言辭華を散す。リンカーンは素朴漢なり。風采兪野、言辭卑近なり。然りと雖、後者は自然的人にして、前者は假作的の人たるを免れず。ドーグラスは如何にせば人心を動かす得べきやと思考し、リンカーンは如何にせば我義務責任を盡し得べきやと商量す。ドーグラスは手

段に重きを置き、リンカーンは主義を貴ぶ、ドーグラスは詭辯を厭はず、狡詐を忌まず、唯勝利を維れ求む。リンカーンは毀譽を顧みず、得失を論せず、至誠を以て説を立つ。故に前者は氣迫りて齷齪たり、後者は心廣くして體胖かなりと。されば公開演説に於てドーグラスは敗を取りぬ。是に於て彼は黄金政策を執り、裏面より敵を苦めぬ。盛に黄白を散じ、離間中傷を試み、或は花火を打上げ、或は盛宴を張り、誘惑強迫至らざる所なし。リンカーンは一切の權變を斥け、終始公然の運動を以て敵に當り、大演説會を開くこと殆ど六十回に及べり。然れども利を趁ふ選舉人の多數はリンカーンを捨て、ドーグラスを擧げぬ。正義の士は敗れたり。リンカーン毫も憂へず。一日其親友ハデーソン彼が落選を聞き之を訪問して其失敗を慰めしに、リンカーンは莞爾として曰く、「君之を憂ふる勿れ。予は今次の失敗を以て他日の一層大なる成功の基と信ず。今回の失敗は正にこれ予をして大統領たらしむるものなり。今や小巨人は上院議員を得たり。然れども彼は大統領の椅子を失へり」と。リンカーンの言空しからず。其後二年を経て彼は大統領となりぬ。正義は常に最後の勝利を得るなり。

九 大統領の選舉競争

リンカーンは一は黄金政策の爲め、一は當時の選舉法の不完全の爲め、一籌をドーグラスに輸したれども、其公明正大の人物にして、當時第一流の政治家たると共に、辯舌文才亦天下無雙なりとの名聲全國に響き渡りしかば、元老院の一議員に落選したるは適以て其人物の大を天下に示すこととなりぬ。彼の政友は次期の大統領たらんことを彼に勧めぬ。大統領の改選は僅に二年を餘すのみ。是に於てか、リンカーンは深く政界の前途を憂ひ、己れ自ら大統領となりて正義を天下に行はんと決心しぬ。

彼は先づカンサスに赴きて、政見の發表をなし、次でオハイオに入り、屢演説會を開き、更に進んでニューヨークに入る。當時ニューヨークには有名政治家シewardあり、同じくリパブリカン黨に屬し、大統領候補者の一人に數へられ、其名聲リンカーンの上にて在り。されば初めリンカーンの來るや、ニューヨーク市民之に重きを置かず。新聞は極めて冷淡に報じて云く、「リンカーンなる一政客某所に於て政談演

説を試むといふ。此人はイリノイ州の一辯護士なりと。然れども一度彼の演説を聴くや、ニューヨーク市民は酔へるが如くなりぬ。特に彼が眞摯淡泊にして、自から正大なる氣象は深く市民の心を攪りぬ。第一回の演説に於てリンカーンは既に全市民の寵兒となりぬ。前に冷淡なりし新聞紙は競うて彼が演説筆記を掲載し始めぬ。彼は更にハートフォード、ニューヘヴン、メリデン、及びノーウチの各所に演説し、到る所同一の成功をなせり。エール大學修辭學の教授某氏は彼が演説筆記を以て教科に充て、之に依りて修辭學を講せりといふ。當時奴隸維持論者がテリトリ(未だ聯邦の一州に編入せられざる地方をいふ)より奴隸制度を排斥するが如きことあらば、我黨は此聯邦組織を破壊すべしと聲言せるに對し、リンカーンが某所の壇上になせる辯駁は特に痛快を極めたり。云く、彼等はテリトリより奴隸を排斥せば、此聯邦を破壊し、其罪は之を我黨に嫁すべしといふ。これ冷酷の甚じきものなり。剽盜あり、我耳邊に短銃を擬して曰く、止まれ、且つ汝の所持金を悉く出せ、然らざれば我汝を殺さん、汝金を惜みて死するは、汝自ら殺人罪を犯す者なりといはば如何。剽盜が我に要求するものは我所有品にして、我は之を保

持すべき權利を有す。而して我が所有品を保持するの權利を我權利なりといふは、我が投票權を我權利なりといふと毫も異なる所なし。我所持金を強奪せんが爲め、我を殺さんと劫すは、我投票を強奪せんが爲め、聯邦を破壊すべしと聲言するは、主義に於て毫も誤る所なし。奴隸黨が聯邦破壊國家分裂の聲言を以て反對論者を脅迫し、國會に多數の投票を得、大統領選舉にも同じく多數の投票を獲んとするは、凶器を以て旅客を劫掠するの強賊と異なる所なきなり。然れども當時奴隸黨は奴隸廢止の正論を抑壓する最良の武器として公然之を提唱し、多大の効果を收めつゝありき。リンカーン一夕の演説に其詭譎を揚決して、敵黨の心膽を寒からしむ。百歳の後、猶讀者をして快哉を叫ばしむるに足る。

一〇 大統領となる

一八六〇年六月十六日、シカゴ市ウィグム堂に於てリパブリカン黨委員の大會を開き、大統領候補者の選定を行ふ。始め十一名の候補者ありしが、數回の選を経て、遂に二人を残しぬ。一人はニューワードにして、他の一人は即ちリンカーンなり。此時

リンカーンはスプリングフィールドの某雜誌社に在りて、結果如何と待ちつゝありしに、戶外忽ち電報の聲あり、急ぎ受取りて之を見るに、大會に在る親友某よりの打電にして、中に左の文句あり、云く、

最後の候補者として足下とシユワードとの二名残り、今一回の決選投票にて勝敗は決せん、予は方に足下の爲めに盡力中なり、足下若し某々の二氏を大臣に採用するの一事を諾せば、當選疑なかるべし。

と、リンカーン一讀靜に返電を送りて云く、厚意多謝す、然れども予は其約を結ぶ能はざるなり、と、彼は或る條件に要せられて國家最高の重職に就くを屑とせざるなり、其心事の高潔なる星月の如し。

既にして最後の決選投票は行はれぬ、シユワードの百十票に對し、リンカーンは三百五十四票を得たり、會場の内外に充滿せる黨員及び群集は内外呼應してリンカーンの萬歳を祝しぬ、此時スプリングフィールド雜誌社に在りて、結果如何と案じつゝありしリンカーンの手に特別電報は飛び來りぬ、抜き見れば、
今正に選舉を了す、シユワード氏は次點なり。

とあり、リンカーン及び其友人の喜び知るべきのみ、既にしてリンカーンは狂喜せる友人の少しく靜まれるを見て、之に謂つて曰く、此事に多少の利害を有する小婦、第八街に在り、行いて之を報せん、と、乃ち電報を懐にして雜誌社を出で家に歸る、小婦とは稍、倭小なる其妻をいふ。

ウィグワム會場に於ては、人民の漸く靜まるを待つて、書記エバルツ登壇してリンカーンの正當に選定せられし旨を陳べ、更に競争者シユワードの徳を讚して委員會終了の旨を告げ、更に委員を選び、リンカーンに使用して公然當選の事を傳ふることとなりぬ、今當時同行せしシカゴ新聞記者の記事を讀むに其要左の如し、委員諸氏は特別汽車にてスプリングフィールドに到る、停車場の内外人民の群集すること祭日の如く、午後八時リンカーンの家に達す、家は滿洒たる二階建にして、綠樹之を圍み、青草地に滿てり、扉外に到れば七八歳と十一二歳と覺しき男兒二人出で來り、予等を見て、紳士好來といふ、エバルツ氏之を見て打笑みつゝ、卿等はリンカーン氏の子かと問へば、然りと答ふ、予等一々握手す、既にして室内に入るや、アシニマン氏委員一同に代はり來意を傳ふ、リ氏懇に其勞を謝し、候補領承の旨を答

ふ。其れよりアシヌマン氏の紹介にて委員各、リ氏と握手す。此時リ氏直立せしが、人々皆其偉大なるに驚けり。ペンシルヴァニアのケレー氏は委員中身材最高の人なり。其リ氏と握手する時、リ氏笑うて問うて曰く、君の身長幾何ぞと曰く、六呎三吋。ケレー氏曰く、卿の身長幾何ぞ。リ氏曰く、六呎四吋と。是に於てケレー氏稍、首を俯して曰く、今やペンシルヴァニアはイリノイに拜伏す。予は多年予が見上ぐべき大統領なきを憾とせしが、圖らざりき。今や小巨人のみと思ひしイリノイ州より此大巨人を得むとは。一座笑倒す。委員の挨拶終りて後、予等新聞記者の順番となりしが、何れも先を譲りて躊躇の色ありければ、ジッド氏之を見て、何ぞ遠慮する事やある。諸君來れよ、他人にあらず。矢張以前の正直アブ(Honest Abe)なりと言ひしかば、皆々笑ひつゝ其れより心安げになりぬ。リンカーン夫人は南の客室にて委員の挨拶を受けらる。夫人はケンタッキーなるトッド博士の女にして、容貌性質共に美なり。我等一同其篤實温厚なる風、幸に敬服せり。身の長リ氏に比すれば釣合はぬ程なれども、通常の婦人より低きにあらず。リ氏の高きなり。年齢は三十五六と見ゆ。男子三人あり。前記の二童の外、當年十七歳の長男あり。目下ハーヴァード大學

に在り。斯くて我等は喜び、祝ひ、笑ひ、語りて後、一同旅館に歸りぬ。斯くの如くしてリンカーンはリバブリカン黨の大統領候補者となりぬ。敵黨の候補者は果して如何。是より先、デモクラット黨は南カロリナのチャールストンに大會を開き、大統領候補者の選定を行ひしが、黨内の三派各、一名の候補者を立て、互に譲らざりしかば、愈、大統領選舉の日に及んで三名の候補者はリバブリカン黨のリンカーン一人と相争ふこととなりぬ。勝敗の數豫め知るべきのみ。開票の結果左の如し。

- リンカーン 百八十票
- ドイグラス 十二票
- ブレッケンリッジ 七十二票
- ベル 三十九票

曩に權繼縱横の謀を以て元老院議員の選舉にリンカーンを打破りたるドイグラスは最少數を以て一敗地に塗れぬ。彼は元老院議員を贏ち得て大統領の椅子を失へりと言へるリンカーンの豫言は的中しぬ。

一一 大統領即位式の大演説

一八六一年三月四日、リンカーン大統領の位に即き、白聖館に入る。是より先南部諸州はリンカーンが當選と聞いて大に怒り、南カロリナは既に一八六〇年十二月二十日を以て、分離獨立の宣言を發し、次いでミシシッピ、フロリダ、アラバマ、ジョージア、ルイジアナ及びテキサスの六州亦之に倣うて各分立し、リンカーンが就職前一個月即ち二月四日を以て、右七州各委員を派して、アラバマのモントゴメリー府に大會を開き、南部同盟を組織し、ゼファーンデヴィスを擧げて大統領となせり。此間南部諸州に於ける奴隸黨の暴行甚しく、政府の武庫を掠奪し、城塞を占領する等、叛亂の形迹顯著なりしと雖、デモクラット黨の大統領ビュカナン未だ其任を去らざりしを以て、政府は之を不問に付して顧みざりき。

斯かる際に行はれたる大統領の即位式は、實に空前の光景を呈せり。奴隸廢止に反對の政客及び壯士等は一週間前よりワシントン市に入り込み、暴力を以て即位式の舉行を妨げ、事成らずんば大統領を暗殺して後患を除かんと決心せるも

のあり。短銃若くは短刀を懐にせる異様の人物は市中の旅宿に旁午して口耳相傳ふ。既にして三月四日の朝となりぬ。ペンシルヴァニア、アベニュー街は數萬の觀衆を以て埋められぬ。時辰九時を報じて、リンカーンを載せたる馬車は白聖館を出でぬ。妙齡の美人三十四名を乗せたる馬車之が先頭たり。これ三十四州を代表するの意にして、南部の分離諸州をも包含したるなり。義勇兵はリンカーンの乗車を警護し、常備兵は行列の左右に併行して非常に備ふ。リンカーンと同車せるは前大統領ビュカナンとす。斯くて中央政廳に達するや、二人手を携へて石階を登り行きぬ。ビュカナンは顔色蒼白にして憂色を帯び、リンカーンは稍紅色を呈し、緊く口を結んで大決心の存するを示せり。

リンカーンは即位の辭を陳ぶべく、中央政廳東玄關前の壇上に立ちぬ。三萬の會衆は何事をか説き出づると耳を傾けぬ。會衆の中には善銃者あり。一哩の遠方より壇上の人の胸心を狙撃して過たすと稱するもの三五人に止まらず。敵も味方も之を知りぬ。リンカーンも亦之を知れり。會衆の心は自から戦きぬ。各國民全體の心は打ち慄ひぬ。リンカーンは靜に草稿を取出し、明晰なる音調を以て説き出

しぬ。これ有名なる就職演説にして世界雄辯家の大演説中の一に數へらるゝものなり。此小傳紙數限りあり、其全部を掲ぐる能はずと雖、左に其要點を譯出して讀者に示すべし。

南部諸州の人民中或は共和黨政府の執政を以て其身體財産の安全に危害を及ぼすべしとの疑懼を抱くものあるに似たり。これ謂なきの杞憂なり。却つて之に反對の證據多々なる事は、少しく實際に注意する人々の容易に知るを得る所ならん。余が是までなせる演説筆記中にも此等の證據は枚舉に遑あらず。余は諸州内に現存する奴隸制度に干渉を加へんとするの意思を有せず。余は、又余に斯くの如き法律上の權利ありとは信せず。余を選擧せる人々も余が屢、公開の席上に於て此意を言明したるを知り、之を知りて余を選擧したるものなり。……されば新政府の爲めに諸州中、何れの黨、何れの派も、其身體財産の安全を危害せらるゝことなきのみならず、却つて其保護を受くべきものなり。則ち諸州が適法に要求する所の保護は其理由の如何を問はず、我憲法と法律とに抵觸せざる限り、喜んで之を與ふべく、黨派の甲たり乙たるを問はざる

なり。

是より先、數、人心を脅したる聯邦の分裂は、今や實際に企てられて天下を驚かしたり。然れども普通法及び憲法を正當に解釋すれば、余は諸州の聯合は永久的なるを主張せんとす。苟くも正當政府にして其憲法中に自ら政府の終滅に處するの規定を存するものあるを見ず。我國憲法の明文を實行して止むことなくんば聯邦は永久にして解散の時機あるべからず。故に憲法中に規定せざる行動に出づるにあらざれば聯邦を破壊するは不可能なり。

假に合衆國を以て正當國家にあらずして、單に契約の性質を有する諸州の結合に過ぎずとなすも、一二の州が縦に之を解散するを得べきや。縦令一二の州が之を破壊し得るとするも、法律上之を無効の契約となすには參加諸州全體の同意を要すべし。此一般原則より之を判すれば、法律上我聯邦は永久的なりとの解釋は、聯邦の歴史に依つても亦證明せらるゝものと云ふべし。

我聯邦は憲法よりも古し。聯邦の成れるは、一七七四年、聯合條規議定の時に在り。次で一七七六年、獨立の宣言によりて更に成長し、後一七七八年の聯邦條規

によりて、諸州は明文を立て、聯邦の永久不滅たるべきを約束し、同年憲法を制定するに當り、其最大目的は一層完全の聯邦を組織するに在りき。今若し諸州の一二にして適法に此聯邦を破壊するを得べしとせば、吾人の聯合は其時よりも不完全となれるものなり。即ち我憲法は其神髓たる永久性を失へるものと謂ふべし。

以上の見解を以て果して謬なとせば、聯邦の何れの州と雖、自家の發意を以て適法に我聯邦より脱出するを得ざるものなり。縱令此種の決議をなし、命令を出すと雖、法律上凡て無効なりとす。故に一州或は二三州にして合衆國の權威に對して此等不法の行動をなすものあらば、其事情に従ひ、之を叛亂若くは革命と見做さざるべからず。

是に於て余は以爲らく、我國の憲法及び法律に従へば、此聯邦組織は不可壞のものなりと。而して余は微力のあらん限りを盡して、此聯邦の諸法律の各州に施行せられ、一州と雖敢て或は遺漏なきを期せん。これ實に憲法の余に命ずる所たり。余は此義務を盡すに當り、我正常の主人即ち合衆國民が之を拒む

か、或は適法の方法を以て他の處置を命ずるにあらざるよりは、全力を以て之に當らんとす。何となればこれ専ら余の義務にして、我義務は十分に之を盡さざるべからざればなり。

余は世人が以上の余の言説を以て徒に擬勢を張るものと見做さざるべきを信ず。これ實に我聯邦當初の目的にして、吾人は憲法上常に此目的を擁護すべき義務を有するものなり。

個人の權利及び少數者の權利は憲法の條規により確保せらるるを以て、之に關して爭議の起るべき餘地なきなり。然れども實際政治を行ふに當りては、種種の問題の意外の邊より起るを以て、豫め法律を以て一々之に應ずる規定をなすは望み得べからず。逃亡奴隸は州政府之を捕縛して裁判所に引渡すべきや、或は中央政府之をなすべきや、憲法の明文之を規定する所なし。聯邦外の地方の奴隸制度は國會之を擁護せざるべからざるや否や、憲法亦明かに規定する所なし。此種の問題より種々憲法上の爭論を惹起し來る。之を決するは國民の投票により、多數少數の意見を測り、少數を捨て、多數に従ふの外に道なき

なり。

此場合に於て少數者服従せざる時は、多數者服従せざるべからず。少數者多數者共に相譲らざる時は、國家は無政府とならざるべからず。無政府を避けんと欲せば、二者孰れか服従せざるべからず。此際少數者にして服従を欲せず、分離を企つるあらば、これ自滅の先例を作るものなり。其理他なし。他日或る問題に關し、少數者中に少數多數の意見分立するに當り、其多數者が少數者に司配せらるるを肯んせざる時は、少數者は又々分離すべければなり。例へば我聯邦より分離したる南部同盟の如し。彼等今我聯邦を去るの辭柄は、即ち一二年の後、彼等の中の少數者が其同盟を脱出するの辭柄たらざるを得んや。南部諸州の利害果して永久分離の機なきまでに爾く親和密接なりや。今の分離を可とするの精神は即ち他日の分離を是とするの精神のみ。此分離心の中心は無政府主義に外ならず。

今や我國の一方は奴隸制度を正當なりと信じ、之を普及せしむべしと主張し、他の一方は之を以て不正なりとし、普及せしむべからずといふ。兩者實際の論

點は是のみ。地理上より言ふ時は、南北共に分離する能はず。兩者共に南と北とに遠ざかり行く能はず。又南北の間に長城を築く能はず。夫婦は離婚して東西に行き相見ることなきを得べし。我南北諸州は之に倣ふ能はず。永久に相面して立たざるべからず。平和か。敵對か。孰れかの道に於て兩者の交渉は存續せざるべからず。果して然らば分離前より分離後に一層多く此交渉を圓滿有益ならしむるを得べきや。敵對者間に條約を結ぶは、同胞間に法律を作るより容易なるを得べきや。敵對者間に條約を實行するは、同胞間に法律を施行するより一層簡易なるを得べきや。今假に南北戦を開くとするも、兩者永久に戦ふ能はざるべし。兩者多大の損害を蒙り毫も得る所なくして戦争は止まん。而して再び兩者の頭上に來る問題は今後の交際如何にすべきやに在り。即ち戦後と戦前との兩者の關係は依然として異なるを得ざるなり。

其れよりリンカーンは合衆國の國家は國民の國家にして、其憲法、政府は共に國民の政府、國民の憲法なれば、國民の意思に反する政府は、國民の多數之を排斥するを得べく、國民の利益を害する憲法は國民の力を以て之を改正するを得べき

所以を説き、更に進んで憲法改正、政府更迭の事は、皆平和の手段を以て之を遂行するを得べき所以を詳説し、戦亂の兆ある今日、國民全體の慎重なる考慮を望む旨を切言して壇を下れり。

三萬の會衆は全く彼の熱誠ある雄辯に感服せり。短銃を懐にせる敵黨の壯士も、國家人民を思ふ大政治家の肺肝より迸り出づる至誠の榴彈の下に立ちては、一指を擧ぐる能はざりき。斯くて滿天下の危懼の裡に行はれたる即位式は無事に終り、リンカーンはビーカナンと同乗して白聖館に歸り、新舊の大統領は茲に始めて袂を別ちぬ。

一二 南北戦争

斯くの如く大統領リンカーンの就職辭は分離黨を慰撫すること親切丁寧を極めたれども、頑冥なる彼等の決心を翻す能はざりき。彼等は奴隸制度を鞏固にして米大陸永久の制度たらしむるは暴力及び革命に依るの外道なきを信ずると共に、北部諸州は戦争に訴へてまでも奴隸廢止を主張するの決心なきものと推

斷したり。されば彼等の中雄辯家と聞えたる一人は、公開の席に曰く、北人は怯夫のみ。血を見れば忽ち戦慄して走らん。されば此戦争に流す所の血は我隻手を以て之を掬んで飲み盡さんのみと。されば彼等は戦争起るも南軍は容易に勝利を得べしと信じて疑はず。既にして四月十二日、チャールストンの叛徒は進んでサムター城に迫り、守將アンダーソンに降を勧め、應せざるを見て砲撃を開始す。これ南北戦争第一の砲火なり。既にしてサムター陥落の報南軍に達するや、陸軍卿の職を冒したるウーカーは衆に告げて曰く、今日開始したる此戦争は、何れの日に終局すべきかは、何人も之を知る能はじ。然れども予は敢て明言せんとす。今此所の海風に翻る我軍旗は、來る五月一日前にワシントンの中央政廳の塔上に翻るるを見ん。サムター城陥落後三日を経て、リンカーンは令を發して七萬五千の兵を募る。後ち幾くもなくして、叛徒に與せる南部諸州の港灣封鎖を布告せり。ヴァージニア、アライカンサス、北カロリナ、及びテネシーの四州相次で南部同盟に加はる。是に於て南北の形勢相若き、大亂の戦機全く成る。吾人は今茲に南北戦争史を談する能はず。唯リンカーンが如何なる態度、如何なる政策を以て、此難局に處じ

たるかを知れば足れり。以下少しく之を観察せん。

奴隸制度の存廢は南北戦争の原因なり。リンカーンが終始一貫の主義は、奴隸制度の廢止に在り。されば一八六二年三月六日訓示を發し、諸州の中苟くも漸次奴隸制度を廢止せんと欲するものあらば、合衆國政府は國帑を支出して、奴隸廢止より生ずる公私の損害を辨償すべき旨を宣言したり。後幾もなくして國會に旨を含めて奴隸廢止の二法律を議定せしめたり。一は公然叛亂に與せる諸州の奴隸主に對し、其奴隸を沒收する旨を宣言せるものにして、一はコロムビア地方の奴隸解放令なり。當時内閣員中直ちに全國の奴隸解放令を發すべしとの議を主張するものありしが、リンカーン之を聽かずして曰く、これ昔時羅馬法王が彗星の退去を命じたると同じく、何等實行の効力なきものなれば、徒に世界の嗤笑を買ふに過ぎず」と、其責任を重んじて一事を苟くもせざるの風を見るべし。然れども其一旦心に是と信じたる所は如何なる大事と雖、全責任を一身に負擔して願慮せざるなり。同年七月二十二日、南部諸州全部の奴隸解放を約するの宣言を發したるは正に是なり。此時リンカーンは、豫め之を閣員に諮る時は世上に洩れて

物議を招かんことを憂ひ、獨り沈思して草稿を作り、稿成りて始めて之を閣員に示して唯同意を求めたり。これ實に一八六三年一月一日を以て、叛亂諸州内の奴隸全部に自由を與ふる旨を宣言したるものにして、其一度公布せらるゝや、是非の論鼎沸して天下騒然たり。然れどもリンカーン毅然として動かす。曰く、これ余が深思熟慮の結果至大の責任を負うてなせる所にして、獨り上帝のみ余が謬らざるを知るべしと。

一八六三年一月一日、リンカーンは約の如く叛州全部の奴隸解放令を發す。之に依つて自由となれる奴隸の數實に四百萬とす。リンカーン自ら之を以て十九世紀中の最大事件なりとし、當時の「倫敦スペクテートル」は此宣言書を以て古今の歴史中最も高尚なる政治的文書なりと稱せり。之を人道の上より見る、洵に至言と謂ふべし。

一三 再び大統領となる

一八六四年大統領改選の期到る。リンカーン再び其候補者に立つ。南北干戈を交

へてより、既に四年にして未だ戡まらず。國中リンカーンが軍國の政に不平を懐くもの尠からず。然れどもリンカーン慨然として事功を全うするの志深く、以爲らく、國家危急の際、主治者を更ふるは峻坂に車馬を代ふるが如し。危険はより大なるはなしと。乃ち敢然として再選を要む。反對黨の勢力頗る盛なりしと雖、衆望リンカーンに歸し、全投票二百三十三票の中、二百十二票の大多數を得て當選す。彼は戰雲霏々、人心恟々の際、猶正義を尙ぶの國民多數なるを見て、深く感激し、死を以て匡濟の功を成就せんと決心せり。

是より先、リンカーンは新に五十萬の兵を徴し、グラント、シャーマン、及びシエリダンの諸將之を率ゐて四方に轉戦し、連に南軍を破りつゝありしが、今や我陸軍合せ、七十餘萬に達し、軍艦六百七十隻、大砲四千六百十門を載せて海上の勢を張るに至れり。是に於て南軍の勢日々に盛り、一八六五年四月二日、グラント將軍敵將リーをヴァージニアのピーターズバーグに攻めて之を破り、翌三日リッチモンドを陥れ、逃ぐるを追うて遂にリーを虜にす。南部同盟の大統領戴维斯之を聞いて出奔す。我軍追うて之を捕へ、モンローの堡壘に繋ぐ。是に於て南北戦争終はる。此時

に當りリンカーンは全軍の總督として後方に在りしが、リッチモンド陥るを聞くと、直ちに輕裝して之に赴く。左右に従ふもの唯水兵數人のみ。市民初めは之を知らず。既にして彼を知れるものあり、衆に告げて曰く、彼處に十二三歳なる小兒の手を引き來れるは、正に大統領リンカーンなりと。其報全市に傳はるや、市民堵の如く集り來り、街上の通路を塞ぐに至りしかば、兵士を出して警戒し、僅に道を通ずるを得たり。此時黒人の老若男女先を争うてリンカーンの前に來り、感泣跪拜して再生の恩を謝するもの幾百人なるを知らず。

リンカーンは先づ、ウェイツェル將軍の陣營を訪問して將軍の勞を稿ひ、其れより市内を巡視せしが、叛軍北くるに先ち、民家を焼きて明を取りしかば、餘燭全市を蔽うて日色慘憺たり。加之、叛徒の餘類市中に潜伏するもの尠からざれば、危險言ふべからず。リンカーン平然として市中を一巡して、ポイント市に歸り、後數日、夫人と副統領ジョンソンとを伴ひて再びリッチモンドを巡視し、後初めてワシントンに歸れり。

一四 戦局収まる

是より先リンカーンは戦局の大勢定まるを見るや、國會に旨を授けて奴隷禁止の條項を憲法に追加する方法を執らしむ。國會は則ち憲法修正の議を決し、一八六五年二月一日、修正案を聯邦諸州の立法部に提出し、其承認を得たり。これ奴隷禁止の條項を初めて憲法に明記したるものにして、憲法修正第十三條として世界に有名なるものなり。今参考の爲め全文を左に掲ぐべし。

第一節 適法の判決に依り、犯罪の處罰として科せらるるものを除く外、奴隷其他不任意の使役は、合衆國又は其管轄に屬する場所に存すべからず。

第二節 議會は適當の法律を制定し、本條を施行するの權を有すべし。

當時叛亂未だ鎮定に至らざりしかば、南部九州は與からずと雖、聯邦三十六州中二十七州の立法部は悉く之を承認したり。是に於てリンカーンの目的は全く成就せり。戦局収まり、リッチモンドよりワシントンに歸るや、敵も味方も國民の慈父

としてリンカーンを歓迎しぬ。州議員、國會議員より大統領の選舉競争に至るまで、幾多の辛苦を重ね、遂に大亂の難局に處して辭せざりし所以のものは、率土の濱、一介の奴隷あるを見るに忍びずとの赤心に出でしのみ。其心既に一人の奴隷に忍ぶ能はず。焉ぞ大戦を起して數十萬の同胞を殺すに忍びんや。大戦の起れるは時の勢なり。且つ其戦や人道と無道との戦なり。無道をして人道に勝たしめば、億萬の生靈は萬歳の後まで其禍を被らざるべからず。これ豈にリンカーンの得て忍ぶ所ならんや。南北戦争終はり、合衆國政府戦時の死傷を精査するや、北軍のみにて戦死者三十萬、負傷者二十萬なりしと。之を南軍の死傷に合すれば、總計百萬人を超えたらん。然れども之が爲め奴隷の自由を得たるもの四百萬人、其子孫に及べば其幾千萬なるを知るべからず。加之、此大戦の後に至り、天地間永久に奴隷なるものゝ存在を許さざるの大義炳焉として世界に輝き出でたり。史家或はリンカーンを以て人道上、基督に次ぐの偉功ありとなすは、其故なきにあらざるなり。而して此人類の恩人が功業僅に成りて其席未だ暖まらざるに、忽ち凶徒の毒手に斃るるを見るに至つては、吾人徐に十字架上に磔死せる基督を懷はざる、

を得ざるなり。

一八六五年四月十四日、ワシントンなるフッド座の興行主は大統領とグラント將軍とを招待し一夕の觀劇を乞ふ。是より先大統領暗殺の陰謀ありとの風説屢起り、人心甚だ安からず。リンカーンの知友皆衆人雜沓の場に近づくの不可なるを説き、リンカーンに行く勿れと勸む。興行主は觀客を釣らんが爲めに、リンカーン及びグラントの名を劇箋に附記して之を衆人に頒つ。グラントは危険を慮り、直ちにワシントンを去る。リンカーンは衆人が我の來るべきを聞いて入場せるに、若し其來觀なきを見れば、必ず失望すべしとて友人の止むるを聽かず、夫人及び二人の親友を伴ひて午後九時前に劇場に入る。場中既に立錐の地なし。リンカーンの入り來るを見るや、滿場起立して歓迎を意を表す。

既にして劇齣漸く進むで佳境に入り、觀衆の耳目悉く舞臺の人形に向ふや、豁然耳を掠むるの音あり。萬目期せずして大統領席を仰ぎ見れば、其人既に床下に仆れて見るべからず。徒に左右の男女叫喚狼狽の狀を見るのみ。大統領リンカーンは狙撃せられたるなり。

是より先俳優ブリスなる者のあり、南部の叛徒に使囃されて、屢リンカーンを暗殺せんとしたれども、其志を得ず。此日リンカーンが劇場に來るべきを聞き、大に喜び、同志數人と計を戮はせ、凶行後リッチモンドは逃走すべき順序までも畫策して、馬を劇場の前庭に繋ぎ置き、其夜九時頃、竊にリンカーンの座席に近づきけるに、侍者戸側に立てり。因つて其名刺を出し、面會を乞ふ。眞似して外戸を排し、つゝ内を窺へば、リンカーン方に手を欄干に横へつゝ壇上の人物を凝視するの際なりしかば、直ちに進んで内戸を排し、短銃を以てリンカーンの後頭部を撃ち、其倒るゝを見るや、直ちに走りて舞臺の中央に立ち、暴君には常に斯くあれよと叫び、忽ち身を翻して場外に踊り出で、前庭の馬に乗りて何處ともなく逃げ去りたり。人道の擁護者にして、仁慈の化身たるリンカーンは斯くの如くして、其身を終りぬ。訃報一度傳はるや、白人といはず、黒人といはず、慟哭して其父母を喪ひたるが如し。スタウ女史當時の狀を記して云く、

青天忽ち妖雲起りて、日月も光を失ひたらん如く、四方の鍾樓に響く弔鐘の音は打たざるに自から鳴るかど疑はれ、梢に戦く風の聲、谷間行く流の響も何と

なく哀れに聞え、吾も人も其父母を失ひたらん如く、其恩師を喪ひたらん如き心地しき。

リンカーンの遺骸は特別汽車に之を載せ、イリノイ州なるスプリングフィールドの舊居に之を葬る。ワシントンを去ること一千五百哩なり。沿道の人民泣いて柩車を送るもの雲の如く、千五百哩の長程葬儀の行列の連続せるが如し。英國民も亦深く哀悼の意を表し、ヴィクトリア女皇は親翰をリンカーン夫人に贈りて慰問せられたり。大宰相ビーコンスフィールド卿は議會に於て追悼の辭を陳べて曰く、リンカーンの生涯は至誠を以て一貫しぬ。彼は之を以て國民の親愛を受け、世界の人心を動かしたりと。

一五 其性行逸事

リンカーン初め第一回大統領選挙の時、共和黨委員會の爲めに其候補者に指名せらるゝや、知友及び共和黨委員と水を酌むで相祝す。リンカーンは嚴格なる禁酒家なればなり。其日午後外出して家に歸り、夫人の室に入りて獨り休息中、仰い

て前面の装鏡を見れば、二個の我姿映出せり。之を凝視すれば、一方の面色稍蒼白なり。リンカーン不快を感ずること少時なりしが、會知友の來訪に接して之を忘れたり。翌日外出中、不圖此事を思ひ出して家に歸り、前日の如く鏡前に立てば、兩個の人影を見ること昨日と異らず。是に於てリンカーンは之を以て視覺上の一現象に歸し、怪むべきにあらずして其儘打忘れ居たりしが、數日を経て思ひ出し、之を試むるに曩日の如くならず。因つて之を其夫人に語りしに大に怪んで不安の色あり且つ曰く、これ卿が二回大統領に選挙せらるゝの兆なり。然れども兩影の中、一方の蒼白なるは二回の大統領任期中不慮の事あるの兆にあらずやと。後に至りて夫人の豫言悉く中れり。

リンカーンは疑もなく基督教信者たりしと雖、其何派に屬したるやは明かならず。彼は天父の神を信じたり。南北戦争終局後即ち一八六四年十月二十日、大統領の資格を以て全國に感謝會の布告を發せしが、其文に曰く、嗚呼、我等をして宜しく天父に向ひ、國歩艱難の際、凡て今日まで人民を家庭の内に守り、兵士を陣營の外に護り給ひし事を感謝せしめよ云々。リンカーン又聖靈を信じたり。則ち第二

次感謝會布告の文を見るに、願くば聖靈の神、人民の心に降りて之を柔らげ、其殺氣を解かしめ、彼等をして皆平和幸福の民たらしめよ云々の句あり、彼は又母の膝下に在りて聖書を讀み聽かせられたる頃より、深く聖書を信じ、常に人に語つて曰く、天下是より貴きものなし。神が人間に與へ給ひしものの中に、最も貴重なるは實に聖書なりと。然れども人間再生の義に關しては、初め頗る疑を有したるものゝ如く、嘗つて一日熱心なる信者の來り訪ふに當り、彼遽然として問うて曰く、眞に甦りたる徴證とは果して如何と。客曰く、眞に己れの罪を覺り、中心より基督の救を望むものは是なりと。リンカーン聽て暫く默然たりしが、乃ち莞爾として曰く、然らば余も亦幸にして眞の基督教信者たるを得べしと。

天性慈仁の心に富めるリンカーンは南北戦争中の慘禍を見聞して、日夜惻隱の情に堪へざりき。一婦人あり、其夫は南軍の士官にして、我捕虜となれるものなり。一日、リンカーンの許に來り、泣いて其夫を赦さんことを乞ふ。因つて曰く、我夫は信仰深き宗教家なりと。リンカーン婦人の至情に感じ、遂に之を容す、其去るに臨み、之に告げて曰く、汝は今汝が夫の信仰深き宗教家なるをいふ。汝歸りて之を其

夫に告げよ。我見る所を以てすれば、政府が他人の膏血に依つて私腹を肥さんとする人々を助けざるを怨んで、叛旗を樹て、政府と戦ふことを教ふるの宗教は、其何宗たるを問はず、人を導いて天國に行かじむるの宗教にあらずと。

一日軍法會議は二十四名の脱走兵に銃殺の刑を宣言せり。リンカーン刑の執行令狀に署名するを肯んせず。一將校之を諫めて曰く、此輩を殺して軍法の嚴例を示さざれば、我全軍の危険を來さん。少數者に對する慈悲は多數者を殺すの不慈とならん。リンカーン靜に答へて曰く、將軍之を言ふを止めよ。國內には既に血に泣くの寡婦多きに過ぐ。我豈に更に其數を加ふるに忍びんやと。遂に刑の執行を允さざりき。

斯くの如き慈悲深きリンカーンも奴隸賣買の禁を破ぶるものには、秋霜烈日の威を以て臨めり。一日此種の犯罪者の特赦を乞ふものあり。犯人を回護するの辭意詳密を盡せり。リンカーン諸願書を精讀したる後、色を正うして曰く、書中言ふが如くんは犯人の情誠に憐むべきに似たり。余が性又人に忍びざるの弱點あり。人の哀を乞ふものあれば、容易に之を容る。然れども茲に人あり、他に何等の理由